

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第156集

八尾市

# 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ

—寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他—

本文編

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター

久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ

本文編

二〇〇七年三月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第156集

八尾市

# 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ

—寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他—

本 文 編

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター



## 序 文

本書に報告する発掘調査は、久宝寺遺跡の中でも南部に位置する旧国鉄竜華操車場跡地（竜華地区）内の「寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設」建設に伴うものである。平成13年にはじまり、約3年の期間を要した調査の総面積は約25,000㎡、掘削深度4mに及んだ。

今回の調査では、縄文時代晩期から中近世にわたり重層する遺構面を確認し、竜華地区周辺の変遷を知る上で貴重な手掛かりを得ることができた。中でも特筆すべき成果として、弥生時代前期の集落や古墳時代初頭の墳墓群の確認、また、絵画土器や木製盾等の豊富な遺物の出土が挙げられる。

近畿自動車道建設に伴う発掘調査において、昭和57年に出土した準構造船はつとに有名であるが、今回も船舶に関連する遺物が出土しており、地の利を活かして発展した大規模な集落が此処に存在したという、より具体的な証拠を提供してくれた。

最後に、今回の発掘調査および整理事業にご理解とご協力を頂いた大阪府東部流域下水道事務所、大阪府教育委員会をはじめとする関係機関各位に感謝するとともに、今後とも当センターへの御支援をお願いする次第である。

平成19年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市「竜華地区」他に所在する久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府東部流域下水道事務所より財団法人 大阪府文化財センターが以下のように委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、以下のとおりに実施した。

寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）（第1工区）下水管渠築造工事に伴う久宝寺遺跡発掘調査として、平成12年5月18日から平成12年10月31日まで。

寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等土木工事（その1）他に伴う久宝寺遺跡発掘調査として、平成13年4月20日から平成14年3月29日まで。（水処理施設その1・水処理施設その2・長吉立坑・小阪合立坑）を含む。

寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等土木工事（その3）他に伴う久宝寺遺跡発掘調査として、平成14年4月1日から平成16年2月27日まで。

寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設事業に伴う久宝寺遺跡遺物整理として、平成16年4月1日から平成17年3月31日まで。（水処理施設その4）発掘調査を含む。

寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設事業に伴う久宝寺遺跡遺物整理（その2）として、平成17年4月1日から平成18年3月31日まで。

寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設事業に伴う久宝寺遺跡遺物整理（その3）として、平成18年4月1日から平成19年3月30日まで。

3. 現地での発掘調査は、平成12年5月25日から順次実施され、平成16年11月25日をもって終了した。引き続き中部調査事務所において、平成16年11月26日から平成18年9月30日まで遺物整理作業を行い、途中、平成16年12月20日から平成17年3月4日まで発掘調査を実施したが、平成19年3月30日、本書の刊行を以って事業を完了した。

4. 調査は以下の体制で実施し、随時、当財団職員の助言・協力を得た。

## 【平成13年度】

調査部長 井藤 徹

調整課長 赤木 克視

中部調査事務所長 藤田 憲司

調査第三係長 秋山 浩三

技師 中村 淳磯 専門調査員 新垣 香苗

技師 岡本 圭司 専門調査員 永野 仁

技師 後川 恵太郎 専門調査員 山崎 頼人

技師 奥村 茂輝 専門調査員 田之上 裕子

## 【平成14年度】

調査部長 玉井 功

調整課長 赤木 克視

中部調査事務所長 藤田 憲司

調査第五係長 金光 正裕

技師 岡戸 哲紀 専門調査員 新垣 香苗

技師 亀井 聡 専門調査員 永野 仁

技師 後川 恵太郎	専門調査員 菊井 佳弥
技師 奥村 茂輝	専門調査員 手島 美香
	専門調査員 松尾 洋次郎
	専門調査員 川村 恵理
	専門調査員 仁田 恵子

【平成15年度】

調査部長 玉井 功  
調整課長 赤木 克視  
調整係長 森屋 直樹  
主査 山上 弘  
技師 山元 健

中部調査事務所長 小野 久隆  
調査第二係長 金光 正裕  
技師 亀井 聡  
技師 後川 恵太郎  
技師 奥村 茂輝

専門調査員 新垣 香苗  
専門調査員 永野 仁  
専門調査員 菊井 佳弥  
専門調査員 多賀 晴司  
専門調査員 清岡 廣子  
専門調査員 相良 英樹  
専門調査員 小西 絵美

【平成16年度】

調査部長 玉井 功  
調整課長 赤木 克視  
調整係長 森屋 直樹  
主査 山上 弘  
技師 信田 真美世

中部調査事務所長 小野 久隆  
調査第二係長 金光 正裕  
技師 亀井 聡  
専門調査員 菊井 佳弥

【平成17年度】

調査部長 赤木 克視  
調整課長 田中 和弘  
調整係長 芝野 圭之助  
主査 山上 弘  
主任主事 宮本 哲男  
技師 信田 真美世

中部調査事務所長 小野 久隆  
調査第二係長 森屋 美佐子  
技師 亀井 聡  
専門調査員 日野 祥子

【平成18年度】

調査部長 赤木 克視  
調整課長 田中 和弘  
調整第一係長 岡戸 哲紀  
調整第二係長 山上 弘  
主任主事 宮本 哲男  
技師 後川 恵太郎

中部調査事務所長 小野 久隆  
調査第二係長 森屋 美佐子  
技師 亀井 聡  
専門調査員 日野 祥子

5. 木器・金属器類などの保存処理・樹種同定については、中部事務所主査 山口 誠治、専門調査員 仁田 恵子（平成13年4月から16年3月まで）・岩立 美香（平成16年4月から）が行った。

なお、遺物写真については、中部調査事務所主査 片山 彰一・非常勤補佐員 米子 千智が撮影を行った。

6. 調査の実施に当たっては、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人 大阪市文化財協会、財団法人 東大阪市文化財協会、財団法人 八尾市文化財調査研究会、大阪府教育委員会をはじめとして、下記の方々にご指導・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

大野 薫・尾上 実（大阪府教育委員会）、米田 敏幸・瀧 斎（八尾市教育委員会）、原田 昌則・岡田 清一・森本 めぐみ・小川 裕子・坪田 真一・高萩 千秋・西村 公助・樋口 薫（財団法人 八尾市文化財調査研究会）、福永 信雄・若松 博恵（東大阪市教育委員会）、松田 順一郎（財団法人 東大阪市文化財協会）、寒川 旭（独立行政法人 産業技術総合研究所）、仁木 聡（鳥根県教育委員会）、森田 恒之（国立民族学博物館）、和田 晴吾・高 正龍・河角 龍典（立命館大学）、安部 みき子（大阪市立大学医学部）、坂井 秀弥・福宜田 佳男（文化庁）、新聞 義夫（藤井寺市教育委員会）、赤塚 次郎（愛知県埋蔵文化財センター）、安 秀樹・柿田 祐司（石川県立埋蔵文化財センター）、河合 忍（岡山古代吉備文化センター）、藤沢 昌・谷地 薫（秋田県教育委員会）、高木 康晴・真鍋 昌広（香川県埋蔵文化財調査センター）、堀田 啓一（高野山大学）、用田 政晴（滋賀県琵琶湖博物館）、相京 健史・坂口 一・根岸 仁（群馬県埋蔵文化財事業団）、新井 悟（明治大学）、三浦 京子（前橋文化財研究所）、石野 博信（徳島文理大学）、田中 清美・趙 哲済・南 秀雄・大庭 重信・小田木 富慈美（財団法人 大阪市文化財協会）、松井 章・光谷 拓実・次山 淳（独立行政法人 奈良文化財研究所）、五十川 伸矢（京都橘女子大学）、福海 貴子（小松市教育委員会）、都出 比呂志・寺前 直人（大阪大学）、中村 大介（大阪大学大学院）、小田木 治太郎・山内 紀嗣（天理大学付属天理参考館）、梅崎 恵司（北九州市芸術文化振興財団）、上原 真人（京都大学）、南 武志（近畿大学）、廣瀬 覚・田中 元浩（立命館大学）、杉山 浩平（東京大学）、工楽 善行（狭山池博物館）、市川 秀行（狭山市教育委員会）、安楽 勉（長崎県教育庁）、河 延龍（滋賀県立大学）、林 紀昭（関西学院大学）、有田 美幸（国際協力センター）、西谷 義昭（今宮高校教諭）、中濱 秀徳（大阪府立大手前高等学校）、崔 完奎（韓国圓光大学）、李 相吉（韓国慶南大校）、金 玉年（韓国釜山大学）、崔 盛洛・李 榮文・平群 達哉・丁 英姬（韓国木浦大学）、梁 正錫（韓国水原大学）、李 盛周・朴 珍賢・李 允楨・朴 美貞（韓国慶南発展研究院）、韓 盛旭（韓国全南文化財研究院）、金 雄信・俞 炳隣・高 在培・徐（奉寿韓国畿甸文化財研究院）、韓 盛旭（韓国松廣寺聖寶博物館）、金城重（ユネスコ研修）、Mr. Abdulaziz Mansys Alomary（サウジアラビヤ）、アブドゥル アジド（JICA研修）

7. 遺物の材質同定に当たっては、以下の方々のご教示を賜った。なお、自然科学的分析の委託を以下のように行った。

獣人骨鑑定	大阪市立大学医学部解剖学第2教室	安部 みき子
石材鑑定	近畿大学理学部	富田 克敏
植物珪酸体分析	株式会社バリノ・サーヴェイ、株式会社パレオ・ラボ	
花粉分析	株式会社古環境研究所、株式会社バリノ・サーヴェイ	



珪藻分析	株式会社古環境研究所、株式会社バリノ・サーヴェイ
蛍光X線分析	株式会社古環境研究所
C <sup>14</sup> (AMS)	株式会社パレオ・ラボ
C <sup>14</sup> (液体シンチレーション)	株式会社パレオ・ラボ、株式会社バリノ・サーヴェイ

さらに、以下の方々に玉稿を賜った。

赤色顔料同定-朱-の産地同定	近畿大学工学部	南 武志
液状化現象の痕跡	産業技術総合研究所	寒川 旭

8. 本書に掲載した現場写真は、各調査担当者が撮影した。
9. 本文の執筆については、第1章を森屋 美佐子・亀井 聡、第7章を奥村 茂輝・亀井、その他を亀井が行った。
10. 本書の総編集は、すべてデジタルにより森屋・亀井が行った。
11. 現地調査および報告書作成において作成した写真・実測図等の各種記録図面・デジタルデータは、財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構平面図において使用した測地系については、日本測地系による国土座標の第Ⅵ座標系に基づき表記方法を採用している。なお、本書で用いた座標は、m単位である。
2. 本書で使用する方位は、国土座標における座標北を示す。なお、座標北と調査地周辺の磁北との偏位角は $N - 6^{\circ} 26' - W$ 、真北との偏位角は $N - 0^{\circ} 14' - E$ である。
3. 標高はすべてT.P.（東京湾平均海面）による表示を行った。
4. 遺構名については、現地調査時に付与したすべての番号を再整理した。本書では、帰属する大まかな遺構面を示す2桁の番号と、各遺構面での通し番号を組み合わせた5桁（第8面のみ6桁）の番号を使用する。このコード化した番号と遺構種類を組み合わせて正式の「遺構名」とするが、便宜的に遺構種類を省略して表示する場合がある。新遺構名を設定する場合の基準は、規模の大小に関わらず、完結するまでを1つの遺構とする。溝・水路・高まり等は、屈曲の如何に関係なく、連続する限り同一遺構とする。しかし、溝のように分岐する場合、基幹となる遺構にのみ同一名を与え、付属的なものは分岐点以降に新遺構名を設定する。畦畔の場合、幹線は確認しうる限りを同一名称とし、支線はそれぞれ別名称とする。この支線も連続する限り同一名とし、交錯するものに対して新名称を設定する。

例外として、鋤溝や畝間溝のように遺構の境界が不明瞭で、且つ集合体として意味を成すものについては、複数の遺構に対して1つの名称を与える。現地では名称を与えなかった遺構でも、説明上必要と判断したものについては、上記に則って新たな遺構名を設定した。

溝・流路・高まり等のように複数の遺構面に同じような遺構がみられる場合、それが新出の遺構ではなく「1つの遺構が変化したもの」と捉えられる時は、下層（最古）の遺構番号を継承している。ただし、遺構種類については、たとえ同一遺構番号であっても、遺構形状が異なれば遺構面毎に区別を行った。遺構種類を遺構名の一部と考えると、名称が変化することは本来的には不適当のようであるが、本書では遺構番号による整合を重要視し、遺構種類は変化を表す二次的情報とする。

また、複数の遺構の集合体である建物等の場合、全体を総称する遺構名を設定する。例外として、調査時の印象を損なわないために墳墓の名称については現地での遺構名を踏襲する。

5. 遺構実測・遺物取り上げなどに使用した地区割については、当初、財団法人 大阪文化財センター『発掘調査マニュアル』（1988）に依拠していたが、途中、財団法人 大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）が導入されたため、混乱を生じないものについては後者を優先して作業を行った。

なお、双方のマニュアルで表記を義務付けている当該調査区の第Ⅰ区画はG6、第Ⅱ区画は5である。現地における遺構実測図や遺物取上げ、その後で作成した台帳では上記2区画の表示を省略している。

6. 遺物番号は、材質の区別なく図版毎に通し番号を設定した。また、本文中の挿図と写真図版における遺物番号はすべて一致する。なお、写真のみを掲載する遺物が数点あり、観察表に明記する。
7. 掲載する遺物実測図の縮尺は、土器類1/4、大型の石器1/2、石鏃や銭貨等の小型品2/3、木製品1/6を基準とし、遺物の寸法に合わせて整数値による縮尺を適宜用いた。
8. 遺物実測図中のトーンは、灰色が被熱・煤、赤色が赤色顔料、黒色が欠損を示す。それ以外に使用する場合は、別途、図中に凡例を記す。

9. 遺構実測図は節毎に全体平面1/1250を掲載し、必要に応じて1/150から1/600までの部分拡大図を作成した。本書に掲載した遺構実測図では文中に表れる遺構名のみを表示し、遺物の出土や記録を行ったすべての遺構名称については付図に記載する。

10. 遺構断面図を作成した位置については、遺構平面図あるいは全体平面図の該当遺構に鉤形で示す。

なお、鉤形の先は見通し方向を指す。他の遺構面や遺構の断面が参照可能な場合は断面位置を示し、明朝体で遺構名を区別する。遺構断面図において斜線パターンを貼付するものは、その遺構に対する地山を表現する。埋土および掘り方において基本層序との対照が可能な場合は同一のトーンを貼付し、層名を省略する。特に土質が異なるもの以外は注記も省く場合がある。

11. 調査・整理における土層や土器の色調観察については、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究所 色票監修の最新版に依拠した。

12. 本書の挿図および写真は、すべてデジタルによるものである。遺構実測図は現地実測図を加筆・修正した後、スキャニングしたものをデジタルトレースした。遺物実測図のうち土器類を含む大半は、従前通り手で実測したものをスキャンし、画像をイラストレーター用データに変換してから外形線等の加筆をデジタルトレースで行った。打製石器と木製品の一部はデジタル撮影した写真画像の歪みを補正した後、画像のデジタルトレースを行い、これを実測図とした。写真については、遺構・遺物ともにフィルム撮影した写真ネガを紙焼きし、およそB6版サイズで600dpiの解像度を持つデータになるようスキャンした。写真データについては、写真室担当者による明るさ・コントラストの調整を行っている。

13. 02-1調査区の全体断面図は、長大なために付図とした。図中の一部には、現地実測によるラミナ観察のデジタル化したものを実験的に貼付した。調査の関係上、複数の担当者が土層観察を行ったため、同一層位と認識したものであっても記載内容に大きな差違が生じている。細分層毎の詳細を明示しても場所による変化等の正確な情報は伝えられないと判断し、各層の代表的な土質を挙挙することにした。必要な場合は原因を参照されたい。

14. 本書において新たに設定した遺構名は、各遺構面の全体図に明記し、付図として編集した。掲載遺構はゴシック体、未掲載は明朝体で記し、区別を行う。

15. 写真図版に掲載する各遺物や遺構の縮尺率は不同である。

16. 文章中における表現方法や仮名遣いなどについては、執筆者の意向を尊重して、あえて統一を行っていない。

17. 遺構・遺物の記述・観察・器種分類に関しては、下記に記す文献を主に参考とした。

『木器集成図録-原始・古代編-』奈良国立文化財研究所

『木器集成図録-中世編-』奈良国立文化財研究所

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

『古式土師器の実年代を探る』(財)大阪府文化財センター

『木と人』八尾市立歴史民俗資料館

『弥生式土器の様式と編年-近畿編I-』寺沢 薫・森岡秀人編著、木耳社

『弥生文化の研究』金岡 恕・佐原 真編、雄山閣

『古代の土木技術』大阪府立狭山池博物館

『縄文・弥生移行期の東日本系土器』考古学資料集9、小林青樹、国立歴史民俗博物館

『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣

# 本文目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯・経過と方法	1
第1節 調査の経緯と経過	2
第2節 調査の方法	5
第2章 位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	12
第3章 基本層序と遺構面	24
第1節 02-1調査区周辺	24
第2節 その他の調査区	34
1. 00-1調査区	
2. 01-3調査区	
第4章 縄文・弥生時代の遺構と遺物	37
第1節 第10・9面	37
1. 概要	
2. 第10・9面の遺構と遺物	
第2節 第8面	41
1. 概要	
2. 第8b面の遺構と遺物	
3. 第8a面の遺構と遺物	
第3節 第7面	91
1. 概要	
2. 第7-2面の遺構と遺物	
3. 第7-1面の遺構と遺物	
第4節 第6面	138
1. 概要	
2. 第6-2面の遺構と遺物	
3. 第6-1面の遺構と遺物	
第5章 古墳時代の遺構と遺物	157
第1節 第5面	157
1. 概要	
2. 第5-2b(2)面の遺構と遺物	
3. 第5-2b(1)面の遺構と遺物	
4. 第5-2面の遺構と遺物	
5. 第5-1(2)面の遺構と遺物	
6. 第5-1(1)面の遺構と遺物	
第2節 第4面	492
1. 概要	
2. 第4-2面の遺構と遺物	
3. 第4-1面の遺構と遺物	
第6章 古代～近代の遺構と遺物	519
第1節 第3面	519
1. 概要	
2. 第3-3面の遺構と遺物	
3. 第3-2面の遺構と遺物	
4. 第3-1面の遺構と遺物	

第2節 第2面 .....	556
1. 概要	2. 第2面の遺構と遺物
第3節 第1面 .....	573
1. 概要	2. 第1-4下面の遺構と遺物
3. 第1-4面の遺構と遺物	4. 第1-3面の遺構と遺物
5. 第1-2面の遺構と遺物	6. 第1-1面の遺構と遺物
第4節 第0面 .....	609
1. 概要	2. 第0面の遺構と遺物
第7章 その他の調査区 .....	614
第1節 00-1調査区 .....	614
1. 縄文時代から弥生時代前期	2. 弥生時代中期から後期
3. 古墳時代初頭から古代	4. 中世以降
第2節 01-3調査区 .....	625
第8章 まとめ .....	633
第1節 久宝寺遺跡竜華地区（水みらいセンター周辺） .....	633
第2節 その他の調査区 .....	641

## 分析・考察編・一覧表 目次

第1節 大阪府久宝寺遺跡における蛍光X線分析	株式会社古環境研究所 金原 正子、株式会社パレオ・ラボ 藤根 久
第2節 久宝寺遺跡出土植物遺体について（財）大阪府文化財センター	保存処理室 山口 誠治
第3節 久宝寺遺跡48号墳出土の赤色顔料-朱-の産地推定	近畿大学理工学部 南 武志
第4節 久宝寺遺跡出土の人骨および動物遺体に関する鑑定	大阪市立大学医学部解剖学第2教室 安部 みき子
第5節 放射性炭素年代測定	パレオ・ラボAMS年代測定グループ 小林 絃一・丹生 越子・伊藤 茂・山形 秀樹・ Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・藤根 久
第6節 久宝寺遺跡における植物珪酸体および微化石分析	株式会社古環境研究所 金原 正子
第7節 久宝寺遺跡(竜華地区)で認められた液状化現象の痕跡	産業技術総合研究所 主任研究員 寒川 旭
第8節 久宝寺遺跡出土サヌカイト質石器・剥片の石材	富田 克敏
第9節 久宝寺遺跡における古墳時代出現期の土器について	杉山 拓己

# 挿 図 目 次

- 図1 調査地の配置  
図2 地区割の概念  
図3 00-1 調査区 調査位置と地区割  
図4 01-3 調査区 トレンチ配置  
図5 01-1~01-3, 02-1・3, 04-1 調査区 地区割  
図6 01-1~01-3, 02-1・3, 04-1 調査区 トレンチ配置および断面観察位置  
図7 調査地周辺の地形分類  
図8 地形分類の凡例  
図9 調査地周辺の遺跡・調査地点分布  
図10 01-4 調査区 東壁断面  
図11 01-4 調査区 南壁断面  
図12 02-2 調査区 中央断面  
図13 04-1 調査区 西壁断面  
図14 04-1 調査区 西壁断面土色  
図15 00-1 調査区 断面  
図16 01-3 調査区 断面  
図17 第10面 調査区中央 遺構平面  
図18 第9面 遺構分布  
図19 09003流路 出土遺物  
図20 第8b層 遺構分布  
図21 08002~08004溝 周辺遺構平面、08002溝 出土遺物  
図22 08002~08004溝、07002高まり 断面  
図23 08008溝 周辺遺構平面  
図24 08007・08008溝、080894溝 断面  
図25 08007・08008・08009溝、080023堅穴建物、08025ピット 出土遺物  
図26 08009溝 平・断面  
図27 08003・080024堅穴建物、080058~080060・080063・080065・080120ピット 平・断面  
図28 080025井戸 平・断面  
図29 080025井戸 出土遺物  
図30 080121~080123溝 周辺遺構平面  
図31 080121・080122溝、080128・080130・080132土坑 平・断面  
図32 080133土坑 平・断面  
図33 080180ピット 出土遺物  
図34 080219・080221土坑 周辺遺構平面  
図35 080219・080221土坑 平・断面  
図36 080226~080231土坑 周辺遺構平面  
図37 080226土坑 平・断面  
図38 080226・080227土坑 出土遺物  
図39 080231土坑 平・断面  
図40 080591溝、080592流路 周辺遺構平面  
図41 080236・080239・080261・080591・080931溝、080592流路 断面  
図42 080237・080591溝、080250ピット、080592流路 出土遺物  
図43 080613・080615溝 周辺遺構平面  
図44 080593・080613・080615・080870溝、080594落込 断面  
図45 080615・080609溝 出土遺物  
図46 080595・080597・080598・080655土坑 平・断面  
図47 080758ピット 平・断面  
図48 080807土坑 平・断面  
図49 080807・080809土坑 出土遺物  
図50 第8b層 出土遺物  
図51 第8a面 遺構分布  
図52 080893~080895・080898溝 周辺遺構平面  
図53 080003・080004・080007・080008・080893~080895・07001・07002・07010溝、07055高まり 断面  
図54 080894・080898・080900溝 断面  
図55 080894~080896溝 出土遺物  
図56 調査区東 周辺遺構平面  
図57 080906~080908溝 断面  
図58 調査区西 周辺遺構平面  
図59 080916・080931溝 断面  
図60 080965溝 断面  
図61 080916・080918・080931溝、080960・080966落込、080915炭化物集中部 出土遺物  
図62 調査区中央 周辺遺構 平面  
図63 080920落込、080919・080922・080927溝 断面  
図64 080919溝、080920落込 出土遺物  
図65 調査区西 周辺遺構平面  
図66 080967・080969・080970・080973溝 断面  
図67 080886溝、080891・080892畦畔、080897堤 平面  
図68 第8a層 出土遺物(1)  
図69 第8a層 出土遺物(2)  
図70 第8a層 出土遺物(3)  
図71 第7-2面 遺構分布  
図72 調査区東 周辺遺構平面  
図73 07001・07002・07007溝、080895溝 断面  
図74 07001・07002溝 出土遺物  
図75 07008微高地 遺物出土状況  
図76 07008微高地 出土遺物(1)  
図77 07008微高地 出土遺物(2)  
図78 07008微高地 出土遺物(3)

- 図79 07008微高地 出土遺物(4)
- 図80 07008微高地 出土遺物(5)
- 図81 07018溝 平・断面
- 図82 07013・07014溝 平・断面
- 図83 第7-2層 出土遺物(1)
- 図84 第7-2層 出土遺物(2)
- 図85 第7-2層 出土遺物(3)
- 図86 第7-2層 出土遺物(4)
- 図87 第7-1面 遺構分布
- 図88 調査区東 07055高まり 周辺遺構平面
- 図89 07002溝、07056堅穴建物 断面(1)
- 図90 07002溝、07056堅穴建物 断面(2)
- 図91 07001・07002溝 断面
- 図92 07001溝、07016ピット、07091畦畔、07055高まり出土遺物
- 図93 07056堅穴建物 平・断面、遺物出土状況
- 図94 07056堅穴建物 07057~07060柱穴、07061・07062炉 平・断面
- 図95 07057~07060柱穴、07061・07062炉 断面
- 図96 07056堅穴建物 出土遺物(1)
- 図97 07056堅穴建物 出土遺物(2)
- 図98 07056堅穴建物 出土遺物(3)
- 図99 07056堅穴建物 出土遺物(4)
- 図100 07056堅穴建物 出土遺物(5)
- 図101 07057~07060柱穴 出土遺物
- 図102 07056堅穴建物 遺物出土状況
- 図103 07064井戸 平・断面
- 図104 07064井戸 出土遺物
- 図105 07011大畦畔 周辺遺構平面
- 図106 07011大畦畔、07053・07067溝 断面
- 図107 調査区中央 周辺遺構平面
- 図108 07017大畦畔、07079溝、07083・07085 畦畔 断面
- 図109 07017大畦畔、07079溝、07085畦畔 平・断面
- 図110 07019溝 平・断面
- 図111 06001溝 平・断面
- 図112 06003溝、06005~06007土器集積 出土遺物
- 図113 第7-1層 出土遺物
- 図114 第6-2面 遺構分布
- 図115 06015大畦畔、06017流路 出土遺物
- 図116 07001溝、07055高まり 平・断面
- 図117 07055高まり 遺物出土状況
- 図118 07055高まり 出土遺物(1)
- 図119 07055高まり 出土遺物(2)
- 図120 07055高まり 出土遺物(3)
- 図121 07055高まり 出土遺物(4)
- 図122 07055高まり 出土遺物(5)
- 図123 07055高まり 出土遺物(6)
- 図124 07055高まり 出土遺物(7)
- 図125 第6-2層(1) 出土遺物
- 図126 第6-2層(2) 出土遺物
- 図127 第6-1面 遺構分布
- 図128 06027大畦畔 出土遺物
- 図129 07055高まり・07001落込 平面・遺物出土状況
- 図130 07001落込 出土遺物
- 図131 第6-1層 出土遺物(1)
- 図132 第6-1層 出土遺物(2)
- 図133 第5-2b(2)面 遺構分布
- 図134 05006流路・落込周辺遺構 平面、05001・05003ピット・05004溝 断面、05001ピット 出土遺物
- 図135 05006流路・落込 断面(1)
- 図136 05006流路・落込 断面(2)、遺物出土状況
- 図137 05006流路・落込 出土遺物(1)
- 図138 05006流路・落込 出土遺物(2)
- 図139 05006流路・落込 出土遺物(3)
- 図140 05006流路・落込 出土遺物(4)
- 図141 05006流路・落込 出土遺物(5)
- 図142 05006流路・落込 出土遺物(6)
- 図143 05006流路・落込 出土遺物(7)
- 図144 05006流路・落込 出土遺物(8)
- 図145 05006流路・落込 出土遺物(9)
- 図146 05006流路・落込 出土遺物(10)
- 図147 05006流路・落込 出土遺物(11)・05308溝 出土遺物
- 図148 05007土坑 出土遺物
- 図149 05007土坑 平・断面
- 図150 調査区中央 堅穴建物群 周辺遺構平面
- 図151 05008土坑 平・断面、遺物出土状況
- 図152 05008土坑 出土遺物
- 図153 05009井戸 平・断面
- 図154 05009井戸 出土遺物
- 図155 05010ピット 平・断面
- 図156 05010ピット、05011土坑 出土遺物
- 図157 05015暗渠 平・断面
- 図158 05015暗渠 出土遺物
- 図159 05017土器集積 出土遺物
- 図160 05020堅穴建物 炭化材(検出) 出土状況・断面
- 図161 05024堅穴建物 05025炉 平・断面
- 図162 05024堅穴建物 05025炉 出土遺物
- 図163 05032堅穴建物 05033炉・05034土坑 平・断面
- 図164 05032堅穴建物・05034土坑 出土遺物
- 図165 05035堅穴建物、05036炉 05037~05042ピット 平・断面

- 図166 05043竪穴建物 05044炉、  
05045～05048ピット 平・断面、  
05043竪穴建物 出土遺物
- 図167 05049竪穴建物 05050炉、  
05051～05054ピット 平・断面
- 図168 05049竪穴建物 出土遺物
- 図169 05057井戸 平・断面
- 図170 05056竪穴建物、05057井戸 出土遺物
- 図171 調査区西 竪穴建物群 周辺遺構平面
- 図172 05058溝 断面
- 図173 05061土坑 出土遺物
- 図174 05064竪穴建物 平・断面
- 図175 05066・05067竪穴建物 平・断面
- 図176 05067竪穴建物 出土遺物
- 図177 05071～05073竪穴建物 平・断面
- 図178 05068・05071～05073竪穴建物 出土遺物
- 図179 05074竪穴建物 平・断面
- 図180 05075竪穴建物 出土遺物
- 図181 05076土坑 平・断面
- 図182 05076土坑 出土遺物
- 図183 05078土坑 平・断面
- 図184 05078土坑 出土遺物
- 図185 05082・05086・05088土坑、  
05080・05084竪穴建物 出土遺物
- 図186 05090土坑、05091土器集積 出土遺物
- 図187 第5-2b(1)面 遺構分布
- 図188 05092土坑 平・断面
- 図189 05100溝 平面
- 図190 05100溝 断面(1)
- 図191 05100溝 断面(2)
- 図192 05100溝 遺物出土状況
- 図193 05100溝 出土遺物(1)
- 図194 05100溝 出土遺物(2)
- 図195 05101溝 平・遺物出土状況
- 図196 05101溝 出土遺物(1)
- 図197 05101溝 出土遺物(2)
- 図198 05101溝 出土遺物(3)
- 図199 05222・05236・05243畝間溝群 出土遺物
- 図200 05103溝 平・断面
- 図201 05105・05248・05254・05256・05260・  
05286畝間溝群、05103溝  
05111土坑 出土遺物
- 図202 05109・05285土坑 出土遺物
- 図203 調査区西 周辺遺構平面
- 図204 05209土坑 平・断面
- 図205 05209土坑 出土遺物
- 図206 05210土坑 平・断面
- 図207 05210土坑 出土遺物
- 図208 05212土坑 平・断面
- 図209 05212土坑 出土遺物
- 図210 05187・05202・05208・05275土坑  
出土遺物
- 図211 05272土坑 出土遺物(1)
- 図212 05272土坑 出土遺物(2)
- 図213 05239・05259溝、05188・05189・  
05280・05284畝間溝群、  
05137・05152畝間溝 出土遺物
- 図214 第5-2b層 出土遺物(1)
- 図215 第5-2b層 出土遺物(2)
- 図216 第5-2面 遺構分布
- 図217 3号墳 平面
- 図218 3号墳 東西断面
- 図219 3号墳 南北断面
- 図220 3号墳北屏 遺物出土状況
- 図221 3号墳 出土遺物
- 図222 4号墳・5号墳 平面
- 図223 4号墳 平・断面 出土遺物
- 図224 4号墳主体部① 平・断面 出土遺物
- 図225 6号墳 平面
- 図226 6号墳 断面 6号墳主体部①・  
副埋葬施設② 断面
- 図227 6号墳主体部①・副埋葬施設② 平・断面
- 図228 6号墳 出土遺物
- 図229 7号墳 平面
- 図230 7号墳 断面
- 図231 7号墳主体部① 平・立・断面
- 図232 7号墳 出土遺物
- 図233 8号墳 平面
- 図234 8号墳 断面
- 図235 8号墳 遺物出土状況
- 図236 05337木棺墓 平・断面
- 図237 8号墳 出土遺物
- 図238 10号墳 平面
- 図239 10号墳 出土遺物
- 図240 10号墳 断面
- 図241 11号墳 平面
- 図242 11号墳 断面
- 図243 11号墳主体部① 平・断面
- 図244 11号墳 出土遺物
- 図245 31号墳 平面
- 図246 31号墳 断面
- 図247 30号墳 平面・出土遺物
- 図248 30号墳 断面
- 図249 33号墳 平面
- 図250 33号墳 断面
- 図251 33号墳 出土遺物
- 図252 61号墳 出土遺物
- 図253 29号墳 平面
- 図254 29号墳 断面
- 図255 29号墳埋葬施設③ 平・断面、出土遺物



- 图256 29号填埋葬施設② 平·立·断面  
 图257 29号填埋葬施設④ 平·断面·出土遺物  
 图258 29号填埋葬施設⑤ 平·断面  
 图259 29号填埋葬施設⑤ 出土遺物  
 图260 29号墳 出土遺物  
 图261 05340土器棺墓 平·断面  
 图262 05340土器棺墓 出土遺物  
 图263 28号墳 平面  
 图264 28号墳 断面  
 图265 05341土坑 平·断面、遺物出土狀況  
 图266 28号填埋葬施設② 平面  
 图267 28号墳 出土遺物  
 图268 27号墳 平面  
 图269 27号墳 断面  
 图270 27号墳主体部① 平面、遺物出土狀況  
 图271 27号墳 出土遺物  
 图272 34号墳·35号墳 平面  
 图273 34号墳 断面  
 图274 34号墳 遺物出土狀況  
 图275 34号墳 出土遺物  
 图276 05348土坑墓 平·断面  
 图277 35号墳 断面  
 图278 35号墳 出土遺物  
 图279 05342土器棺墓 平·断面、出土遺物  
 图280 39号墳·40号墳 平面  
 图281 39号墳 断面  
 图282 40号墳 断面  
 图283 39号墳·40号墳 出土遺物  
 图284 19号墳 平面  
 图285 19号墳 出土遺物  
 图286 19号墳 断面  
 图287 60号墳 平面  
 图288 60号墳 断面  
 图289 26号墳 平面  
 图290 26号墳 断面  
 图291 26号墳主体部① 平·断面  
 图292 26号墳 出土遺物  
 图293 05339土坑墓 平面  
 图294 05343土器棺墓 平·断面  
 图295 05339土坑墓·05343土器棺墓 出土遺物  
 图296 25号墳 平面  
 图297 25号墳 出土遺物  
 图298 25号墳 断面  
 图299 52号墳 平面  
 图300 52号墳 断面  
 图301 52号墳主体部① 平·断面  
 图302 52号墳 遺物出土狀況  
 图303 52号墳 出土遺物(1)  
 图304 52号墳 出土遺物(2)  
 图305 59号墳 平面  
 图306 59号墳主体部① 平面  
 图307 59号墳 断面  
 图308 59号墳 出土遺物  
 图309 50号墳 平面  
 图310 50号墳 遺物出土狀況  
 图311 50号墳 断面  
 图312 50号墳主体部① 平·断面  
 图313 50号墳 出土遺物  
 图314 51号墳 平面、遺物出土狀況  
 图315 51号墳 断面  
 图316 51号墳主体部① 平·立·断面  
 图317 51号墳 出土遺物  
 图318 57号墳·58号墳 平面  
 图319 57号墳·58号墳 出土遺物  
 图320 58号墳 断面  
 图321 57号墳主体部① 平·断面  
 图322 13号墳·14号墳 平面  
 图323 13号墳 断面  
 图324 13号墳主体部③ 平·断面  
 图325 13号墳·14号墳 出土遺物  
 图326 14号墳 人骨出土狀況  
 图327 24号墳 平面  
 图328 24号墳 断面  
 图329 24号墳主体部① 平面  
 图330 24号墳 出土遺物  
 图331 12号墳 平面  
 图332 12号墳 断面  
 图333 12号墳主体部① 平·断面  
 图334 38号墳 平面  
 图335 38号墳 断面  
 图336 38号墳 出土遺物  
 图337 23号墳 平面  
 图338 23号墳 断面  
 图339 23号墳 出土遺物  
 图340 15号墳 平面  
 图341 15号墳 断面  
 图342 15号墳主体部① 平·断面  
 图343 15号墳 遺物出土狀況(1)  
 图344 15号墳 遺物出土狀況(2)  
 图345 15号墳 遺物出土狀況(3)  
 图346 15号墳 遺物出土狀況(4)  
 图347 15号墳 出土遺物(1)  
 图348 15号墳 出土遺物(2)  
 图349 15号墳 出土遺物(3)  
 图350 15号墳 出土遺物(4)  
 图351 15号墳 出土遺物(5)  
 图352 15号墳 出土遺物(6)  
 图353 15号墳 出土遺物(7)  
 图354 15号墳 出土遺物(8)  
 图355 22号墳 平面

- 図356 22号墳 断面  
 図357 22号墳主体部①・埋葬施設② 平・断面  
 図358 22号墳 遺物出土状況  
 図359 22号墳 出土遺物  
 図360 32号墳・41号墳 平面  
 図361 32号墳 出土遺物  
 図362 41号墳 断面  
 図363 32号墳 断面  
 図364 62号墳・63号墳 平面  
 図365 63号墳 断面  
 図366 62号墳 断面  
 図367 53号墳 平面 出土遺物  
 図368 53号墳 断面  
 図369 54号墳 平面 出土遺物  
 図370 54号墳 断面  
 図371 55号墳 平面  
 図372 55号墳 断面  
 図373 55号墳 遺物出土状況  
 図374 55号墳 出土遺物(1)  
 図375 55号墳 出土遺物(2)  
 図376 49号墳 平面  
 図377 49号墳 断面  
 図378 49号墳 遺物出土状況(1)  
 図379 49号墳 遺物出土状況(2)  
 図380 49号墳 遺物出土状況(3)  
 図381 49号墳 出土遺物(1)  
 図382 49号墳 出土遺物(2)  
 図383 46号墳 平面  
 図384 46号墳 断面  
 図385 46号墳主体部① 平・断面  
 図386 46号墳 出土遺物  
 図387 43号墳 平面  
 図388 43号墳 断面(東西)  
 図389 43号墳 断面(南北)  
 図390 43号墳主体部① 平・断面  
 図391 43号墳 遺物出土状況  
 図392 43号墳 出土遺物(1)  
 図393 43号墳 出土遺物(2)  
 図394 43号墳周溝出土木器製品立面  
 図395 43号墳 出土遺物(3)  
 図396 05345木棺墓 平・断面  
 図397 05347木棺墓 平・断面 出土遺物  
 図398 05363木棺墓 平・断面 前出土状況  
 図399 9号墳 平面  
 図400 9号墳 断面  
 図401 9号墳主体部① 平・断面  
 図402 9号墳 出土遺物  
 図403 37号墳 平面  
 図404 37号墳 断面  
 図405 18号墳 平面  
 図406 18号墳 断面  
 図407 18号墳主体部①・埋葬施設② 平・断面  
 図408 18号墳 遺物出土状況(1)  
 図409 18号墳 出土遺物(1)  
 図410 18号墳 出土遺物(2)  
 図411 20号墳・21号墳 平面  
 図412 20号墳 断面  
 図413 20号墳主体部① 平面(1)  
 図414 20号墳主体部① 平面(2)  
 図415 20号墳 出土遺物  
 図416 21号墳周溝 断面  
 図417 21号墳 出土遺物  
 図418 56号墳 平面  
 図419 56号墳 断面  
 図420 56号墳 出土遺物  
 図421 45号墳 平・断面  
 図422 45号墳 遺物出土状況  
 図423 45号墳 出土遺物  
 図424 48号墳 平面  
 図425 48号墳 断面  
 図426 48号墳主体部① 平・断面  
 図427 48号墳 遺物出土状況(1)  
 図428 48号墳 出土遺物(1)  
 図429 48号墳 遺物出土状況(2)  
 図430 48号墳 出土遺物(2)  
 図431 48号墳 出土遺物(3)  
 図432 48号墳 出土遺物(4)  
 図433 47号墳 平面  
 図434 47号墳 断面  
 図435 47号墳 出土遺物  
 図436 44号墳 平面  
 図437 44号墳 断面(1)  
 図438 44号墳 断面(2)  
 図439 44号墳 断面(3)  
 図440 44号墳 出土遺物(1)  
 図441 44号墳 出土遺物(2)  
 図442 44号墳 出土遺物(3)  
 図443 9号墳北側、55号墳南側 出土遺物  
 図444 調査区東 周辺遺構平面  
 図445 05101・05378溝 平・断面  
 図446 05101溝、05314土器集積 遺物出土状況  
 図447 05313土器集積 出土遺物  
 図448 05314土器集積 出土遺物  
 図449 調査区東・中央 周辺遺構平面  
 図450 05100溝 出土遺物  
 図451 05310土坑 平・断面  
 図452 05300落込、05308溝 出土遺物  
 図453 05315竪穴建物 炭化材(検出)  
 出土状況・断面  
 図454 05315竪穴建物 床面検出遺構平・断面

- 図455 05315竅穴建物、05341土坑 出土遺物  
 図456 調査区中央 周辺遺構平面  
 図457 05349土器集積 遺物出土状況  
 図458 05349土器集積 出土遺物 (1)  
 図459 05349土器集積 出土遺物 (2)  
 図460 05349土器集積 出土遺物 (3)  
 図461 05349土器集積 出土遺物 (4)  
 図462 05349土器集積 出土遺物 (5)  
 図463 05349土器集積 出土遺物 (6)  
 図464 05349土器集積 出土遺物 (7)  
 図465 05349土器集積 出土遺物 (8)  
 図466 05349土器集積 出土遺物 (9)  
 図467 05349土器集積 出土遺物 (10)  
 図468 05349土器集積 出土遺物 (11)  
 図469 05349土器集積 出土遺物 (12)  
 図470 05349土器集積 出土遺物 (13)  
 図471 05349土器集積 出土遺物 (14)  
 図472 調査区中央・西 周辺遺構平面  
 図473 05350土器集積 遺物出土状況  
 図474 05350土器集積 出土遺物 (1)  
 図475 05350土器集積 出土遺物 (2)  
 図476 05350土器集積 出土遺物 (3)  
 図477 05372堤、05357・05370土坑、  
 05365・05367畝溝群 出土遺物  
 図478 第5-2層 出土遺物 (1)  
 図479 第5-2層 出土遺物 (2)  
 図480 第5-1(2)面 遺構分布  
 図481 調査区東 周辺遺構平・断面  
 図482 05379堤内敷葉 平・立・断面  
 図483 05379・05424堤 断面  
 図484 05396・05421流路 断面  
 図485 05385溝 断面  
 図486 05382・05383堤、  
 05384・05386溝 出土遺物  
 図487 05387堰 平・断面・立面  
 図488 05387堰 出土遺物  
 図489 調査区東 周辺遺構平面  
 図490 05389・05412溝 断面  
 図491 05391畝間溝群、05389・05394溝  
 出土遺物  
 図492 05396流路 出土遺物  
 図493 05405土器棺墓 平・断面  
 図494 05405土器棺墓 出土遺物  
 図495 05412溝 出土遺物  
 図496 第5-1(2)層 出土遺物  
 図497 第5-1(1)面 遺構分布  
 図498 調査区東 周辺遺構平面  
 図499 05421流路 出土遺物 (1)  
 図500 05421流路 出土遺物 (2)  
 図501 05421流路 出土遺物 (3)  
 図502 05421流路 出土遺物 (4)  
 図503 05421流路 出土遺物 (5)  
 図504 05421流路 出土遺物 (6)  
 図505 05424堤内敷葉 平面  
 図506 05424・05425堤 出土遺物  
 図507 05419落込 出土遺物  
 図508 05427堰 平・立面  
 図509 調査区東・中央 周辺遺構平面  
 図510 05423堰 平・立面  
 図511 05423堰 出土遺物 (1)  
 図512 05423堰 出土遺物 (2)  
 図513 05418溝 出土遺物  
 図514 第5-1(1)層 出土遺物 (1)  
 図515 第5-1(1)層 出土遺物 (2)  
 図516 第5-1(1)層 出土遺物 (3)  
 図517 第4-2面 遺構分布  
 図518 調査区中央 周辺遺構平面  
 図519 05418溝 遺物出土状況  
 図520 05418溝 出土遺物  
 図521 04011-04013溝 断面  
 図522 04017溝 平・断面  
 図523 04019-04022竅穴建物 平面  
 図524 04019竅穴建物 出土遺物  
 図525 04018土坑、04026・04027ピット、  
 04035溝 出土遺物  
 図526 第4-2層 出土遺物  
 図527 第4-1面 遺構分布  
 図528 04041溝 平・断面  
 図529 04040護岸施設 平・立面  
 図530 調査区東・中央 周辺遺構平面 (1)  
 図531 調査区東・中央 周辺遺構平面 (2)  
 図532 04043溝 断面  
 図533 04042・04043溝、04063・04064堤 断面  
 図534 05382・05383堤、04113水口 平面  
 図535 04113水口 遺物出土状況  
 図536 04043流路 出土遺物  
 図537 04057水口、04060-04062・04066・  
 04069・04070溝 断面  
 図538 04071高まり、04083畦畔 出土遺物  
 図539 調査区西 周辺遺構平面  
 図540 04103ピット、04102・04108土坑  
 出土遺物  
 図541 第4-1層 出土遺物  
 図542 第3-3面 遺構分布  
 図543 03001・03003土坑 平・断面  
 図544 03005-03007土坑 平・断面  
 図545 03004土坑、03014ピット 出土遺物  
 図546 第3-3b面、第3-3面 03019池 変遷  
 図547 第3-2面、第3-1面 03019池 変遷  
 図548 03019池、03021溝 断面

- 図549 第3-3面 03019池 獣骨出土状況
- 図550 第3-3面 03019池 遺物出土状況
- 図551 03019池 出土遺物(1)
- 図552 03019池 出土遺物(2)
- 図553 03019池 出土遺物(3)
- 図554 03019池 出土遺物(4)
- 図555 03019池 出土遺物(5)
- 図556 03025ピット、第3-3層 出土遺物
- 図557 第3-2面 遺構分布
- 図558 03051溝、03052・03053土坑 平・断面
- 図559 03049落込 出土遺物
- 図560 03054溝、03056高まり 平・断面、  
03054溝 出土遺物
- 図561 第3-2層 出土遺物
- 図562 第3-1面 遺構分布
- 図563 03062土坑 平・断面
- 図564 調査区中央 周辺遺構平面
- 図565 03094~03097・03099・03104・03119  
土坑、03105溝 断面
- 図566 03106・03107溝 平・断面
- 図567 03106・03137溝、03138・03144・  
03174・03194・03217土坑、03216井戸  
出土遺物
- 図568 03132~03135・03216土坑 平面
- 図569 03132~03135土坑 断面
- 図570 03149掘立柱建物 周辺遺構平面
- 図571 03138・03144・03145・03148柱穴、  
03139土坑 断面
- 図572 03149掘立柱建物 平・断面
- 図573 03171土坑 平・断面
- 図574 03174土坑 平・断面
- 図575 03216井戸 平・断面
- 図576 第3-1層 出土遺物
- 図577 第2面 遺構分布
- 図578 調査区東 周辺遺構平面
- 図579 02002~02005・02007・02009・02010・  
02019土坑 断面
- 図580 02019土坑 出土遺物
- 図581 02015・02016土坑 平・断面
- 図582 02016土坑 出土遺物
- 図583 調査区中央 周辺遺構平面
- 図584 02020・02021落込 断面(1)
- 図585 02020・02021落込 断面(2)
- 図586 02020落込 出土遺物(1)
- 図587 02020落込 出土遺物(2)
- 図588 02021落込、02023・02024溝、  
02050・02051・02053溝群 出土遺物
- 図589 02059土坑 平・断面
- 図590 02060土坑 平・断面
- 図591 02060土坑 出土遺物
- 図592 02061土坑 平・断面
- 図593 02062掘立柱建物 平・断面
- 図594 02062掘立柱建物 出土遺物
- 図595 02092井戸 平・断面、02074・02081・  
02083ピット、02091土坑 出土遺物
- 図596 第2層 出土遺物
- 図597 第1-4下面 遺構分布
- 図598 調査区東 周辺遺構平面
- 図599 01003土坑 断面
- 図600 01005・01006土坑 断面
- 図601 調査区西 周辺遺構平面
- 図602 01015土坑 断面
- 図603 01023勘溝、01036・01048・01049勘溝群  
出土遺物
- 図604 第1-4面 遺構分布
- 図605 調査区東 周辺遺構平面
- 図606 01051井戸 平・立・断面、出土遺物
- 図607 01053井戸 断面
- 図608 01054井戸 平・立・断面
- 図609 調査区中央 周辺遺構平面
- 図610 01059坪埃溝、01061土坑 断面
- 図611 01059坪埃溝 出土遺物
- 図612 第1-4層 出土遺物
- 図613 第1-3面 遺構分布
- 図614 調査区東 周辺遺構平面
- 図615 01087~01090土取穴 断面
- 図616 01091井戸 平・立・断面
- 図617 01092・01093井戸 断面
- 図618 01095溝 断面
- 図619 調査区中央 周辺遺構平面
- 図620 01059・01073坪埃溝、01098暗渠  
出土遺物
- 図621 第1-3層 出土遺物
- 図622 第1-2面 遺構分布
- 図623 調査区中央、西 周辺遺構平面
- 図624 01059・01073坪埃溝、01095・01121溝、  
01120暗渠 出土遺物
- 図625 第1-2層 出土遺物
- 図626 第1-1面 遺構分布
- 図627 調査区中央 周辺遺構平面
- 図628 01123井戸 平・立・断面
- 図629 01124井戸 平・立・断面、出土遺物
- 図630 調査区西 01134溝周辺遺構 平・断面
- 図631 01059・01073坪埃溝、01133土坑、  
01126溝 出土遺物
- 図632 第1-1層 出土遺物(1)
- 図633 第1-1層 出土遺物(2)
- 図634 第0面 遺構分布
- 図635 0003溝 平・断面
- 図636 0001・0007溝 出土遺物

図637	明治時代の調査区周辺（仮製地形図）
図638	第0層 出土遺物
図639	第15面 平面
図640	第14面 平面
図641	第13面 平面
図642	第12面 平面
図643	第11面 平面
図644	第10面 平面
図645	第9面 平面
図646	ビット120～123・126・127・128 断面
図647	第8面 平面
図648	第7面 平面
図649	第5面（第6面含） 平面
図650	第4面 平面
図651	溝135、畝間溝139～142・144 断面
図652	第3面 平面
図653	第2面 平面
図654	第2層 鳥冢163 出土遺物
図655	鵜溝147～149・152・154～157、畦畔146、 溝151 断面

図656	第1面 平面
図657	第1層 出土遺物
図658	第9層～第7層 出土遺物
図659	第6層 出土遺物
図660	第5面 平面
図661	自然河川21 出土遺物
図662	第4面 平面
図663	土器集積18 遺物出土状況、出土遺物
図664	落込19 出土遺物
図665	第3面 平面
図666	第4層・第3層・第1層 出土遺物
図667	第1面 平面
図668	縄文時代後期～弥生時代前期 平面概略
図669	弥生時代中期～弥生時代後期 平面概略
図670	弥生時代末～古墳時代初頭 平面概略
図671	古墳時代前期 平面概略
図672	古代～近代 平面概略
図673	久宝寺遺跡墳墓群の形成過程の復元

## 表 目 次

表1	当センター既刊の久宝寺遺跡竜華地区 関連報告書一覧……………	2
表2	久宝寺遺跡周辺の既往調査（1）……………	14
表3	久宝寺遺跡周辺の既往調査（2）……………	16
表4	久宝寺遺跡周辺の既往調査（3）……………	18
表5	久宝寺遺跡周辺の既往調査（4）……………	20
表6	久宝寺遺跡周辺の既往調査（5）……………	22
表7	02-1調査区の各トレンチ層序対応……………	25
表8	01-1調査区と02-1調査区の層序対応…	26
表9	01-2調査区と02-1調査区の層序対応…	27
表10	01-4調査区と02-1調査区の 層序対応……………	30
表11	第8面検出の遺構土の区分……………	71

## 写 真 目 次

写真1	竜華地区(調査地)遠景……………	1
写真2	調査前風景……………	3
写真3	01-1・01-2調査風景……………	3
写真4	ウィークエンドプラザにて……………	4
写真5	記録映画撮影風景……………	6
写真6	測量杭 打設風景……………	7

## 写真図版(遺構編)目次

原色図版1	
原色図版2	
原色図版3	
原色図版4	
原色図版5	
原色図版6	
原色図版7	
原色図版8	
原色図版9	
原色図版10	
原色図版11	
原色図版12	
原色図版13	
原色図版14	
原色図版15	
原色図版16	
図版1	基本層序 断面
図版2	縄文時代後期 第10面
図版3	縄文時代後期 第9面
図版4	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版5	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版6	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版7	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版8	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版9	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版10	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版11	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版12	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版13	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版14	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版15	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版16	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版17	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版18	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版19	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8b面
図版20	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版21	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版22	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版23	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版24	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版25	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版26	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版27	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版28	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版29	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版30	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版31	縄文時代晩期～弥生時代前期 第8a面
図版32	弥生時代中期 第7-2面
図版33	弥生時代中期 第7-2面
図版34	弥生時代中期 第7-2面
図版35	弥生時代中期 第7-2面
図版36	弥生時代中期 第7-1面
図版37	弥生時代中期 第7-1面
図版38	弥生時代中期 第7-1面
図版39	弥生時代中期 第7-1面
図版40	弥生時代中期 第7-1面
図版41	弥生時代中期 第7-1面
図版42	弥生時代中期 第7-1面
図版43	弥生時代中期 第7-1面
図版44	弥生時代中期 第7-1面
図版45	弥生時代中期 第7-1面
図版46	弥生時代中期 第7-1面
図版47	弥生時代中期 第6-2面
図版48	弥生時代後期 第6-2面
図版49	弥生時代後期 第6-2面
図版50	弥生時代後期 第6-2面
図版51	弥生時代後期 第6-1面
図版52	弥生時代後期 第6-1面
図版53	弥生時代後期 第6-1面
図版54	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版55	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版56	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版57	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版58	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版59	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版60	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版61	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版62	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版63	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版64	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面
図版65	弥生時代末～古墳時代初頭 第5-2b(2)面



- 図版153 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版154 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版155 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版156 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版157 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版158 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版159 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版160 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版161 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版162 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版163 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版164 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(2)面
- 図版165 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版166 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版167 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版168 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版169 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版170 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版171 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面
- 図版172 弥生時代末～古墳時代初頭  
第5-1(1)面・5-1面
- 図版173 弥生時代末～古墳時代初頭 第5-1面
- 図版174 古墳時代前期 第4-2・4-2b面
- 図版175 古墳時代前期 第4-2面
- 図版176 古墳時代前期 第4-2面
- 図版177 古墳時代前期 第4-2面
- 図版178 古墳時代前期 第4-1面
- 図版179 古墳時代前期 第4-1面
- 図版180 古墳時代前期 第4-1面
- 図版181 古墳時代前期 第4-1面
- 図版182 古墳時代前期 第4-1面
- 図版183 古墳時代前期 第4-1面
- 図版184 古墳時代前期 第4-1面
- 図版185 古墳時代前期 第4-1面
- 図版186 古墳時代前期 第4-1面
- 図版187 古墳時代前期 第4-1面
- 図版188 古墳時代前期 第4-1面
- 図版189 古墳時代前期 第4-1面
- 図版190 古代 第3-3面
- 図版191 古代 第3-3面
- 図版192 古代 第3-3面
- 図版193 古代 第3-2面
- 図版194 平安時代 第3-1面
- 図版195 平安時代 第3-1面
- 図版196 平安時代 第3-1面
- 図版197 平安時代 第3-1面
- 図版198 平安時代 第3-1面
- 図版199 平安時代 第3-1面
- 図版200 平安時代 第3-1面
- 図版201 中世 第2面
- 図版202 中世 第2面
- 図版203 中世 第2面
- 図版204 中世 第2面
- 図版205 近世 第1-4下面
- 図版206 近世 第1-4下面
- 図版207 近世 第1-4面
- 図版208 近世 第1-4面
- 図版209 近世 第1-4面
- 図版210 近世 第1-3面
- 図版211 近世 第1-3面
- 図版212 近世 第1-3面
- 図版213 近世 第1-3面
- 図版214 近世 第1-3面・第1-2面
- 図版215 近世 第1-2面・第1-1面
- 図版216 近世 第1-1面
- 図版217 近世 第1-1面
- 図版218 明治時代 第0面
- 図版219 00-1調査区 基本層序
- 図版220 00-1調査区
- 図版221 00-1調査区
- 図版222 00-1調査区
- 図版223 00-1調査区
- 図版224 00-1調査区
- 図版225 00-1調査区
- 図版226 01-3調査区 基本層序
- 図版227 01-3調査区
- 図版228 01-3調査区



## 写真図版 (遺物編) 目次

<p>図版229 第9面・第8b面 出土遺物</p> <p>図版230 第8b面 出土遺物</p> <p>図版231 第8b面 出土遺物</p> <p>図版232 第8b面 出土遺物</p> <p>図版233 第8b面 出土遺物</p> <p>図版234 第8b面 出土遺物</p> <p>図版235 第8b面・第8a面 出土遺物</p> <p>図版236 第8a面 出土遺物</p> <p>図版237 第8a面 出土遺物</p> <p>図版238 第8a面 出土遺物</p> <p>図版239 第8a面 出土遺物</p> <p>図版240 第8a面 出土遺物</p> <p>図版241 第8a面 出土遺物</p> <p>図版242 第8a面 出土遺物</p> <p>図版243 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版244 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版245 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版246 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版247 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版248 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版249 第7-2面 出土遺物</p> <p>図版250 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版251 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版252 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版253 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版254 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版255 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版256 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版257 第7-2層 出土遺物</p> <p>図版258 第7-2層・第7-1面 出土遺物</p> <p>図版259 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版260 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版261 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版262 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版263 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版264 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版265 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版266 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版267 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版268 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版269 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版270 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版271 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版272 第7-1面 出土遺物</p> <p>図版273 第7-1面・第7-1層 出土遺物</p> <p>図版274 第7-1層 出土遺物</p>	<p>図版275 第7-1層 出土遺物</p> <p>図版276 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版277 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版278 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版279 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版280 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版281 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版282 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版283 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版284 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版285 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版286 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版287 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版288 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版289 第6-2面 出土遺物</p> <p>図版290 第6-2層 出土遺物</p> <p>図版291 第6-2層 出土遺物</p> <p>図版292 第6-2層・第6-1面 出土遺物</p> <p>図版293 第6-1面・第6-1層 出土遺物</p> <p>図版294 第6-1層 出土遺物</p> <p>図版295 第6-1層 出土遺物</p> <p>図版296 第6-1層 出土遺物</p> <p>図版297 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版298 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版299 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版300 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版301 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版302 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版303 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版304 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版305 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版306 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版307 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版308 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版309 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版310 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版311 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版312 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版313 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版314 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版315 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版316 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版317 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版318 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版319 第5-2b(2)面 出土遺物</p> <p>図版320 第5-2b(2)面 出土遺物</p>
--	---





図版520	第5-1(1)面	出土遺物	図版557	第3-1面・第3-1層	出土遺物
図版521	第5-1(1)面	出土遺物	図版558	第2面	出土遺物
図版522	第5-1(1)面	出土遺物	図版559	第2面	出土遺物
図版523	第5-1(1)面	出土遺物	図版560	第2面	出土遺物
図版524	第5-1(1)面	出土遺物	図版561	第2面	出土遺物
図版525	第5-1(1)面	出土遺物	図版562	第2面	出土遺物
図版526	第5-1(1)面	出土遺物	図版563	第2面	出土遺物
図版527	第5-1(1)面・第5-1(1)層	出土遺物	図版564	第2面	出土遺物
図版528	第5-1(1)層	出土遺物	図版565	第2面	出土遺物
図版529	第5-1(1)層	出土遺物	図版566	第2面	出土遺物
図版530	第5-1(1)層	出土遺物	図版567	第2面	出土遺物
図版531	第5-1(1)層	出土遺物	図版568	第2面	出土遺物
図版532	第5-1(1)層・第4-2面	出土遺物	図版569	第2面・第2層	出土遺物
図版533	第5-1(1)層・第4-2面	出土遺物	図版570	第2層、第1-4下面	出土遺物
図版534	第4-2面	出土遺物	図版571	第1-4下面、第1-4面・層	出土遺物
図版535	第4-2面・第4-2層	出土遺物	図版572	第1-4層	出土遺物
図版536	第4-2層	出土遺物	図版573	第1-4層、第1-3面	出土遺物
図版537	第4-2層	出土遺物	図版574	第1-3面	出土遺物
図版538	第4-1面	出土遺物	図版575	第1-3面・第1-3層	出土遺物
図版539	第4-1面	出土遺物	図版576	第1-3層	出土遺物
図版540	第4-1面	出土遺物	図版577	第1-2面	出土遺物
図版541	第4-1層	出土遺物	図版578	第1-2面	出土遺物
図版542	第4-1層	出土遺物	図版579	第1-2面・第1-2層	出土遺物
図版543	第3-3面	出土遺物	図版580	第1-2層、第1-1面	出土遺物
図版544	第3-3面	出土遺物	図版581	第1-1面	出土遺物
図版545	第3-3面	出土遺物	図版582	第1-1面・第1-1層	出土遺物
図版546	第3-3面	出土遺物	図版583	第1-1層	出土遺物
図版547	第3-3面	出土遺物	図版584	第1-1層	出土遺物
図版548	第3-3面	出土遺物	図版585	第1-1層、第0面	出土遺物
図版549	第3-3面	出土遺物	図版586	第0面・第0層	出土遺物
図版550	第3-3面	出土遺物	図版587	第0層・00-1調査区	出土遺物
図版551	第3-3面	出土遺物	図版588	00-1調査区	出土遺物
図版552	第3-3面	出土遺物	図版589	01-3調査区	出土遺物
図版553	第3-3・3b・3-2層、第3-2面	出土遺物	図版590	01-3調査区	出土遺物
図版554	第3-2面・3-2層・3-1面	出土遺物	図版591	01-3調査区	出土遺物
図版555	第3-2面	出土遺物	図版592	01-3調査区	出土遺物
図版556	第3-1面・第3-1層	出土遺物	図版593	01-3調査区	出土遺物
			図版594	01-3調査区	出土遺物
			図版595	01-3調査区	出土遺物
			図版596	01-3調査区	出土遺物

## 一 覽 表 目 次

表1	遺構一覽表(1)	表29	遺構一覽表(29)	表57	遺構一覽表(57)	表85	出土遺物一覽表(22)
表2	遺構一覽表(2)	表30	遺構一覽表(30)	表58	遺構一覽表(58)	表86	出土遺物一覽表(23)
表3	遺構一覽表(3)	表31	遺構一覽表(31)	表59	遺構一覽表(59)	表87	出土遺物一覽表(24)
表4	遺構一覽表(4)	表32	遺構一覽表(32)	表60	遺構一覽表(60)	表88	出土遺物一覽表(25)
表5	遺構一覽表(5)	表33	遺構一覽表(33)	表61	遺構一覽表(61)	表89	出土遺物一覽表(26)
表6	遺構一覽表(6)	表34	遺構一覽表(34)	表62	遺構一覽表(62)	表90	出土遺物一覽表(27)
表7	遺構一覽表(7)	表35	遺構一覽表(35)	表63	墳墓一覽表	表91	出土遺物一覽表(28)
表8	遺構一覽表(8)	表36	遺構一覽表(36)	表64	出土遺物一覽表(1)	表92	出土遺物一覽表(29)
表9	遺構一覽表(9)	表37	遺構一覽表(37)	表65	出土遺物一覽表(2)	表93	出土遺物一覽表(30)
表10	遺構一覽表(10)	表38	遺構一覽表(38)	表66	出土遺物一覽表(3)	表94	出土遺物一覽表(31)
表11	遺構一覽表(11)	表39	遺構一覽表(39)	表67	出土遺物一覽表(4)	表95	出土遺物一覽表(32)
表12	遺構一覽表(12)	表40	遺構一覽表(40)	表68	出土遺物一覽表(5)	表96	出土遺物一覽表(33)
表13	遺構一覽表(13)	表41	遺構一覽表(41)	表69	出土遺物一覽表(6)	表97	出土遺物一覽表(34)
表14	遺構一覽表(14)	表42	遺構一覽表(42)	表70	出土遺物一覽表(7)	表98	出土遺物一覽表(35)
表15	遺構一覽表(15)	表43	遺構一覽表(43)	表71	出土遺物一覽表(8)	表99	出土遺物一覽表(36)
表16	遺構一覽表(16)	表44	遺構一覽表(44)	表72	出土遺物一覽表(9)	表100	出土遺物一覽表(37)
表17	遺構一覽表(17)	表45	遺構一覽表(45)	表73	出土遺物一覽表(10)	表101	出土遺物一覽表(38)
表18	遺構一覽表(18)	表46	遺構一覽表(46)	表74	出土遺物一覽表(11)	表102	出土遺物一覽表(39)
表19	遺構一覽表(19)	表47	遺構一覽表(47)	表75	出土遺物一覽表(12)	表103	出土遺物一覽表(40)
表20	遺構一覽表(20)	表48	遺構一覽表(48)	表76	出土遺物一覽表(13)	表104	出土遺物一覽表(41)
表21	遺構一覽表(21)	表49	遺構一覽表(49)	表77	出土遺物一覽表(14)	表105	出土遺物一覽表(42)
表22	遺構一覽表(22)	表50	遺構一覽表(50)	表78	出土遺物一覽表(15)	表106	出土遺物一覽表(43)
表23	遺構一覽表(23)	表51	遺構一覽表(51)	表79	出土遺物一覽表(16)	表107	出土遺物一覽表(44)
表24	遺構一覽表(24)	表52	遺構一覽表(52)	表80	出土遺物一覽表(17)	表108	出土遺物一覽表(45)
表25	遺構一覽表(25)	表53	遺構一覽表(53)	表81	出土遺物一覽表(18)	表109	出土遺物一覽表(46)
表26	遺構一覽表(26)	表54	遺構一覽表(54)	表82	出土遺物一覽表(19)	表110	出土遺物一覽表(47)
表27	遺構一覽表(27)	表55	遺構一覽表(55)	表83	出土遺物一覽表(20)	表111	出土遺物一覽表(48)
表28	遺構一覽表(28)	表56	遺構一覽表(56)	表84	出土遺物一覽表(21)		

## 付 図 目 次

付図1	02-1調査区 東西土層断面	付図10	第5-2b(2)面 遺構配置	付図18	第3-1面 遺構配置
付図2	02-1調査区 南北土層断面	付図11	第5-2b(1)面 遺構配置	付図19	第2面 遺構配置
付図3	第8b面 遺構配置	付図12	第5-1(2)面 遺構配置	付図20	第1-4下面遺構配置
付図4	第8a面 遺構配置	付図13	第5-1(1)面 遺構配置	付図21	第1-4面 遺構配置
付図5	第7-2面 遺構配置	付図14	第4-2面 遺構配置	付図22	第1-3面 遺構配置
付図6	第7-1面 遺構配置	付図15	第4-1面 遺構配置	付図23	第1-2面 遺構配置
付図7	第6-2面 遺構配置	付図16	第3-3面 遺構配置	付図24	第1-1面 遺構配置
付図8	第6-1面 遺構配置	付図17	第3-2面 遺構配置	付図25	第0面 遺構配置
付図9	第5-2面 遺構配置				

# 第1章 調査に至る経緯・経過と方法

## 第1節 調査の経緯と経過

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市の北西部（久宝寺・北亀井・渋川・跡部他）および大阪市、東大阪市にまたがる南北1.6km、東西1.7kmの広範囲にわたる遺跡である。本遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地しており、従来より縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡として知られ、また、遺跡名になっている久宝寺は寺内町を形成したことで著名である。

久宝寺遺跡が認知されるようになったのは、1935（昭和10）年に小字西口・栗林（現 八尾市久宝寺5丁目）で行われた道路工事中に、弥生時代中期から古墳時代の土器や剣船の残片が検出されたのを端緒とする。本格的な発掘調査としては、1973（昭和48）年に遺跡の西部を縦断する近畿自動車道松原吹田線の建設に伴い財団法人 大阪文化財センター（現 大阪府文化財センター 以下、当センターと呼称）が試掘調査を実施し、弥生時代から中世に至る遺構・遺物が広範囲にわたり検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認され、その後、1982（昭和55）年から1986（昭和61）年にかけて当センターが本調査を行っている。その他にも、八尾市教育委員会、財団法人 八尾市文化財調査研究会ならびに財団法人 東大阪市文化財協会等により、随所で発掘調査が行われている。

今回の調査地は、数箇所に分かれており、主要部分は、旧国鉄の竜華操車場跡地内にあたる。竜華操車場は平面紡錘形で、総面積60,768坪、場内建物160棟の大規模な施設を擁し鉄道輸送の基地として活躍していたが、1986（昭和61）年に国鉄民営化に先立って廃止され、その南北両辺をJR関西本線（大和路線）の線路が走るのみとなった。

しかし、その年の7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、大阪府・八尾市・都市基盤整備公団（現 独立行政法人 都市再生機構）の三者が事業主体となり、再開業事業が進められることとなった。竜華操車場跡地（以下、竜華地区と呼称）再開業は、操車場の南北両側に敷設されていた線路を北側に集約させ、北側中央部に久宝寺駅舎の新設、道路網や駅前整備、土地区画整理、下水処理場や市民病院などの公共施設建設が



写真1 竜華地区（調査地）遠景

主体となる。これに伴う発掘調査は、事業主体等により、八尾市教育委員会・財団法人 八尾市文化財調査研究会と当センターが分担している。

「竜華地区」の調査では、1988（昭和63）年に駅舎新設に先立つ試掘調査が八尾市教育委員会によって行われ、その後、1996（平成8）年に八尾市教育委員会が、1990（平成2）年と1996（平成8）年に財団法人 八尾市文化財調査研究会がそれぞれ行っている。

当センターの調査としては、1995（平

成7) 年度に、線路移設予定地内に7箇所の試掘トレンチと操車場跡地北側の新線路予定地脇・J R久宝寺駅舎および自由通路設置箇所予定地の3箇所の調査を行っている。次に、一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う調査を、1995・1996年度および1997年度の2回に渡り行い、都市計画道路竜華東西線の建設に伴う調査を1998年度と2001年度に実施し、さらに、2000年度に多目的広場建設に伴う調査を行っている。また、1997(平成9)年度以降は「八尾市都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環としてそれぞれの調査が実施された。

これらは個々に遺物整理を経て、以下の7冊の報告書がすでに刊行されている。

1996年3月 「久宝寺遺跡・竜華地区-試掘調査報告書-」

1996年3月 「久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書

- J R久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う発掘調査-」

表1 当センター既刊の久宝寺遺跡 竜華地区関連 報告書一覧

調査名 (注1)(注2)	事業名	トレンチ名	略号	担当者	年度	契約期間	報告書名
95-1	95-1	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-2	95-2	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-3	95-3	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-4	95-4	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-5	95-5	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-6	95-6	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-7	95-7	試掘調査		本間	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書
95-8	95-8	試掘調査		後藤・本田	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書
95-9	95-9	試掘調査		後藤・本田	1995	950523-951220	久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書
96-1	96-1	府道部その1		後藤	1995	960201-960331	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ
96-1	96-1	府道部その2		後藤・島崎	1996	960401-970331	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ
97-1	97-1	府道部その3		後藤・福島・長田	1997	970401-980331	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅳ
98-1	98-1	久宝寺線		後藤・佐竹・長田	1997	980210-990228	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ
98-2	98-2	久宝寺線		後藤・佐竹・西村・酒井・長田	1997	980210-990228	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ
99-1	99-1	竜華東西線その1	1	西村・酒井・長田	1998	990202-000229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ
99-2	99-2	竜華東西線その1	2	西村・酒井・長田	1998	990202-000229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅷ
99-3	99-3	竜華東西線その1	3	西村・酒井・長田	1998	990202-000229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅸ
99-4	99-4	竜華東西線その1	4	西村・酒井・長田	1998	990202-000229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅹ
99-5	99-5	竜華東西線その1	5	西村・酒井・長田	1998	990202-000229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅺ
00-1	00-2	下木立坑	—	G 西村・佐々木・松尾	2000	000518-011031	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅻ
00-2	2000-1	多目的その1	—	西村・佐々木	2000	010220-020831	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅼ
00-2	2000-2	多目的その2	—	西村・南條	2001	020122-020229	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅽ
01-1	01-1	水処理その1	①-③	X 後川・新田・中村・山崎	2001	010420-020329	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅾ
01-2	01-2	水処理その2	①-④	Y 岡本・奥村・永野・田之上	2001	010420-020329	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅿ
01-2	01-2	水処理その3	先行調査	Y 岡戸・永野・新田・田之上	2001	010420-020329	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅰ
01-3	01-3	小阪介	立坑・土跡ピット	K 奥村	2001	010420-020329	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅱ
01-4	01-4	長吉立坑	—	N 中村・山崎	2001	010420-020329	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅲ
01-5	01-5	竜華東西線その2	1-4区	奥村	2001	020122-020831	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅳ
01-6	01-6	竜華東西線その2	2-1区	西村・南條	2001	020122-020831	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅴ
02-1	02-1	水処理その3	A	A 岡戸・後川・船井	2002	020401-040227	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅵ
02-1	02-1	水処理その3	B	B 岡戸・船井・永野	2002	020401-040227	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅶ
02-1	02-1	水処理その3	C	C 岡戸・奥村・新田	2002	020401-040227	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅷ
02-2	02-2	直造特設発掘立坑	—	T 岡戸	2002	020401-040227	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅸ
02-3	02-3	防火水槽	—	金光	2002	030201-030930	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅹ
04-1	04-1	水処理その4	1,2	R 船井	2004	040401-050331	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ⅺ

- 1998年3月 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ』  
 -一般道路住吉八尾線の付け替え事業に伴う発掘調査-』
- 2001年2月 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ』  
 -一般道路住吉八尾線の付け替え事業に伴う発掘調査-』
- 2003年9月 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅳ』  
 -駅前広場防火水槽設置工事に伴う発掘調査-』
- 2003年10月 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』  
 -大阪竜華年拠点土地区画整理事業（都市機能更新事業）に伴う発掘調査-』
- 2004年9月 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』  
 -大阪竜華年拠点土地区画整理事業に伴う発掘調査-』

今回、報告書に記載した調査は、前述の竜華操車場跡地再開発に伴い、寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設（以下、水みらいセンターと呼称）建設およびそれに関連するものに先駆けて行われたものである。この水みらいセンターは、汚水の高度処理を行い、処理水を同地区内に計画されている各施設へのトイレ用水やせせらぎ用水として利用する計画のためのもので、管理施設を除いて地下式となり、その上部には公益・文化施設の建設が計画されている。

発掘調査事業は、大阪府東部流域下水道事務所から当センターに委託され、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に実施した計7事業である。

以下、年を追って、概要を説明する。

まず、2000（平成12）年度に、「竜華地区」北側の西久宝寺地内に所在する、「久宝寺遺跡（下水）発掘調査に伴う工事」である。これは、「水みらいセンター」から川俣処理場への送泥管を挿入するための立坑掘削に伴う調査である。342㎡を5月25日から9月29日にかけて行っている。

また、同年、「竜華地区」南西の亀井地内で、「水みらいセンター」から長吉ポンプ場に向けて送水管を押し込むための発進立坑に伴う調査で、「寝屋川流域下水道長吉直送幹線（第1工区）下水管渠築造工事に伴う発掘調査」として、91㎡を7月9日から9月10日にかけて行っている。

次に、2001（平成13）年度に、「竜華地区」内で、「寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等土木工事（その1）他に、伴う久宝寺遺跡発掘調査」として行った。これは、「竜華地区」内の水みらいセンターの地中連続壁建設に伴う調査で、施設の外周のみの調査を東西2地区に区分して行った。水環境水処理施設（その1）の4,171㎡・（その2）の3,766㎡の計7,937㎡を2001



写真2 調査前風景



写真3 01-1・01-2調査風景



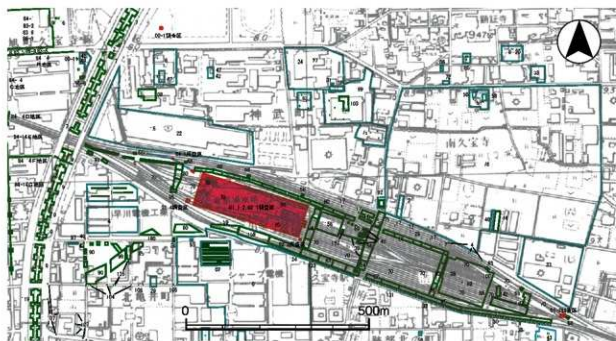


図1 調査地の配置

※国土地理院 1:1000都市計画図を使用

年4月20日から2002年3月29日にかけて行っている。

とともに、「竜華地区」内東端に位置し、小阪合ポンプ場から水みらいセンターへ送水するための押管工事に伴う「小阪合立坑」の土砂ピット部分56㎡・発進立坑部分58㎡の計114㎡を、2001年6月5日から同年8月12日にかけて行っている。

さらには、2002・2003（平成14・15）年度に、水みらいセンター中央部の調査で、「寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等土木工事（その3）他に伴う久宝寺遺跡発掘調査」として、約18,500㎡を2002年4月1日から2003年9月18日にかけて行っている。

また、同年・同事業の中で、水みらいセンター南東部に「小阪合直送幹線発進立坑部分に伴う発掘調査」として、84㎡を、2月3日から3月14日にかけて行っている。

なお、2006（平成16）年度に遺物整理事業の中で、水みらいセンター西側で、「水処理施設」から川俣処理場への送泥管を挿入するための立坑掘削に伴う調査で、「発進」と「到達」の2箇所、約30㎡と約12㎡の計約42㎡を、12月20日から3月4日にかけて行っている。

以上の、発掘調査の遺物整理事業は、2004年4月1日から2005年3月31日まで「寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設に伴う久宝寺遺跡遺物整理」として、また、2005年4月1日から2006年3月31日まで「寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設に伴う久宝寺遺跡遺物整理（その2）」として、さらに、2006年4月1日から2007年3月30日まで「寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設等建設に伴う久宝寺遺跡遺物整理（その3）」として行った。



写真4 ウィークエンドプラザにて

中部調査事務所において報告書作成に伴う遺物整理を2006年9月30日までの2カ年半をかけて行い、印刷業務を経た後、2007（平成19）年3月30日付けの『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』の刊行をもって全事業を終了した。

なお、調査・整理の期間内には、以下のような文化財の普及・啓発に係わる行事を行っている。

2001年	7月30日から8月3日	大阪府立今宮高等学校 体験学習（8名）
	8月1日	遺跡検討会
	11月29日	国際協力センター 博物館実技研修
	12月1日	現地公開（25名）
2002年	5月14・15日	東大阪市立新喜多中学校 職業見学学習（6名）
	7月29日から8月2日	大阪府立今宮高等学校 体験学習（13名）
	8月24日	現地説明会（823名）
	9月28日	財団法人大阪府青少年活動財団 『ウィークエンドブラザ』
	11月10日	近つ飛鳥博物館 『発掘現場を見学してみよう』
	12月12日	大阪府立大手前高等学校 集中セミナー（17名）
2003年	5月14・15日	東大阪市立新喜多中学校 職業見学学習
	5月24日	現地公開（107名）
2005年	3月19日から4月10日	小テーマ展示『シリーズここまでわかった考古学』 「久宝寺遺跡の最新成果－河内平野における古墳出現を探る－」 於：近つ飛鳥博物館（2260名）
2005年	11月5日	重要調査に基づくシンポジウム 『河内平野における古墳の出現－久宝寺遺跡と加美遺跡－』 於：大阪歴史博物館（230名）

なお、2005年3月には展示図録として『久宝寺遺跡 発掘調査成果』を刊行している。

## 第2節 調査の方法

現地での調査は、先述のとおりに水みらいセンター水処理施設部分が大半を占め、これに付随する形で7箇所調査地が設定された（図1）。調査名およびトレンチ呼称については、現地調査中に個別で設定したために少々混乱をきたしたことから、『遺跡発掘調査基本マニュアル』に従って調査名の整理を行った（表1）。トレンチ名称については本文中であまり使用しないために調査時のままとしたが、01-3調査区のみ記載方法が異なるために変更している。

これらの調査区はその所在地から大きく3つに分けられる。1つ目は八尾市竜華町（旧 亀井町）地内に所在し、寝屋川流域下水道竜華水環境保全センター水処理施設とその周辺、2つ目は八尾市西久宝寺に所在する久宝寺緑地公園の南端にある調査区、3つ目は八尾市竜華町と渋川町との境界付近に位置する調査区である。本書では遺構・遺構面の整理を重視する観点から、この3箇所の所在地に分けて報告することにする。それぞれの調査区の詳細については、前節あるいは表1を参照されたい。

本報告書では、00-1調査区および01-3調査区を除く、00-2調査区、01-1・2調査区、01-4調査区、02-1調査区、04-1調査区は、近距離に位置し、同様な堆積状況であることから、一単位として記述することとし、先述の2箇所に関しては、別途、個別に記述することにした。



写真5 記録映画撮影風景

調査方法については、いずれも現地盤高T.P. + 8.4 mから深さ45~60cmまでを機械掘削し、現耕土や操車場建設に伴う盛土を除去した。水処理施設建設に伴う調査では、まず初年度に施設予定地の外周部分を1.0 m幅で深さ約2.6 mまでを東西2つのトレンチに分かれて調査し、施設外壁となるコンクリート製連続隔壁を地下約52mまで打設した。その後、隔壁の内側を10 m幅で地表下約2.5 mのT.P. + 4.3 mまで人力による調査を行った。この調査では隔壁のアースアンカー打設を同時に行ったため、本体工事側の進捗や作業手順に合わせて細かく調査範囲（トレンチ）を設定する必要があった（図6の○番号）。施設予定地の中央に残った島状部分は、新たに発注された本体工事と共に、東西に3分割したトレンチを縄文時代後期から晩期の包含層がある地表下2.5~3.0 mのT.P. + 4.0 mまで人力により調査した。立坑の調査では、前述の機械掘削が終了した後、調査地点によって異なる規定の深度までを人力により調査した。掘削の深度によっては、鋼矢板の打設やその倒壊防止のための鉄骨切梁を設置しながらの調査となった。

地区割りについては、当センターが「発掘調査マニュアル」に定めた地区割り法を使用した（図2）。日本測地系による国土座標系第Ⅵ系を基準に大阪府の6段階区分法を用いた。この方法による第Ⅰ区画は大阪府が設定したものである。なお、調査途中に世界測地系への切替が行われたものの、継続事業で

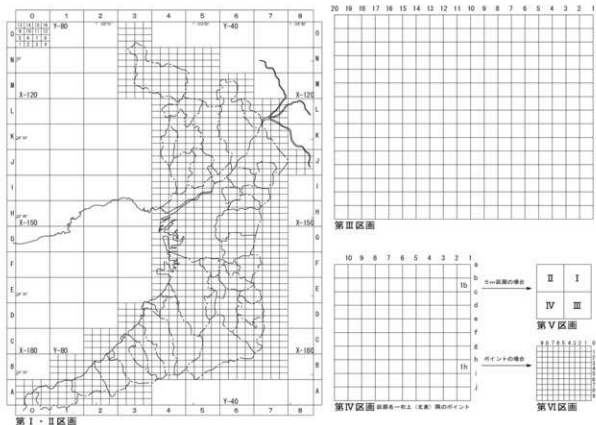


図2 地区割の概念

あることや隣接調査区との整合を行うため、旧来の日本測地系を踏襲することにした。

調査の記録は、基本的には人力による測量や実測と写真撮影を行ったが、主要な遺構面についてはヘリコプターやクレーン撮影による航空測量やカタタシステム、トータルステーション等の機器を活用した。

遺構面と層位については、機械掘削終了面で発見した人力掘削開始面の最初を「第1面」とし、調査が進むごとに順次番号を増やした。包含層も同様である。これらの名称は主に通し番号により表現するものの、枝番号や（）付き数字で細分しながら整合性を検討した箇所もあり、現地調査での設定方法には調査区毎に差が存在する。本書では調査区を超えて可能な限りに層序の整合を行ったが、その基本層序として用いたのは02-1調査区のメイン断面であり、調査区全体の地形が確認できるよう設定したものである（図6）。詳細については第3章に記す。

遺構名称については、現地では遺物の出土あるいは図化や写真撮影を行った遺構に対して、遺構の種類に因らず、トレンチ毎に第1面から順の通し番号を設定した。整理作業では同一遺構を明確にするため、検出した調査区に関わらず、遺構面毎に連番の名称を再設定した。遺構の区別がし易いよう、前2桁で遺構面、後3桁あるいは4桁で通し番号を示す「コード」を遺構番号とした。ここでは、現地において特に名称の設定を行わなかった遺構についても、本文中の説明等で必要と考えた遺構には



写真6 測量杭 打設風景

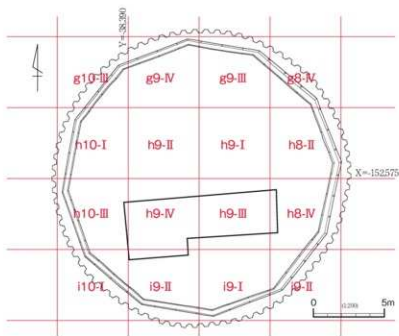


図3 00-1調査区 調査位置と地区割

先の方針に則った新たな遺構名称を付与した。これらの遺構名称については、そのすべてを付図の遺構平面図に記し、本文中では必要なもののみを表示している。

遺構面の全体・個別の遺構・遺物の出土状況・土層断面等は、35mmモノクロ・同リバーサル、6×7モノクロ・同リバーサルのフィルムを使い分けて撮影記録している。航空測量を実施した遺構面の全体については、航空撮影も行っている。調査の一部や現地説明会等では、35mmネガカラーによるメモ写真を撮影しているが、恒久的な保管は行っていない。また調査途中からはデジタルカメラによる撮影を行い、『遺跡調査基本マニュアル』に則った「写真台帳データベース」を作成し、それまでの撮影済み分については35mmモノクロのコンタクトをスキャニングし、その画像をデジタル台帳に用いている。

遺物の取り上げについては、前述の地区割り法に従った地区毎に行っている。ただし、包含層や遺構からの一般的な出土遺物は第Ⅲ・Ⅳ区画までの記録を行っており、詳細な出土地点の情報が必要と判断した場合に限り、適宜第Ⅴ区画あるいは第Ⅵ区画による記録を行った。ただし、墳墓に関しては遺構そのものの位置関係の記録が重要であると考え、墳丘の長軸と短軸によって4分割した区画に対して北東から南西に向かってA～Dを個別に設定し、遺物の取り上げを行った。これらの遺物についても、上記のマニュアルに則り、登録番号毎の画像を貼付した「登録台帳データベース」を作成している。

整理作業では抽出した遺物の図化を行ったが、実測したものはその都度にデジタル撮影を行い、各個体情報を記した「遺物台帳データベース」に貼付している。報告書内の掲載情報についても、「写真」・「遺物」の両台帳データベースに書き込みを行っている。

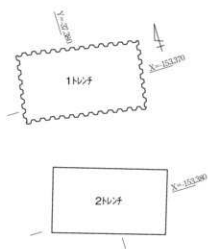


図4 01-1～01-3調査区 トレンチ配置

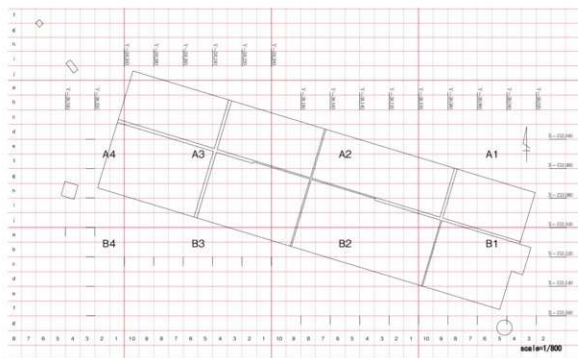


図5 01-1～01-3・02-1・03・04-1調査区 地区割

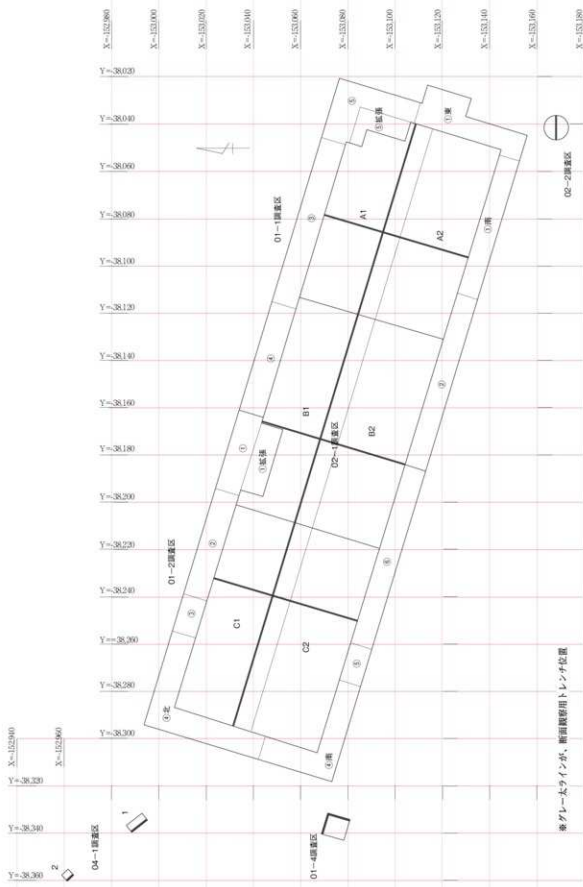


図6 01-1～01-3・02-1・3・04-1調査区 トレンチ配置および断面観察位置

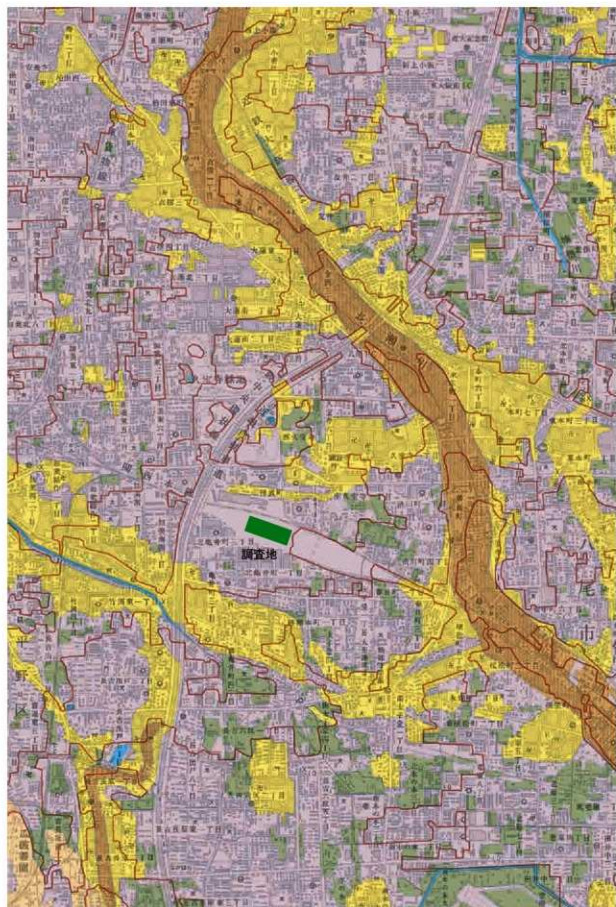


図7 調査地周辺の地形分類 帝國土地理院「数値地図25000(土地条件)西日本」より画像データを抽出し、一部加筆

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部を中心に大阪市と東大阪市の一部にまたがる複合遺跡で、その範囲は東西1.7 km、南北1.6 kmに及ぶ。本遺跡は河内平野の南側に位置し、旧大和川の主流であった平野川と長瀬川（久宝寺川）に挟まれた自然堤防上から湖岸平野に立地する（図7）。本書において報告する調査区は、いずれも湖岸平野に位置するが、これは縄文時代前期以降に形成された地形である。以下では、本書に関わる各時代の久宝寺遺跡周辺の地形環境についての概略を記す。

**旧石器時代** 2万年以上前は現在より海面が100 m以上も低かったと考えられ、瀬戸内海を含む陸地が広がっていたとされる。本遺跡周辺は東側を北流する古長瀬川から、西側の上町台地へとつながる

緩斜面に位置していた。

**縄文時代** 縄文時代前期になると、いわゆる「縄文海進」により本遺跡のすぐ北側までが河内湾として水没した（河内湾Ⅰの時代）。工事前ボーリングデータから、調査地周辺の洪積層上面までの深さは現地表面から約8.0 mであることがわかった。この河内湾に向かって長瀬川や平野川といった旧大和川・石川の下流が流れ込み、本遺跡の周辺には大量の土砂が運搬されるようになった。この沖積作用は非常に激しく、縄文時代後期までに淀川・旧大和川の下流域には巨大な三角洲が発達し、河内湾を埋め立てていった（河内湾Ⅱの時代）。縄文時代晩期以降は、上町台地北端の砂嘴が次第に発達し、外海との出入口が狭くなった河内湾は、汽水と淡水の混じる河内潟へと変化していった（河内潟の時代）。

**弥生時代** 弥生時代の前半をかけて淡水化が徐々に進行していった河内潟は、旧大和川系の土砂堆

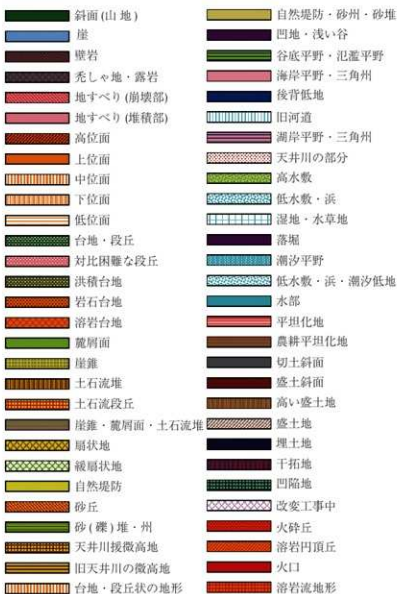


図8 地形分類の凡例



積に比して淀川系の沖積作用が著しかったため、外海との出入口であった上町台地北端の方が潟の中央部より先に浅くなっていったようである。つまり河内潟の北側は地形変化が激しかったのに対し、南側は緩やかに自然が豊富な非常に住みやすい環境であったといえそうである。弥生時代後期、特に後半になると大規模な氾濫が発生するようになり、完全に北側の河内潟の出入口は塞がれてしまい、やがて淡水の湖となった（河内湖Ⅰの時代）。

**古墳時代** 古墳時代前期にかけて淡水湖となった河内湖に注ぎ込んだ旧大和川は、実質的には河口が塞がったのと同じ状態となったため、増水時に溢流を繰り返すようになった。調査区周辺の平野川や長瀬川（久宝寺川）等に自然堤防が発達するのはこの頃である。古墳時代中期以降には、北岸にある淀川系の三角州が発達して上町台地からの砂嘴と連続して広い低地が形成され、これを横断して流れる現在の淀川の原因ができた（河内湖Ⅱの時代）。

**古代から中近世** 淀川下流域のデルタ形成が進む一方、河内湖の排水が合流するため、増水時に処理し切れなくなった川は氾濫を繰り返した。南側の河内湖に水が逆流するため、最も低所であった砂嘴の付け根部分に大川の開削が行われた。これにより淀川河口の水量は減少し、河内湖北岸には穏やかに安定した水域が生まれた。旧大和川の沖積作用の繰り返しは次第に河内湖を埋め立て、河口の後には大阪平野が形成されていった（大阪平野の時代）。河川の中流域には土砂の堆積による自然堤防が発達し、氾濫が発生すると、枝葉のように自然堤防や侵食崖が本流の周辺に形成された。調査区周辺では、江戸時代に新大和川への付替え工事が行われるまで平野川や長瀬川の氾濫が頻繁に発生していたようである。

**近代** 付替え工事は旧大和川周辺に氾濫が発生することはなくなり、自然地形的には安定した地域となった。代わって開発による地形改変が多くなり、特に戦後は大規模開発による平坦化が進んだ。

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 現在のところ、本遺跡周辺の河内平野内では明確な旧石器時代の遺跡はみつかっていない。既知の遺跡の中で近在のものとしては大阪市長原遺跡・瓜破遺跡、八尾市八尾南遺跡などが挙げられるものの、いずれも調査区からは2km以上離れた段丘上や台地上に位置するもので本調査区周辺とは立地条件が異なる。一方、近年の調査で八尾市恩智遺跡のような扇状地や、同じ長原遺跡でも沖積部から当該期の遺物が出土する例も増加しており、今後は久宝寺遺跡でも出土する可能性も考えられる。

**縄文時代** 平野部に集落が出現するのは、縄文時代でも晩期に入ってからのものであり、大阪市日下貝塚・長原遺跡、八尾市久宝寺遺跡・山賀遺跡、柏原市船橋遺跡等が挙げられる。特に長原遺跡や船橋遺跡から出土した縄文土器は、晩期の標識土器となっている。近年、若江北遺跡等でみつかった晩期土器と弥生時代前期土器の共伴例は、弥生時代のはじまりを考える上で注目される。

**弥生時代** 弥生時代前期では、東大阪市美園遺跡・若江北遺跡のように縄文時代晩期から継続して集落が営まれる例が多い。安定した河内潟周辺の平野部に人が積極的に現れるようになるのだが、水田耕作の開始と連動する場数が少ない。上記の遺跡以外には東大阪市山賀遺跡、八尾市八尾南遺跡が古く、八尾市亀井遺跡・城山遺跡・跡部遺跡・田井中遺跡、大阪市瓜破遺跡・長原遺跡等がみつづく。久宝寺遺跡は先の縄文時代晩期と弥生時代前期の共伴時期以降、ほぼ連続して弥生時代後期まで生産域を伴う集落が形成されていたようである。中期以降には、ほぼいずれの地域でも大規模な水田耕作が行われるようになり、生産量の増大は集落規模の飛躍的な拡大を促したようである。これを象徴するかのようになり、東大阪市瓜生堂遺跡・巨摩遺跡・若江北遺跡、大阪市加美遺跡等では方形周溝墓と呼ばれる墳丘墓

が築造されるようになる。生産域と墓域を伴う集落が目立つようになるのはこの段階からであり、後期にかけて更に発達していく。後期後半には大規模な洪水が広域的に発生したと考えられ、東大阪市瓜生堂遺跡・巨摩遺跡のように、集落の上を厚い土砂の覆ってしまう例が久宝寺遺跡周辺で多数見つかっている。微高地や自然堤防上に数棟の小規模な建物群がみられるのは、自然災害を避けたり、一時的に小規模な集落を復旧したりした痕跡であろう。

**古墳時代** 前代に発生した洪水はそれまでの地形環境を一変させてしまい、その後は河内平野の処々で集落の再構成が行われた。八尾市亀井遺跡・東郷遺跡・中田遺跡、大阪市加美遺跡等が挙げられ、大規模な集落とそれに伴う生産域・墓域の拡充や増大が認められる。一方で、短期間のうちに土地利用が激しく変化する例もあり、集落の再編はその中心部と縁辺部でかなりの温度差が存在したと考えられ



- |                  |  |
|------------------|--|
| 1 久宝寺遺跡          | 15 榎松遺跡                                      |
| 2 加美遺跡           | 16 勝軍寺跡                                      |
| 3 久宝寺寺内町         | 17 〔府指〕重文 勝軍寺木造二臂如意輪観音思惟半跏像<br>・体内仏全剛菩薩思惟半跏像 |
| 4 流川廃寺           | 18 太子堂遺跡                                     |
| 5 跡部銅鐸出土地        | 19 跡部遺跡                                      |
| 6 佐堂遺跡           | 20 亀井遺跡                                      |
| 7 美園遺跡           | 21 竹淵遺跡                                      |
| 8 穴太廃寺           | 22 亀井北(加美南)遺跡                                |
| 9 宮町遺跡           | 23 〔市指〕史 三好長慶墓・三好義継墓                         |
| 10 〔府指〕天 河内県庁跡   | 24 鞍作廃寺                                      |
| 11 八尾寺内町         | 25 〔市規〕史 加美遺跡                                |
| 12 成法寺遺跡         | 26 奈良街道                                      |
| 13 龍華寺跡          |  |
| 14 〔府指〕天 流川神社のくす |  |

※国土地理院 1:1000都市計画図を使用

図9 調査地周辺の遺跡・調査地点分布

表 2 久宝寺遺跡周辺の既往調査(1)

番号	調査期間	調査名	調査主体	地区名
81-1		KMR1 - 1	大阪市文化財協会	加美東7丁目
82-4		KMR2 - 4	大阪市文化財協会	加美東4丁目
83-11		KMR3 - 11	大阪市文化財協会	加美東2丁目
83-17		KMR3 - 17 *	大阪市文化財協会	加美東2丁目
83-2		KMR3 - 2	大阪市文化財協会	加美東6丁目
83-6		KMR3 - 6	大阪市文化財協会	加美東6丁目
83-7		KMR3 - 7	大阪市文化財協会	加美東7丁目
83-7		KMR3 - 7	大阪市文化財協会	加美東7丁目
83-7		KMR3 - 7	大阪市文化財協会	加美東7丁目
84-1		KMR4 - 1	大阪市文化財協会	加美東6丁目
84-14		KMR4 - 14	大阪市文化財協会	加美南1～4丁目
84-9		KMR4 - 9	大阪市文化財協会	加美東6丁目
85-18		KMR5 - 18	大阪市文化財協会	加美東3丁目
85-3		KMR5 - 3	大阪市文化財協会	加美南2丁目
85-5		KMR5 - 5	大阪市文化財協会	加美東6丁目
85-6		KMR5 - 6	大阪市文化財協会	加美東6丁目
85-7		KMR5 - 7	大阪市文化財協会	加美南2丁目
86-27		KMR6 - 27	大阪市文化財協会	加美転作1丁目
87-2		KMR7 - 2	大阪市文化財協会	加美東5丁目
88-5		KMR8 - 5	大阪市文化財協会	加美東5丁目
89-13		KMR9 - 13	大阪市文化財協会	加美転作2丁目
95-14		KMR9 - 14	大阪市文化財協会	加美東6丁目
95-15		KMR9 - 15	大阪市文化財協会	加美東3丁目
95-16		KMR9 - 16	大阪市文化財協会	加美東3丁目
97-1		KMR97 - 1	大阪市文化財協会	加美東6丁目
98-8		KM 98 - 8	大阪市文化財協会	加美東6丁目
00-2	00H120428 ~ 0511	KM00 - 2	大阪市文化財協会	加美西1丁目
00-3		KM00 - 3	大阪市文化財協会	加美東3丁目
00-4		KM00 - 4	大阪市文化財協会	加美東3丁目
00-5		KM00 - 5	大阪市文化財協会	加美東6丁目
00-6		KM00 - 6	大阪市文化財協会	加美東6丁目
01-4	30014H131001 ~ 1228	KM01 - 4	大阪市文化財協会	加美東4～7丁目
04-1	0501170007	KM04 - 1	大阪市文化財協会	加美南1丁目9
004	805556120 ~ 1845590430	久宝寺北(その1～3)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	東大阪市大通東5丁目
006	825574705 ~ 8356000331	久宝寺南(その1)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	神武町地
007	825574705 ~ 8356000620	久宝寺南(その2)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	神武町地
009	845590301 ~ 8656140331	亀井北(その1)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	大阪市平野区加美南2丁目地
010	845590310 ~ 8656140116	亀井北(その2)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	大阪市平野区加美4丁目
012	85560007 ~ 86561001	久宝寺南(その5)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	西久宝寺
119	845590310 ~ 8656140331	亀井北(その3)	大阪府教育委員会・大阪文化財センター	北亀井町地

※「久宝寺遺跡・壱牟地区発掘調査報告書V」(附)大阪府文化財センター、表1を加筆・修正

文脈	主な調査結果
1982 『メゾン加美マンション新築工事に伴う発掘調査(KM81-1)略報』 ㈱大阪市文化財協会	弥生後期～室内土層、上段・落ち込み、晩土層上部
1983 『加美東グリーンマンション建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM82-4)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代中期柱穴、古墳時代前期墳墓・庄内式副葬土器・遺物、土器類・布疋・土器類等
1984 d 『藤田製作所立替工事(1期)に伴う加美遺跡発掘調査(KM83-13)略報』 ㈱大阪市文化財協会	KM 83-11 次調査を参照。
1984 e 『藤田製作所立替工事(2期)に伴う加美遺跡発掘調査(KM83-17)略報』 ㈱大阪市文化財協会	平安時代末土層・上層、平安時代の遺物・土器
1984 a 『田エカドバロウ工場跡地における加美遺跡発掘調査(KM82-2)略報』 ㈱大阪市文化財協会	KM 84-1 次調査の手前調査
1984 b 『田エカドバロウ工場跡地における加美遺跡発掘調査(KM82-6)略報』 ㈱大阪市文化財協会	KM 84-1 次調査の手前調査
1984 c 『寺崎電気台車立替に伴う加美遺跡発掘調査(KM83-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代前期の土器類、弥生後期～庄内式期の葬具・土層、弥生時代末～古墳時代中期の流路
1984 c 『寺崎電気台車立替に伴う加美遺跡発掘調査(KM83-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代前期の土器類、弥生後期～庄内式期の葬具・土層、弥生時代末～古墳時代中期の流路
1984 c 『寺崎電気台車立替に伴う加美遺跡発掘調査(KM83-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代前期の土器類、弥生後期～庄内式期の葬具・土層、弥生時代末～古墳時代中期の流路
(観望資料のみ?)	
1986 a 『関西電力・供電配電管路新設に伴う加美遺跡発掘調査(KM84-11・85-3・85-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	庄内・布留井・丹井、古墳前期穴住居・溝・土層、古墳期小溝群
1985 『平野変電所建物増築に伴う加美遺跡発掘調査(KM84-9)略報』 ㈱大阪市文化財協会	庄内式副葬土器、庄内・布留井小溝群
1986 d 『クボタハウス社によるマンション建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM85-18)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代前期小溝群、古墳前期?木田跡
1986 a 『関西電力・供電配電管路新設に伴う加美遺跡発掘調査(KM84-11・85-3・85-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	KM 84-14 次調査に記録
1986 b 『加美東地内下水管敷工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM85-5)略報』 ㈱大阪市文化財協会	弥生中期後葉Y2号墓の墓石部分、庄内・布留井丹井・溝・ビート
1986 c 『相田マンション(仮称)建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM85-6)略報』 ㈱大阪市文化財協会	布留井小溝群、庄内式副葬土器・掘立柱遺物・丹井・小溝群、木田・堀み木跡
1986 a 『関西電力・供電配電管路新設に伴う加美遺跡発掘調査(KM84-11・85-3・85-7)略報』 ㈱大阪市文化財協会	KM 84-14 次調査に記録
1987 『田尻氏による店舗付住宅建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM86-27)略報』 ㈱大阪市文化財協会	中土層
1988 『木下マンション建設に伴う加美遺跡発掘調査(KM87-2)略報』 ㈱大阪市文化財協会	弥生後期遺物・小溝群、庄内・布留井丹井・小溝群
1989 『隈住宅跡による建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM 88-5)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代中・後期?木田土層、布留井
1990 『護国鉄新築工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM89-13)略報』 ㈱大阪市文化財協会	中土層を含む
1996 a 『大阪市都市整備局による加美相田住宅建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM96-14)略報』 ㈱大阪市文化財協会	布留井系水田・品、弥生後期水田、弥生中期中葉方形周溝墓
1996 b 『大阪市都市整備局による加美相田住宅(1区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM95-15)略報』 ㈱大阪市文化財協会	古墳時代前期流路、古墳時代木田・堀跡
1996 c 『大阪市都市整備局による加美相田住宅(2区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM95-16)略報』 ㈱大阪市文化財協会	奈良～平安時代流路、古墳時代木田堀跡、弥生時代後期、大塚群?板状土器
1998 a 『株式会社きんぐんによる建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM97-1)略報』	弥生後期土器集積、庄内方形周溝墓群、木田墓、掘立柱遺物・炭集積
1999 a 『加美遺跡の調査』『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』 ㈱大阪市文化財協会	弥生後期丹井・溝・土層、布留井系周溝墓
1999 b 『株式会社きんぐんによる建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM98-8)略報』	弥生後期丹井・溝・土層、布留井系周溝墓
2000 『加美遺跡の調査』『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』 ㈱大阪市文化財協会	
2001 a 『名鉄不動産㈱による建設工事に伴う加美1丁目所在地発掘調査(KM00-2)報告』 ㈱大阪市文化財協会	古墳前期～飛鳥島上層、古墳中・後期西近尾形群、古墳前・中層粘土層
2001 b 『平成12年度大阪市都市整備局による加美相田住宅(1区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM00-3)完了報告書』 ㈱大阪市文化財協会	奈良～平安時代流路、古墳前期木田堀跡
2001 c 『平成12年度大阪市都市整備局による加美相田住宅(2区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM00-4)完了報告書』 ㈱大阪市文化財協会	古墳前期水田堀跡
2001 d 『平成12年度大阪市都市整備局による加美相田住宅(1区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM00-5)完了報告書』 ㈱大阪市文化財協会	古墳前期水田堀跡、弥生中期後葉溝
2001 e 『平成12年度大阪市都市整備局による加美相田住宅(2区)建設工事に伴う加美遺跡発掘調査(KM00-6)完了報告書』 ㈱大阪市文化財協会	古墳前期木田堀跡・高まり・落ち込み・土層集積・土器類
2003 『2001年度大阪府域外建設工事に伴う発掘調査(KM01-4)報告書』 ㈱大阪市文化財協会	弥生後期土層、和歌、古墳前期流路・土層集積・土層・流路、平安時代木田
2003f 『加美遺跡試掘調査(KM04-1)報告書』『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書(2002-03-04)』 ㈱大阪市文化財協会	縄文晩期最終末の土層、古墳前期の土層、埴式土器、古墳中期中葉系土器
1987.3 『久宝寺(北)の(1)～(3)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	縄文晩期河川に七土足跡、弥生時代の大阪型銅手輪を伴った青銅製品、大塚系土器
1987.3 『久宝寺(南)の(1)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	弥生前期の合葬墓、中期の方形周溝墓、古墳前期の準備活動
赤木克己・一瀬和夫 1987.3 『久宝寺(南)の(2)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	
小野久太郎・原田文彦 1986.3 『飛井北(その1)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	
奥和之・山上忠 1986.3 『飛井北(その2)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	T.P.45付近縄文後期の自然流路、弥生後期水田・しがらみ、古墳前期庄内・方形周溝墓
1986.3 『久宝寺(南)の(3)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	古墳前期の庄内層、古・中層の田長集積田に伴う土木工事
1986.3 『飛井北(その3)近畿自動車道天理～吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター	鳥形木製品

表3 久宝寺遺跡周辺の既往調査(2)

番号	調査期間	調査名	調査主体	地区名
066	960770523 ~ 1220	久宝寺(05 - 8・9)	大阪府文化財調査研究センター	亀井
068	960770705 ~ 1220	久宝寺(05 - 1~7)	大阪府文化財調査研究センター	亀井・流川
071	960806020 ~ 1114	久宝寺(06 - 1.97・1)	大阪府文化財調査研究センター	流川
084	9601100210 ~ 9901110228	久宝寺(08 - 1・2)	大阪府文化財調査研究センター	流川
157	0301150303 ~ 0430	久宝寺(02 - 3)	大阪府文化財調査研究センター	亀井
158	0101130227 ~ 0301140322	久宝寺(多目的)	大阪府文化財調査研究センター	亀井
159	9901110202 ~ 0001120229	久宝寺(電華東西線)	大阪府文化財調査研究センター	電華2丁目
160	0201140122 ~ 0831	久宝寺(電華東西線その2)	大阪府文化財調査研究センター	電華2丁目
003	775S206 - 08		八尾市教育委員会	
005	81E5601109 ~ 1119	跡部(856調査)	八尾市教育委員会	春日町1丁目57
013	86S610218.19	久宝寺(85 - 191)	八尾市教育委員会	南久宝寺3丁目48
015	88S6300825	久宝寺(83 - 245)	八尾市教育委員会	神武町160.183.184 - 1
016	88S6300830 ~ 1107	久宝寺(83 - 195)	八尾市教育委員会	久宝寺6丁目路上
017	88S6300830 ~ 28・1201	久宝寺(83 - 209)	八尾市教育委員会	亀井・流川
018	88S6300928	久宝寺(83 - 301)	八尾市教育委員会	久宝寺4丁目74・76
022	900110911	久宝寺(88 - 245)	八尾市教育委員会	神武町160.183.184 - 1
024	900220119 ~ 20	久宝寺(88 - 478)	八尾市教育委員会	神武町17 - 3.38
027	900220409・16・17	久宝寺(89 - 503)	八尾市教育委員会	神武町17 - 3.38
029	900220509	久宝寺(89 - 342)	八尾市教育委員会	北亀井町3丁目55
031	900220806	久宝寺(90 - 246)	八尾市教育委員会	神武町17 - 20・21他
033	900221113	久宝寺(90 - 397)	八尾市教育委員会	流川町7丁目2他
034	900221114	久宝寺(90 - 398)	八尾市教育委員会	北亀井町1丁目9・13
035	900221115	久宝寺(90 - 11)	八尾市教育委員会	久宝寺2丁目2・23
038	910330221 ~ 0305	久宝寺(90 - 566)	八尾市教育委員会	久宝寺4丁目3・31
040	910330711	久宝寺(91 - 150)	八尾市教育委員会	流川町6丁目34・35
042	910330905	久宝寺(91 - 247)	八尾市教育委員会	神武町2 - 35
046	910331204	久宝寺(91 - 158)	八尾市教育委員会	北亀井町3丁目
048	920140207	久宝寺(91 - 479)	八尾市教育委員会	神武町190 - 1
050	920140622	跡部(92 - 121)	八尾市教育委員会	跡部本町4丁目4 - 20
051	920141027 ~ 1029	跡部(92 - 164)	八尾市教育委員会	跡部本町1丁目4 - 47
057	930150706	久宝寺(93 - 054)	八尾市教育委員会	南久宝寺1丁目40
061	940160310	久宝寺(94 - 69)	八尾市教育委員会	神武町143 - 175
063	940160908 ~ 1017	久宝寺(94 - 334)	八尾市教育委員会	神武町17他
070	960380109 ~ 0712	久宝寺(95 - 565)	八尾市教育委員会	流川・亀井
072	960380606	久宝寺(95 - 719)	八尾市教育委員会	久宝寺5丁目36
075	970190313	久宝寺(96 - 641)	八尾市教育委員会	神武町79 - 81
077	970190602	久宝寺(97 - 129)	八尾市教育委員会	久宝寺3丁目269 - 1他
078	970190701 ~ 1106	久宝寺(97 - 186)	八尾市教育委員会	南久宝寺1~3丁目・流川町6丁目
079	970190729	久宝寺(97 - 298)	八尾市教育委員会	北亀井町1丁目42 - 1
085	9801106330 ~ 0402	久宝寺(97 - 694)	八尾市教育委員会	久宝寺4丁目132 - 7
086	9801106614 ~ 0519	久宝寺(97 - 720)	八尾市教育委員会	久宝寺5丁目132
088	980101124 ~ 1125	久宝寺(98 - 415)	八尾市教育委員会	流川200他

※「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター、表1を加筆・修正

文獻	主な調査結果
熊谷信彦 本田由洋子 1996.3 「八尾市奥井所在久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書」JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う① 財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6巻 財大阪府文化財調査研究センター	古墳中期の大規模な塚
本元元興 1996.3 「八尾市奥井・流川所在久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書」財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第5巻 財大阪府文化財調査研究センター	
熊谷信彦 1998.3 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第25巻 財大阪府文化財調査研究センター	
本元元興 2001.2 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第60巻 財大阪府文化財調査研究センター	流川中河の川、古墳期の横式石室をもつ古墳(七ツ岡)の構造
金子正樹 2003.9 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅳ—大阪電都都市拠点地区駅前広場跡大木橋建設工事に伴う発掘調査—」財大阪府文化財センター調査報告書第102巻 財大阪府文化財センター	
西村 幸・山井麻衣子 2003.10 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ—大阪電都都市拠点地区旧調整事業(橋本橋更新事業)に伴う発掘調査—」財大阪府文化財センター調査報告書第103巻 財大阪府文化財センター	
西村 幸・奥村茂樹 2004.9 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ—大阪電都都市拠点地区旧竜華東西横建設に伴う発掘調査—」財大阪府文化財センター調査報告書第108巻 財大阪府文化財センター	
西村 幸・奥村茂樹 2004.9 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ—大阪電都都市拠点地区旧竜華東西横建設に伴う発掘調査—」財大阪府文化財センター調査報告書第118巻 財大阪府文化財センター	
1979.3 「久宝寺遺跡・大阪ガスK-K管路埋設工事に伴う埋蔵文化財調査略報」(昭和51.52年度埋蔵文化財調査年報)八尾市教育委員会	
高木真光 1983.3 「第6号跡部遺跡発掘調査概要報告書」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 1980.1981年度』八尾市教育委員会	古墳前期の方形築墓1基
本元敏孝 1990.3 「18 久宝寺遺跡発掘調査概要(85 - 191)」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
本元敏孝 1989.3 「13 久宝寺遺跡 625-の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	古墳前期の集落
近江俊秀 1989.3 「3 久宝寺遺跡 625 - 195の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 昭和63年度公共事業 八尾市教育委員会	
近江俊秀 1989.3 「4 久宝寺遺跡 625 - 269の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 昭和63年度公共事業 八尾市教育委員会	
近江俊秀 1989.3 「7 久宝寺遺跡 625 - 309の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡田清一 1990.3 「11 久宝寺遺跡 688 - 345の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡田清一 1990.3 「1 久宝寺遺跡 689 - 478の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
岡田清一 1990.3 「2 久宝寺遺跡 689 - 593の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
岡田清一 1990.3 「4 久宝寺遺跡 689 - 342の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
1991.3 「13 久宝寺遺跡 690 - 246の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
岡 斎 1991.3 「20 久宝寺遺跡 690 - 385の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
岡 斎 1991.3 「21 久宝寺遺跡 690 - 388の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22 八尾市教育委員会	
岡 斎 1991.3 「18 久宝寺遺跡 690 - 11の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告23 平成2年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1992.3 「1 久宝寺遺跡 690 - 566の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
1992.3 「11 久宝寺遺跡 691 - 150の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
吉田清一 1992.3 「16 久宝寺遺跡 691 - 247の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
本元敏孝 1996.3 「5 久宝寺遺跡 692 - 138の調査」『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書2』八尾市文化財調査報告34 平成7年度公共事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1996.3 「5 久宝寺遺跡 691 - 479の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1996.3 「8 跡部遺跡 692 - 121の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1996.3 「16 跡部遺跡 692 - 164の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1994.3 「6 久宝寺遺跡 693 - 034の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告29 平成5年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
本元敏孝 1996.3 「4 久宝寺遺跡 694 - 65の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告31 平成6年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
本元敏孝 1996.3 「5 久宝寺遺跡 694 - 334の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告31 平成6年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
藤平淳弘 吉田清一 1997.3 「7 久宝寺遺跡 695 - 569の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書2』八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会	
岡 斎 1997.3 「5 久宝寺遺跡 695 - 719の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
藤平淳弘 1998.3 「4 - 1 久宝寺遺跡 696 - 641の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	古墳中期-後期の河川相類
1998.3 「2 久宝寺寺内町遺跡 697 - 129の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書2』八尾市文化財調査報告39 平成9年度公共事業 八尾市教育委員会	
藤平淳弘 1998.3 「1 久宝寺遺跡 697 - 196の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書2』八尾市文化財調査報告39 平成9年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	内式内周-布置式期の河川相類
岡 斎 1998.3 「4 - 2 久宝寺遺跡 697 - 298の調査」『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告38 平成9年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
藤平淳弘 1999.3 「5 - 1 久宝寺遺跡 697 - 694の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	古墳(布置式期)の上層集積
岡 斎 1999.3 「5 - 2 久宝寺遺跡 697 - 720の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告40 平成10年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	
藤平淳弘 1999.3 「1 久宝寺遺跡 698 - 415の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書2』八尾市文化財調査報告41 平成10年度国庫補助事業 八尾市教育委員会	古墳前期の上層集積、前期以前の河川相類

表4 久宝寺遺跡周辺の既往調査(3)

番号	調査期間	調査名	調査主体	地区名
091	990110216 ~ 0318	久宝寺(08 - 524)	八尾市教育委員会	久宝寺6丁目
099	0001120508 ~ 0510	久宝寺(2000 - 48)	八尾市教育委員会	神武町1 - 79
101	0001120615 ~ 0516	久宝寺(09 - 639)	八尾市教育委員会	北亀井町3丁目41
111	9901110701 ~ 1005	跡部(09 - 132)	八尾市教育委員会	太子堂2丁目地内
112	8601109119	跡部(07 - 477)	八尾市教育委員会	春日町2丁目7 - 1
113	960101212	跡部(06 - 580)	八尾市教育委員会	春日町4丁目4
114	9601080529	跡部(05 - 675)	八尾市教育委員会	跡部本町3丁目・太子堂5丁目
115	9601080704	跡部(05 - 633)	八尾市教育委員会	太子堂1丁目地内
116	9101130315	跡部(2000 - 435)	八尾市教育委員会	春日町3丁目19,20
117	91011301019	久宝寺(2001 - 271)	八尾市教育委員会	久宝寺6丁目33,34,35,36
120	910300226 - 0307 - 08 - 12 - 14	久宝寺(00 - 467)	八尾市教育委員会	西久宝寺6 - 1
121	9001030319	跡部(02 - 623)	八尾市教育委員会	春日町2丁目35 - 135 - 2
143	0301150718	跡部(2003 - 128)	八尾市教育委員会	春日町1丁目51,52
144	0301150601	跡部(2002 - 496)	八尾市教育委員会	跡部北の町2丁目47 - 1,47 - 2
145	0301150910	跡部(2003 - 201)	八尾市教育委員会	跡部本町1丁目54他
不明	0201140905	久宝寺(2002 - 145)	八尾市教育委員会	清川町1丁目53 - 135 - 2,53 - 5
不明	0201140925	久宝寺(2002 - 199)	八尾市教育委員会	清川町1丁目37,38
不明	0201141105	久宝寺(2002 - 285)	八尾市教育委員会	久宝寺4丁目111,112,113
008	895571001 ~ 1005	跡部(A782 - 1)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町1丁目3
011	84S390402 ~ 0625	久宝寺(K184 - 1)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目1
014	88S630216 ~ 0229	久宝寺(K188 - 2)	八尾市文化財調査研究会	久宝寺6丁目236
019	88S630101 ~ 1022	跡部(A788 - 0)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町1丁目4 - 1,4 - 2
020	88S6301205 ~ 1228	久宝寺(K188 - 3)	八尾市文化財調査研究会	久宝寺4丁目
023	890111016 ~ 1130	跡部(A789 - 5)	八尾市文化財調査研究会	春日1丁目45 - 1
026	00020402 ~ 0612	久宝寺(K190 - 0)	八尾市文化財調査研究会	亀井・清川
028	000204015 ~ 0422	久宝寺(K190 - 5)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2丁目
032	000209030 ~ 1012	久宝寺(K190 - 6)	八尾市文化財調査研究会	神武町17 - 20 - 27他
037	000201217 ~ 1221	久宝寺(K190 - 7)	八尾市文化財調査研究会	清川町5丁目33
039	910300620 ~ 0727	久宝寺(K191 - 8)	八尾市文化財調査研究会	久宝寺2丁目2 - 33
041	910300801 ~ 1203	久宝寺(K191 - 9)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目1 - 72
043	910301002 ~ 1022	久宝寺(K191 - 10)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2・3丁目
044	910301007 ~ 1018	久宝寺(K191 - 11)	八尾市文化財調査研究会	清川町6丁目34・35
045	910301129 ~ 1202	久宝寺(K191 - 12)	八尾市文化財調査研究会	北久宝寺3丁目
047	910301216 ~ 93040123	久宝寺(K191 - 13)	八尾市文化財調査研究会	神武町2 - 35
049	920100526 ~ 0810	久宝寺(K192 - 14)	八尾市文化財調査研究会	神武町190 - 1
052	920100709 ~ 0810	跡部(A792 - 7)	八尾市文化財調査研究会	春日町1丁目47,48
053	920100805 ~ 0903	久宝寺(K192 - 15)	八尾市文化財調査研究会	西久宝寺
054	920100820 ~ 0905	跡部(A792 - 8)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町4丁目4 - 20
055	920101007 ~ 1013	跡部(A792 - 9)	八尾市文化財調査研究会	春日町1丁目
056	930150531 ~ 0608	久宝寺(K193 - 16)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目
058	930150719 ~ 0730	久宝寺(K193 - 17)	八尾市文化財調査研究会	久宝寺1丁目40

※「久宝寺遺跡・苑華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター、表1を加筆・修正

文脈	主な調査結果
藤井淳弘 2000.3「1.久宝寺遺跡(698-508)の調査」[八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告43 平成11年度公共事業 八尾市教育委員会	
西村公助 2003.3「4.久宝寺遺跡(2000-48)の調査」[八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告44 平成12年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
藤井淳弘 2003.3「5.久宝寺遺跡(1999-659)の調査」[八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告44 平成12年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	土内式厨一布笠式厨の遺物多数、集積層の遺:
吉田野乃 吉田由己 2000.3「4.跡部遺跡(696-132)の調査」[八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告43 平成11年度公共事業 八尾市教育委員会	
吉田野乃 1999.3「1.跡部遺跡(97-477)の調査」[八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告40 平成10年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
藤井淳弘 1998.3「付録、跡部遺跡(696-580)の調査【その2】」[八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告38 平成9年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
濱 肇 1997.3「1.跡部遺跡(695-679)の調査」[八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会	
濱 肇 1997.3「2.跡部遺跡(695-679)の調査」[八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会	
西村公助 2002.3「1.跡部遺跡(2000-439)の調査」[八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告46 平成13年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
吉田野己 2002.3「3.久宝寺遺跡(2001-271)の調査」[八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告46 平成13年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
濱 肇 1992.3「3.久宝寺遺跡(90-467)の調査」[八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告25 平成3年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
濱 肇 1994.3「1.跡部遺跡(692-629)の調査」[八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告29 平成5年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
成瀬佳子 2004.3「10.跡部遺跡(2003-128)の調査」[八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告49 平成15年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
濱 肇 2004.3「9.跡部遺跡(2002-496)の調査」[八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告49 平成15年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
岡田清一 2004.3「11.跡部遺跡(2003-201)の調査」[八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書Ⅱ]八尾市文化財調査報告49 平成15年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
堀口 薫 2003.3「12.久宝寺遺跡(2002-145)の調査」[八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告48 平成14年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
坪田真一 2003.3「13.久宝寺遺跡(2002-199)の調査」[八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告48 平成14年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
西村公助 2003.3「14.久宝寺遺跡(2002-285)の調査」[八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書Ⅰ]八尾市文化財調査報告48 平成14年度回廊補助事業 八尾市教育委員会	
西村公助 1983「11.跡部遺跡」[昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ]八尾市教育委員会	
原田昌国 1963.3「Ⅱ.久宝寺遺跡第1次調査(表KH84-1)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査研究会	古墳(布笠式古墳)の上層積層・自然河川
原田昌国 1968.12「23.久宝寺遺跡(第2次調査)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査研究会年報昭和62年度] 八尾市文化財調査研究会報告16	八尾市文化財調査研究会
西村公助 1969.12「19.跡部遺跡(第4次調査)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査研究会年報昭和63年度] 八尾市文化財調査研究会報告25	八尾市文化財調査研究会
原田昌国 1963.3「Ⅱ.久宝寺遺跡第2次調査(表KH84-11)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査研究会	古墳前期の方石基壇基から木柱と土器
安井貞三 1991.3「跡部遺跡発掘調査報告書-大阪府八尾市春日町1丁目上編-」 八尾市文化財調査研究会事業報告31 八尾市文化財調査研究会	編者が出土
坪田真一 1994.3「1.久宝寺遺跡第4次調査」[昭和69年度事業報告] 八尾市文化財調査研究会報告7 八尾市文化財調査研究会	
高成千枝 1991.12「Ⅱ.久宝寺遺跡(KH90-5)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告32 八尾市文化財調査研究会	赤土中期(近畿畿内式)の土器積層
原田昌国 1963.3「Ⅱ.久宝寺遺跡第6次調査(表KH90-6)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査報告37 八尾市文化財調査研究会	古墳初期(布笠式)の彫穴住居
1991.12「Ⅱ.久宝寺遺跡(KH90-7)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告32 八尾市文化財調査研究会	
坪田真一 1997.3「1.久宝寺遺跡第8次調査(表KH91-8)」[久宝寺遺跡] 八尾市文化財調査報告55 八尾市文化財調査研究会	古墳(土内新相)住居域、後期の耕作
成瀬佳子 1991.12「久宝寺遺跡の調査概観」[大阪府埋蔵文化財研究会(第35回)資料] 大阪府埋蔵文化財協会	古墳(布笠式古墳)彫穴住居2棟から裏掘土鏡・土鏡、方鏡2基、前方方鏡
原田昌国 1969.9「1.久宝寺遺跡第10次調査(表KH91-10)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査報告34 八尾市文化財調査研究会	
西村公助 1969.9「7.久宝寺遺跡第11次調査(表KH91-11)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査報告34 八尾市文化財調査研究会	古墳中期-後期の土坑、ピット、集積層
高成千枝 1969.9「Ⅱ.久宝寺遺跡第12次調査(表KH91-12)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査研究会報告34 八尾市文化財調査研究会	後生後生以降の自然河川
西村公助 1992.3「17.久宝寺遺跡第13次調査(表KH91-13)」[平成3年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会	布笠式河川から集積層部の木製品
坪田真一 1993.3「10.久宝寺遺跡第14次調査(表KH92-14)」[平成4年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会	
原田昌国 1961.12「1.跡部遺跡第9次調査(表AT92-7)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告39 [附]八尾市文化財調査研究会	
岡田清一 1993.12「Ⅱ.久宝寺遺跡第15次調査(表KH92-15)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査報告39 八尾市文化財調査研究会	
岡田清一 1993.12「Ⅲ.跡部遺跡第8次調査(表AT92-8)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告39 八尾市文化財調査研究会	
原田昌国 1993.12「Ⅲ.跡部遺跡第9次調査(表AT92-9)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告39 八尾市文化財調査研究会	
高成千枝・岡田清一 1994.10「Ⅳ.久宝寺遺跡第16次調査(表KH93-16)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書] 八尾市文化財調査報告42 八尾市文化財調査研究会	
岡田清一 1992.3「Ⅱ.久宝寺遺跡第17次調査(表KH93-17)」[八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ] 八尾市文化財調査報告55 八尾市文化財調査研究会	後生前期-古墳前期の集積、残機具の部品



表5 久宝寺遺跡周辺の既往調査(4)

番号	調査期間	調査名	調査主体	地区名
059	93H51125～1210	跡部(AT93-14)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町1丁目
060	94H560217～0221	亀井(KH96-4)	八尾市文化財調査研究会	亀井町1-2丁目・跡部本町4丁目
062	94H60901～1012	久宝寺(KH94-18)	八尾市文化財調査研究会	神武町143～175
064	94H60916～1118	跡部(AT94-17)	八尾市文化財調査研究会	太子堂1丁目
065	95H760113～0227	久宝寺(KH94-19)	八尾市文化財調査研究会	西久宝寺
069	95H80620～1114	久宝寺(KH96-20)	八尾市文化財調査研究会	渋川
073	96H801225-27 97H960116-20	久宝寺(KH96-21)	八尾市文化財調査研究会	西久宝寺
080	97H991023～98H100630	久宝寺(KH97-22)	八尾市文化財調査研究会	亀井・渋川
081	97H991022～98H100113	久宝寺(KH97-22)	八尾市文化財調査研究会	亀井
083	98H100602～99H110120	久宝寺(KH98-24)	八尾市文化財調査研究会	亀井・渋川
087	98H100629～0706	跡部(AT98-28)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町4丁目
090	98H101102～99H110831	久宝寺(KH99-25)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目
092	98H110323～0820	久宝寺(KH99-26)	八尾市文化財調査研究会	神武町93-1
093	98H110617～0721	久宝寺(KH99-27)	八尾市文化財調査研究会	北亀井3丁目1-72
094	98H110901～00H126310	久宝寺(KH99-28)	八尾市文化財調査研究会	亀井
095	98H110961～00H126130	久宝寺(KH99-29)	八尾市文化財調査研究会	渋川
096	98H126120～0307	久宝寺(KH99-30)	八尾市文化財調査研究会	亀井・渋川
097	00H126208～0330	久宝寺(KH99-31)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目
098	00H126313～0608	久宝寺(KH99-32)	八尾市文化財調査研究会	神武町168 他
100	00H126331～01H130228	久宝寺(KH2000-33)	八尾市文化財調査研究会	渋川
102	00H126718～1125	久宝寺(KH2000-34)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目41
103	00H1261016～1114	久宝寺(KH2000-35)	八尾市文化財調査研究会	神武町1-79
104	01H130110～0323	久宝寺(KH2000-36)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町
105	01H130910～1117	久宝寺(KH2001-37)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町3丁目
106	02H140109～1010(美観8日)	久宝寺(KH2001-38)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2丁目
107	02H140115～0329	久宝寺(KH2001-40)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2丁目
118	97H990408～1110	跡部(AT97-25)	八尾市文化財調査研究会	春日町2・3丁目
122	97H9620406～0518	跡部(AT97-3)	八尾市文化財調査研究会	安中町3丁目26,19-5
123	91H309030～1004	跡部(AT91-6)	八尾市文化財調査研究会	春日町1丁目
124	97H990421-0515-0626-0801	跡部(AT97-26)	八尾市文化財調査研究会	太子堂1・2丁目地内
125	97H990528～1110(美観7日)	跡部(AT97-27)	八尾市文化財調査研究会	春日町3・4丁目地内
126	96H800410～0419(美観5日)	跡部(AT96-22)	八尾市文化財調査研究会	太子堂1・2丁目地内
127	97H990303～0306(美観2日)	跡部(AT96-24)	八尾市文化財調査研究会	太子堂1・2丁目地内
129	01H131220～03H140121(美観14日)	跡部(AT2001-32)	八尾市文化財調査研究会	春日町4丁目13
130	03H141126～1213(美観11日)	久宝寺(KH2002-44)	八尾市文化財調査研究会	春日町1丁目・跡部北の町1丁目・渋川
131	03H141129～1220(美観13日)	久宝寺(KH2002-45)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町1・2丁目・渋川
132	03H140516～0909(美観29日)	跡部(AT2002-33)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町1・2丁目・春日町1丁目
133	03H140902～0911(美観7日)	跡部(AT2002-34)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町3丁目地内
134	03H141209～03H150114(美観6日)	跡部(AT2002-35)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町3丁目地内
135	03H140729～0819(美観3日)	久宝寺(KH2002-41)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2丁目地内
136	98H111129～00H126303(美観17日)	跡部(AT99-31)	八尾市文化財調査研究会	春日町2丁目・兼太子1丁目地内

※「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター、表1を加筆・修正

	文献	主な調査結果
高森千秋 1994.10 『I』 跡部遺跡第14次調査(AT93-14) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告42] 八尾市文化財調査研究会		
吉川清久 1998.3 『Y』 龍井遺跡第4次調査(KM96-4) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 1995.5 『K』 久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18) [平成6年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		9号土坑、軟質瓦片
成住洋子 1997.3 『V』 跡部遺跡第17次調査(AT94-17) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告56] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 1996.3 『B』 久宝寺遺跡第19次調査(KH94-19) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告50] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 2000.3 『E』 久宝寺遺跡第20次調査(KH96-20) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告66] 八尾市文化財調査研究会		古墳中期～後期河川から離隔材
岡田清一 1998 『F』 久宝寺遺跡第21次調査(AT96-21) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告60] 八尾市文化財調査研究会		放生の遺池
原田昌博他 1995.5 『R』 久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23) [平成10年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		放生後期の方形周溝墓から本塚
原田昌博 2001.10 『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書—大阪電撃都市拠点地区(区画道路2号線に伴う)—』 八尾市文化財調査研究会報告68 八尾市文化財調査研究会		古墳前期後半の方形周溝墓4基、住 内式古相の居住域
原田昌博他 2001.10 『久宝寺遺跡第21次発掘調査報告書—大阪電撃都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削に伴う—』 八尾市文化財調査研究会報告69 八尾市文化財調査研究会		古墳前期の水田、中期の住居域
森本めぐみ 2000.3 『H』 跡部遺跡第28次調査(AT98-28) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告65] 八尾市文化財調査研究会		
原田昌博他 1995.5 『10』 久宝寺遺跡第25次調査(KH96-25) [平成10年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		古墳前期の河川、後期の水田
岡田清一・橋口 薫 2002.3 『久宝寺遺跡—八尾市神武町93-1の道路築造工事に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告—』 八尾市文化財調査研究会報告70 八尾市文化財調査研究会		縄文前期～後期の自然遺跡
西村公尚 2000.6 『10』 久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27) [平成11年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		古墳初期～前期の壱次住居
原田昌博・西村公尚・岡田清一 2004.3 『I』 久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28) [財団法人 八尾市埋蔵文化財調査研究会報告72] 八尾市文化財調査研究会		古墳初期の方形周溝墓2基から本 塚、中期～後期の方墳1基、水田
坪田真一他 2001.6 『2』 久宝寺遺跡第29次調査(KH99-29) [平成12年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		放生後期一括資料、古墳中期の水田
原田昌博・西村公尚・岡田清一 2000.6 『13』 久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30) [平成11年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会 事業報告] 八尾市文化財調査研究会		
西村公尚 2000.6 『18』 久宝寺遺跡第31次調査(KH99-31) [平成11年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		
森本めぐみ 2000.6 『15』 久宝寺遺跡第32次調査(KH99-32) [平成11年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		古墳初期の耕作遺構、前期の壱次住 居
成住洋子・橋口 薫・金銀満夫 2001.6 『4』 久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33) [平成12年度 八尾市埋蔵文化財調査研 究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		
橋口 薫 2001.6 『5』 久宝寺遺跡第34次調査(KH2000-34) [平成12年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		放生後期末～古墳前期の壱次住居4 棟
森本めぐみ 2001.6 『16』 久宝寺遺跡第35次調査(KH2000-35) [平成12年度 八尾市埋蔵文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		
原田昌博・坪田真一 2004.3 『II』 久宝寺遺跡第36次調査(KH2000-36) [財団法人 八尾市埋蔵文化財調査研究会報告72] 八尾市文化財調査研究会		古墳前期の河川
原田昌博・橋口 薫・金銀満夫 2004.3 『E』 久宝寺遺跡第37次調査(KH2001-37) [財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 77] 八尾市文化財調査研究会		古墳前期の方墳2基
高森千秋 2002.6 『12』 久宝寺遺跡第38次調査(KH2001-38) [平成13年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 1999.3 『I』 跡部遺跡第35次調査(AT97-25) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告62] 八尾市文化財調査研究会		
1987.12 『19』 跡部遺跡(第3次調査) [八尾市埋蔵文化財発掘調査研究会年報昭和62年度] 八尾市文化財調査研究会報告 16 八尾市文化財調査研究会		
高森千秋 1992.9 『文書』 跡部遺跡第6次調査(AT91-6) [八尾市埋蔵文化財発掘調査報告] 八尾市文化財調査研究会報告34 八尾市文化財調査研究会		
高森千秋 1999.3 『I』 跡部遺跡第26次調査(AT97-26) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告62] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 1999.3 『E』 跡部遺跡第27次調査(AT97-27) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告62] 八尾市文化財調査研究会		
高森千秋 1998 『I』 跡部遺跡第22次調査(AT96-22) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告60] 八尾市文化財調査研究会		
高森千秋 1998 『II』 跡部遺跡第24次調査(AT96-24) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告60] 八尾市文化財調査研究会		
岡田清一 2003.6 『I』 跡部遺跡第32次調査(AT2001-32) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告76] 八尾市文化財調査研究会		
岡田清一 2003.6 『II』 久宝寺遺跡第44次調査(KH2002-44) [財団法人 八尾市文化財調査研究会報告76] 八尾市文化財調査研究会		
成瀬佳子 2003.6 『V』 久宝寺遺跡第45次調査(KH2002-45) [財団法人 八尾市文化財調査研究会報告76] 八尾市文化財調査研究会		
尾形和雄・成瀬佳子 2003.3 『I』 跡部遺跡第33次調査(AT2002-33) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告75] 八尾市文化財調査研究会		
坪田真一 2003.3 『E』 跡部遺跡第34次調査(AT2002-34) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告75] 八尾市文化財調査研究会		
金銀満夫 2003.3 『E』 跡部遺跡第35次調査(AT2002-35) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告75] 八尾市文化財調査研究会		
西村公尚 2003.3 『文書』 久宝寺遺跡第41次調査(AT2002-41) [財団法人 八尾市文化財調査研究会報告75] 八尾市文化財調査研究会		
森本めぐみ 2001.3 『I』 跡部遺跡第31次調査(AT99-31) [財団法人八尾市文化財調査研究会報告67] 八尾市文化財調査研究会		

表6 久宝寺遺跡周辺の既往調査(5)

番号	調査期間	調査名	調査主体	地区名
137	88H100729～0801(実働4日)	跡部(AT98-29)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町1丁目4-16～35
138	99H110120～27(実働夜間2日)	跡部(AT98-30)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町4丁目地内
139	03H140122～0329(実働37日)	久宝寺(KH2001-39)	八尾市文化財調査研究会	亀井地内
140	02H141018～1108	久宝寺(KH2002-43)	八尾市文化財調査研究会	清川地内
141	03H150603～0606	久宝寺(KH2003-58)	八尾市文化財調査研究会	亀井地内
142	03H150908～04H160331(実働119日)	久宝寺(KH2003-52)	八尾市文化財調査研究会	清川
146	03H50119～0215	跡部(AT92-10)	八尾市文化財調査研究会	春日町3丁目
147	03H50517～0714	跡部(AT93-11)	八尾市文化財調査研究会	東太子1丁目106
148	03H51213～94H960927(実働13日)	跡部(AT93-15)	八尾市文化財調査研究会	春日町1丁目2-44
149	94H960912～1013	跡部(AT94-16)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町1丁目
150	94H960922～1027(実働6日)	跡部(AT94-18)	八尾市文化財調査研究会	跡部本町3丁目
151	97H990221～0331(実働24日)	跡部(AT96-23)	八尾市文化財調査研究会	春日町4丁目4
152	03H151107～1116(実働5日)	跡部(AT2003-36)	八尾市文化財調査研究会	跡部北の町3丁目地内
153	03H151126～1216(実働15日)	久宝寺(KH2003-54)	八尾市文化財調査研究会	竜華町2丁目
154	03H150310～0407	久宝寺(KH2002-48)	八尾市文化財調査研究会	竜華町1丁目
155	03H150611～0826	久宝寺(KH2003-49)	八尾市文化財調査研究会	神武町93-1・4
156	94H160701～0903(実働13日)	久宝寺(KH2003-56)	八尾市文化財調査研究会	神武町93-1・4
		久宝寺(KH2002-42)	八尾市文化財調査研究会	
		久宝寺(KH2002-46)	八尾市文化財調査研究会	
164	03H150228～0702(実働30日)	久宝寺(KH2002-47)	八尾市文化財調査研究会	北亀井町2丁目
		久宝寺(KH2003-51)	八尾市文化財調査研究会	
161	03H151003～1009	久宝寺(KH2003-53)	八尾市文化財調査研究会	亀井-跡部の町2・3丁目
		久宝寺(KH2003-55)	八尾市文化財調査研究会	
162	94H160705～0707	久宝寺(KH2004-57)	八尾市文化財調査研究会	竜華町2丁目
		久宝寺(KH2004-58)	八尾市文化財調査研究会	
		久宝寺(KH2004-59)	八尾市文化財調査研究会	
		久宝寺(KH2004-60)	八尾市文化財調査研究会	
		久宝寺(KH2004-61)	八尾市文化財調査研究会	
163	03H170120～0125(実働4日)	久宝寺(KH2004-62)	八尾市文化財調査研究会	竜華町1丁目

る。久宝寺遺跡の周辺では市内から布留式期にかけての墳墓が見つまっているものの、平野部では古墳時代を通して大規模な古墳が築造された例は認められない。前期古墳としては生駒山地西麓の楽音寺古墳群、玉手山丘陵の玉手山古墳群、中期は羽曳野台地の古市古墳群、生駒山地西麓の心合寺古墳等が挙げられるが、いずれも台地や丘陵上に位置し、本調査区から最も近いと考えられる心合寺古墳は約5.6kmの距離を測る。平野部では弥生時代の方形周溝墓の流れを汲む小型の方墳で構成される古墳群が造営されるようであり、八尾市亀井遺跡・美園遺跡、大阪市加美遺跡・長原古墳群等が挙げられる。しかし、これらの古墳群も後期前半のうちに造られなくなり、替わって生駒山地西麓部に高安古墳群・山畑古墳群等の群集墳や横穴墓が築かれるようになる。

**飛鳥・奈良時代** 大化改新により全国に国郡が設置され、当地周辺は河内国洪川郡という行政区画に属することとなった。「久宝寺」という名称は飛鳥時代に聖徳太子が建立した寺として現れるが、早い段階に失われて地名だけが残ったようである。町名の「竜華」も、創建は不明であるが、奈良時代に称徳天皇が「龍華寺」に参詣したという記録が残る。明らかなものとしては洪川廃寺・鞍作廃寺・弓削廃寺等があり、此地に古代寺院が多数存在したことがわかる。これらの寺院は集落に伴っていたと考えられ、本遺跡の他に八尾市太子堂遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡等が挙げられる。

※「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V」(財)大阪府文化財センター、表1を加筆・修正

文献	主な調査結果
森本めぐみ 2000.3「I 跡部遺跡第28次調査(AT98-28)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告45] 八尾市文化財調査研究会	
岡田清一 2000.3「II 跡部遺跡第29次調査(AT98-29)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告46] 八尾市文化財調査研究会	
原田昌樹・成海佳子 2002.6「13 久宝寺遺跡第39次調査(KH2001-39)」[平成13年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会	
野田真一・金藤謙夫 2005.3「I 久宝寺遺跡第43次調査(KH2002-43)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	
金藤謙夫 2004.6「11 久宝寺遺跡第50次調査(KH2003-50)」[平成15年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会	
樋口 薫 2004.6「13 久宝寺遺跡第52次調査(KH2003-52)」[平成15年度 八尾市文化財調査研究会事業報告] 八尾市文化財調査研究会	
西村公壽 1997.3「I 跡部遺跡第10次調査(AT92-10)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会	
成海佳子 1997.3「II 跡部遺跡第11次調査(AT94-11)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会	
岡田清一 1997.3「III 跡部遺跡第15次調査(AT93-15)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会	
成海佳子 1997.3「IV 跡部遺跡第16次調査(AT94-16)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会	
原田昌樹 1997.3「V 跡部遺跡第18次調査(AT94-18)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告58] 八尾市文化財調査研究会	
原田昌樹 2004.12「II 跡部遺跡第23次調査(AT96-23)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告81] 八尾市文化財調査研究会	
成海佳子 2005.3「I 跡部遺跡第36次調査(AT2003-36)」[財団法人八尾市文化財調査研究会報告82] 八尾市文化財調査研究会	
成海佳子 2005.3「V 久宝寺遺跡第54次調査(KH2003-54)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	
野田真一 2005.3「II 久宝寺遺跡第48次調査(KH2002-48)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	
高森千枝・坪田真一 2005.3「III 久宝寺遺跡第49次調査(KH2003-49)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	
原田昌樹 2005.3「VII 久宝寺遺跡第56次調査(KH2003-56)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	古墳中期自然河川の右岸堤
成海佳子 2004.3「V 久宝寺遺跡第47次調査(KH2002-47)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会報告78] 八尾市文化財調査研究会	
成海佳子 2005.3「IV 久宝寺遺跡第53次調査(KH2003-53)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	
樋口 薫 2005.3「III 久宝寺遺跡第57次調査(KH2004-57)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告] 八尾市文化財調査研究会	古墳中期の堀の一部と考えられる坑
荒川和哉 2005.3「VII 久宝寺遺跡第62次調査(KH2004-62)」[財団法人 八尾市文化財調査研究会83報告](財)八尾市文化財調査研究会	

**平安時代** 八尾市小阪合遺跡・中田遺跡等が当該期に属するものの、耕作地以外に明確な遺構はみられない。寺社に平安時代の作とされる仏像が残るものの、定かではない。

**中世から近世** 1470年に蓮如上人が久宝寺跡地に西証寺(後の顕証寺)を建立し、これを中心に久宝寺寺内町が発達した。戦国期には濠と土堀の巡る要塞と化したのが、大坂冬の陣・夏の陣では主戦場の一つとなったため一面は焼け野原になったとされる。八尾市小阪合遺跡・笠振遺跡、大阪市長原遺跡等から同時期の遺構がみついている。この頃、調査地の周辺は亀井村に属しており、近世の絵図には村の北端に広がる田畑として記されている。1704年の新大和川付替え工事以降は平野川と長瀬川が枯渇し、跡地は新田として開発された。

**近代** 1889(明治22)年、大阪鉄道が大坂湊町から柏原を結ぶ路線を開通し、久宝寺の畠田の中を鉄道が通ることになった。当初はこの地区に駅がなく、国有化された後の1910(明治43)年ようやく久宝寺駅が設置された。その後、急速な産業の発展に伴う輸送量の増大に対応するため、1938(昭和13)年、当地に竜華操車場が操業された。国鉄の民営化に伴う1986(昭和61)年の廃止まで、48年間にわたり近畿地区の物流拠点として活躍した。

参考：市原 実「続・大阪群像-古瀬戸内河湖水系-」[URBAN KUBOTA] 39、株式会社クボタ、2001年3月、他。

## 第3章 基本層序と遺構面

### 第1節 02-1 調査区周辺

本書の主要な成果となる「水みらいセンター」の02-1調査区では、現地調査において層序の共通認識を維持するために担当者間の調整を可能な限り行うようにした。しかし、調査面積が広いために調査区内の地形や堆積状況の変化が激しく、各トレンチ内でさえ温度差の生じる場合があった。整理作業では、まず02-1調査区におけるトレンチ間の遺構面と層序の整合を行い、これに隣接する周辺調査区を対照することにした(表7~10)。

なお、02-2および04-1調査区は後発であったことから、当初より統一名称を使用したために修正は行っていない。一方、01-1・2・4調査区については調査時の名称から大幅に変更することとなり、当時の名称との対照を明示する。

01-1・2調査区は調査を狭小な範囲で行ったために不整合が著しく、02-1調査区との境界を10m間隔で区切り、それぞれの遺構面の標高を比較しながら検証を行った。地形変化の大きい遺構面の前後において、特に対応関係の崩れていることがわかる。検証には遺構面のみを用いたが、標高データが得られないという理由だけではなく、遺構に関する整合と帰属の検証を兼ねたためである。また層を対象とすると複数時期の遺物が混入した場合に対照関係が不明瞭となり、誤った整合を行う可能性もあったためである。このようにして層序の整合を検討した結果、ほぼすべての調査区における対応関係を把握することができた。隣接しない00-1・01-3調査区については層序の対照は不可能であったが、大まかな時期区分を参考に基本層序の表現を統一することにした。

層の名称については、遺跡調査基本マニュアルにおいて「上から順に確認したものに対して連続する番号を設定」することとなっているが、02-1調査区ではそれ以前に池島・福万寺遺跡の方式を採用していたことや、上記のように現地にて基本的な層序がほとんど整理されていたことから、改めて層名を設定することは避け、現地成果を踏襲することにした。層名の基本的な設定方法は、自然堆積から土壌化へという一連の流れと捉えられる層には、その数に関わらず同番号を冠し、土壌化層にはa、その基盤となった直下の自然堆積層にはbを末尾に付す。この層番号は基本的に時期・時代毎に大別し、その中の土壌化層には「-」による枝番を設定した。遺構や堆積の状況に応じて細分できるものについては、さらに枝番の後に( ) 付き数字を記して対応した。

遺構(旧地表)面の名称については、検出面の基盤となる直下の層名を面に置き換えて呼称する。第○a面は旧表土である第○a層という土壌化層に対する最終廃絶面であり、自然堆積層に覆われる。一方、この土壌化層を除去した基盤層上面において検出した第○b面は、同じ第○a層の旧表土に対する最古面となる。後者から検出した遺構については、本来その帰属は最終廃絶面(第○a面)の直前から最古面(第○b面)の間のいずれかとしか捉えられない。しかし、遺物の出土しない遺構が全体の7割以上を占めており、遺物の時期からすべてを検証することは不可能であることから、本書では遺構の帰属根拠は検出面を第一とし、標高や周辺調査区との連続性をもって検証する。

以下に、下層から順に個別層序の説明を行う。なお、01-1・2調査区と02-1調査区については、本文中では対照表のみを掲載する。断面図と土色については付図1・2、写真は図版1を参照されたい。

## 縄文時代

第13層 第13～11層は「水みらいセンター」工事中あるいは04-1調査区においてのみ確認した。これは調査深度の問題によるもので、いずれの層も土壌化が進んでいることから調査地一帯に形成していると推測する。第13層は砂礫を基調とする土壌化層とその基盤層である。層内から出土した植物遺体の放射性炭素年代測定（AMS法、以下AMS年代）では、縄文時代前期前半が示されている。T.P.+2.0m付近に検出し、層厚は約10cmである。基盤となる粗砂内にはかなり密度の高い硫黄結晶が認められた。

第12層 T.P.+2.5m前後に検出する土壌化層と基盤層である。粘土・シルトを主体とする泥層であり、粒形はみえないもののブロック状を呈する。炭化物を多く含み、層厚は数cmから50cmを測る。

第11層 T.P.+3.0m付近にて検出した土壌化層と基盤層であるが、場所によっては2層に分化する。粘土・シルトを主体とし、植物遺体を多く含む。

表7 02-1 調査区の各トレンチ層序対応

遺構面名称	Aトレンチ		Bトレンチ		Cトレンチ		
	北半 (A1)	南半 (A2)	北半 (B1)	南半 (B2)	北半 (C1)	南半 (C2)	
0	0	0	機械掘削終了		0		明治期
1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	近世
	1-1下						
1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	
1-3	1-3	1-3	1-3	1-3	1-3	1-3	
1-4	1-4	1-4		1-4	1-4	1-4	
1-4b	1-4下	1-4下	1-4	1-4下・b	1-4下	1-4下	
2	2-1 a	2	2	2	2	2-1下	中世
3-1	3-1 a	3-1 b	3-1	3-1	3-1 a × 2	3-1 (1) b	古代
	3-1 a・b	3-1 b				3-1 b 除去	
3-2	3-2 a	3-2 a	3-2		3-2 a	3-2	
	3-2 b				3-2 b	3-2中・除去	
3-3	3-3 a	3-3 a	3-3		3-3 a	3-3 a	
3-3b	3-3 b	3-3 b		3-3 b	3-3 b		
					4-0		
4-1	4-1-1 a	4-1-1 a	4-1	4-1	4-1 a	4-1 a	古墳時代前期
4-1(2)	4-1-1 b				4-1 b (下)	4-1 (2)	
	4-1-2 a	4-2-1 a					
		4-2-1 b					
4-2	4-2 a	4-2-2 a	4-2	4-2	4-1 b	4-2	
4-2b		4-2-2 b		4-2 b		4-2 b	
5-1(1)		4-3-1 a		4-3			
		4-3-2 a					
5-1(2)	5-2	5-1	5-1	5-1	5-1	5-1	弥生時代末～ 古墳時代初頭
5-2	5-3	5-2	5-1 b	5-2	5-2	5-2	
	5-4 a	5-3					
	5-4 b						
5-2b	高まり周辺のみ (大塚群以降)	5-5 a	5-4 a	5-2 b	5-2 b	5-2 b	
		5-5 b	5-5 b	5-2 b	5-2 b	5-2 b	
				5-3	5-2 b中×2	5-2 b中	
6-1	6-1	6-1	6-1	6-1	6-1	6-1	弥生時代後期
6-2	7-1-1	6-2	6-2 (1)	6-2 (1)	6-2	6-2 (1)	
			6-2 (2)	6-2 (2)・b	6-2 b-7-1	6-2 (2)・b	
7-1	7-1-1 a	7-1-1	7-1	7-1	7-1	7-1	弥生時代中期
		7-1-2					
7-2	7-2	7-2	7-2	7-2	7-2	7-2	
8a		8-1	8 a	8 a	8 a・8 b	8 a	縄文時代晩期～
8b		8 b	8 b	8 b	8 b	8 b	弥生時代前期
9		9 a	9 a・b・10 a・b		9	9	縄文時代後期
10				10		10	
10b				10 b		10 b	

※断面図のトーンは上図に準拠する。

表8 O1-1調査区とO2-1調査区の層序対応

通観番号	①トレンチ		②トレンチ		③トレンチ		④トレンチ		⑤トレンチ		⑥トレンチ		通観番号
	E	W	E	W	E	W	E	W	E	W	E	W	
0													0
1-1					1-1	1-1	1-1	1-1					1-1
1-2					1-3				1-1	1-1			1-2
1-3									1-2	1-2			1-3
1-4								1-2	1-2	1-2			1-4
1-4F								1-2	1-2				1-4F
2							2-5						2
3-1	2-12-1				3-13-13-12				2-1	2-12-1	2-2		3-1
3-2	3-3-2				3-3-3-3-2				3-1	3-1	3-1		3-2
3-3	3-3-3	3-3			3-3-3-3-2				3-2	3-2			3-3
4-1	4-2-4-4	4-4			4-2				3-2	3-2			4-1
4-2	4-2-4-2								5-15-1				4-2
5-1	5-15-1												5-1
5-1(1)													5-1(1)
5-1(2)	5-5-5-5-5-5-1				5-1				5-1	5-1			5-1(2)
5-2	5-5-1	5-5-1			5-2				6-1	6-1			5-2
5-2(1)	5-5-3-5-5-2				5-2-2				5-15-15-2	5-2	5-15-1		5-2(1)
5-2(2)	5-5-3-5-5-5				5-2				5-25-25-26-1	6-1	6-15-25-2		5-2(2)
6-1					5-2				6-1	6-1			6-1
6-2	6-4	6-16-16-35-3			6-3				6-1	6-2	6-2		6-2
6-2b	6-4	6-55-65-68-4-4			6-3				6-36-37-1				6-2b
7-1	6-16-4				6-3				6-17-3				7-1
7-2	6-4	6-5			6-3				6-1	6-2	6-2		7-2
8	6-15	6-15-15-1			6-3				6-1	6-2	6-2		8
8b	6-5	6-15-15-15-1			6-3				6-2	6-2	6-2		8b
9		6-15-15-15-15-1			6-3				6-2	6-2	6-2		9
9b					6-3								9b
10					6-3								10

※赤字は航空写真図の名称、黒字はその層(実測)形式・通観番号等の記号名称

表 9 01-2 調査区と 02-1 調査区の層序対応

調査区 層序名	②トレンチ			①トレンチ			③トレンチ			④トレンチ			調査区 層序名			
	W	E	W	(層)	E	S	(層)	N	S	(層)	N	E		(層)	W	E
0																0
1-1										2						1-1
1-2																1-2
1-3														2		1-3
1-4			3	3										2		1-4
1-4F										2	2	2		2		1-4F
2-1																2-1
3-1			3	3	3					2	2	2		2		3-1
3-2			2													3-2
3-3										2						3-3
4-1			3	3	4											4-1
4-2			4	4						4	4	4		4		4-2
5-1(a)			5	5	5											5-1(a)
5-1(b)			5	5	5	5	5	5	5							5-1(b)
5-2			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5-2
5-2b(1)			7-1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5-2b(1)
5-2b(2)			6	6	6											5-2b(2)
6-1			7-2							7-1	7-1	7-1	7-1	7-1	7-1	6-1
6-2										8	8	8	8	8	8	6-2
6-2b																6-2b
7-1										7-1	7-1	7-2	7-2	7-2	7-2	7-1
7-2																7-2
8			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	8
8b			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	8b
9																9
9b																9b
10																10
10b																10b

赤字は航空調査区の名称、黒字はその層(充填・方草・遺物・遺構等)の記録名称



東壁断面

N  
+7.0m

S

- 1 黄砂 10Y7S/6  
粘土(4) (底鉄 細砂わずかに含む)
- 2 黄灰 25Y4/1  
粘土(4) (底鉄 細砂わずかに含む)
- 3 灰 5Y5/1  
粘土(4) (管状底鉄)
- 4 腐緑灰 5G4/1  
粘土(4) (細砂多く含む)
- 5 灰 10Y5/1  
粘土(4) (底鉄-細砂わずかに含む)
- 6 腐緑灰 25Y3/2  
粘土(4) (底鉄-細砂わずかに含む)
- 7 灰 10Y5/1  
粘土(4) (管状底鉄)
- 8 腐緑灰 5G4/1  
粘土(4) (細砂多く含む)
- 9 灰 7.5Y4/1  
粘土(4) (管状底鉄多く含む)
- 10 腐砂(ア) 2.5Y3/1  
粘土(4) (管状底鉄多く含む)
- 11 灰 7.5Y3/1  
粘土(4) (底鉄-細砂わずかに含む)
- 12 灰 7.5Y6/1  
粘土(4) (底鉄-細砂わずかに含む)
- 13 腐 10YR1/4  
24) (細砂わずかに含む 底鉄)
- 14 腐砂 10YR3/2  
24) (細砂わずかに含む 底鉄)
- 15 灰白 10Y7/1  
細砂・大礫
- 16 にぶい黄 10YR1/3  
腐砂(底鉄)
- 17 黄砂 2.5Y5/4  
細砂 (9?あり)
- 18 灰白 5Y7/1  
細砂 (9?あり Fe)
- 19 灰白 5Y7/1  
細砂 (9?あり Fe)
- 20 灰 5Y4/1  
粘土(4) (管状底鉄)
- 21 灰 10Y4/1  
24) (細砂多く含む Fe)
- 22 灰 N1/  
腐砂(底鉄) (上部Fe沈着)
- 23 灰 7.5Y6/1  
細砂 (管状底鉄)
- 24 灰 10Y6/1  
底鉄-細砂(24) (9?あり)
- 25 灰 N1/  
腐砂(底鉄) (上部Fe沈着)
- 26 浅黄 5Y7/4  
細砂
- 27 浅黄 5Y7/4  
細砂
- 28 灰 5Y4/1  
24) (細砂わずかに含む  
炭化物多く含む 管状底鉄)
- 29 浅黄 5Y7/4  
細砂 (9?あり)
- 30 灰 7.5Y4/1  
24) (9?)  
腐灰黄 N3/  
24) (炭化物わずかに含む Fe)
- 31 腐灰黄 N3/  
24) (9?)  
24) (上部炭化物-植物遺体多く含む)
- 32 黄灰 2.5Y4/1  
粘土(4) (底鉄)
- 33 腐砂わずかに含む 炭化物含む  
腐砂(ア) 灰 5GY4/1  
24) (底鉄あり)
- 34 浅黄 5Y3/3  
細砂 (9?あり)
- 35 腐緑灰 10G4/1  
粘土(4)
- 36 腐緑灰 10GY4/1  
粘土(4) (植物遺体含む 互層)
- 37 腐砂(ア) 灰 2.5GY4/1  
粘土(4) (植物遺体わずかに含む)
- 38 腐灰 5G2/1  
粘土(4) (炭化物含む)
- 39 腐灰 N3/  
粘土(4) (炭化物、植物遺体含む)
- 40 腐灰 N3/  
腐砂(底鉄) (24)
- 41 灰白 2.5GY8/1  
細砂
- 42 腐緑灰 10GY3/1  
腐砂(底鉄) (炭化物わずかに含む 9?あり)
- 43 灰白 2.5GY8/1  
細砂

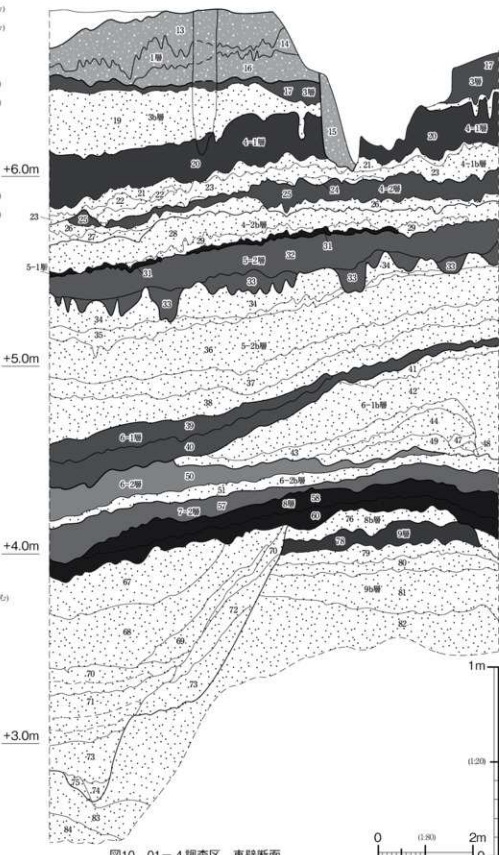


図10 01-4調査区 東壁断面

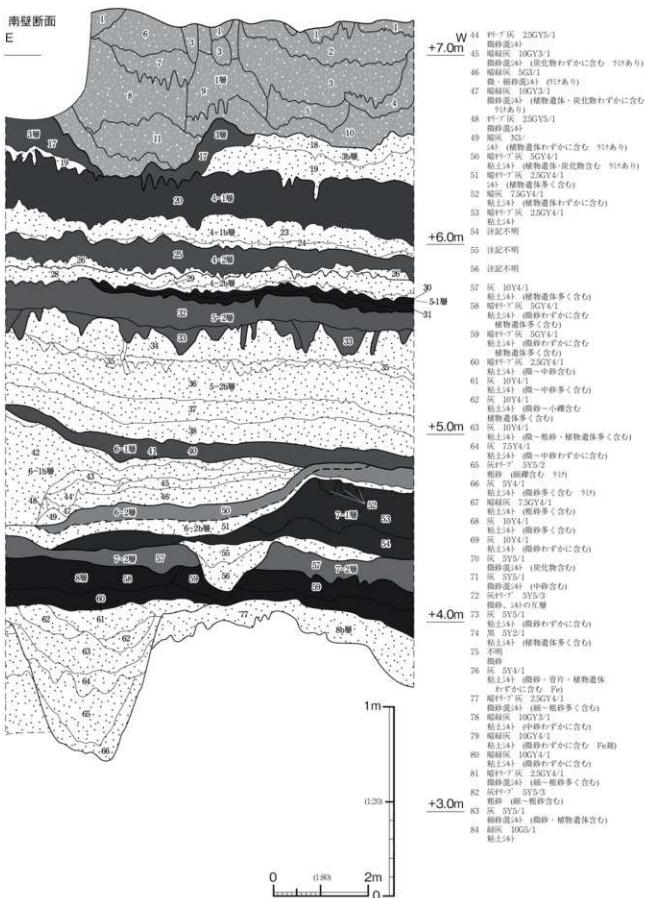


図11 01-4調査区 南壁断面

**第10層** 黒褐色泥土を主とする土壌化層とその基盤層であり、T.P.+4.0m前後において検出される。調査区の西側では土壌化層相当の部分に植物遺体が多量に含まれたり、3層に分化したりすることから、やや低所で半湿地化していたと考えられる。出土した植物遺体のAMS年代は-3,325±30年であり、縄文時代後期中頃と推定する。

**第9層** オリブ黒色シルトの土壌化層と基盤層である。第10層の上方にはほぼ平行して検出した。調査区の中央部から西側にかけて微高地形を呈し、部分的には第8 a層と接しており、上面が侵食される。層厚は約10cmである。

#### 弥生時代

**第8層** 砂質の黒色シルトを主とする土壌化層とやや粗い砂の多い基盤層からなり、T.P.+3.8~4.5mにおいて確認した。場所により10m近くの土砂（第8 b層）が堆積するような洪水が縄文時代後期後半に発生し、

終息した後の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて土壌化（第8 a層）したものである。第8 a層の土壌化度合いは著しく、層厚が40cm近くに達する地点もあることから、長期間にわたって地表化していたと思われる。なお、本文中では第8 b面を上下に二分するが、土層自体を細分化できたものではなく、遺構や遺構面の説明上に必要であったため、便宜的に分けたものである。

**第7層** 自然堆積層のb層をほとんど挟まずに第8 a層直上において検出した土壌化層であり、暗緑灰色やオリブ黒色の中細砂混シルトを主体とする。この土壌化層は調査区のほぼ全域において上下2層の細分が可能であり、下を第7-2層、上を第7-1層と呼称する。いずれの土層上面からも水田遺構が検出されることから同層は耕作土と考えられ、下層である第8 a層上部の細分とも捉えられなくもない。しかし、地形の低位を中心に、部分的ながら間層に中砂の残存する箇所や明らかに第8 a層と異なる土質で搅拌の様子を看取できる場所があることから、第7層と区別した。

**第6層** 炭化した植物遺体を層状に含む緑灰色の泥土を主とする。第7層の上部に層厚50cm前後で堆積し、標高はT.P.+4.5~5.0mを測る。土壌化層と自然堆積層との組み合わせが重なっており、上を第6-1層、下を第6-2層と呼称する。いずれのa層も下層に比べると土壌化が弱く、一部に自然堆積時のラミナが残っていることから、地表化した期間が短かく、水田耕作による搅拌があまり及ばなかったものと推測される。

#### 古墳時代

**第5層** 場所によっては層厚1.0m以上に達する基盤層と、2から5層に分化する土壌化層から構成される。基盤となる自然堆積層は、東西方向の土層断面において粘土から細礫まで多様に変化する状況が認められ、本調査区内だけでも堆積環境の異なる地点が存在したことは明らかである。これらの土砂をもたらした氾濫が南北方向に発生したと考えられ、またそれらが数次にわたって繰り返された可能性を示唆するものと捉えられる。土壌化層は灰色から黒色のシルトや細砂を主とし、上部の土壌化が著しい部

表10 01-4調査区と02-1調査区の層序対応

02-1調査区	01-4調査区	
	層名	遺構面名
1	1~3	機械掘削終了面
2		
3	4	1
	5	
4-1	6	2
4-2		
4-2 b		
5-1 (1)	7	
5-1 (2)		
5-2		3
5-2 b	8~12	4
6-1	13	5
		6
7-1	14	7
	15	8
		9
8 a	19	10
8 b	20	

分を第5-1層、それ以下を第5-2層と呼称する。調査区中央から西側は高所となっており、その土壌化層には多数の遺物が含まれる。対する東側は低位であり、細分化した遺構面では水田が検出されたことから、耕作土として分化したものと考える。なお、遺構面は第5-2b面と第5-1面をそれぞれ(1)(2)に分解しているが、前者は遺構の重複状況から便宜的に2分したもので、後者は4b層中において検出した遺構を第5-1面の一部が変化したものと捉えた。

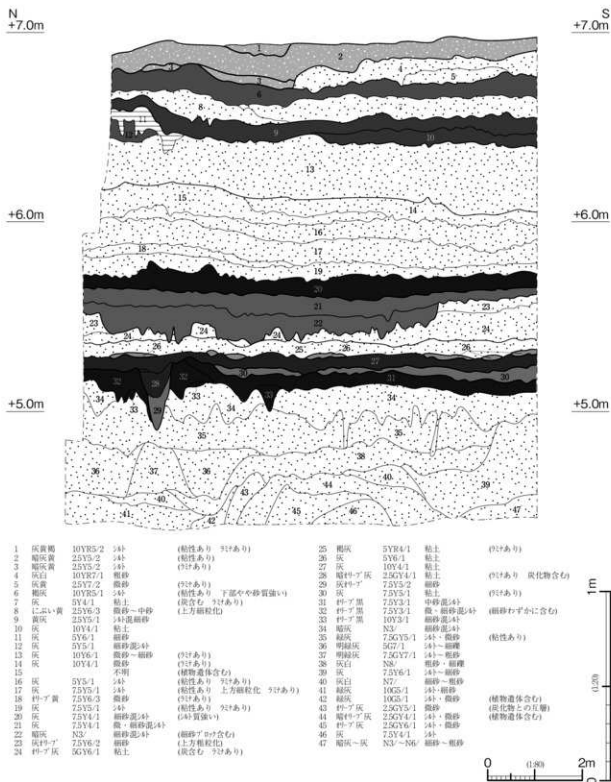


図12 02-2調査区 中央断面(南北)

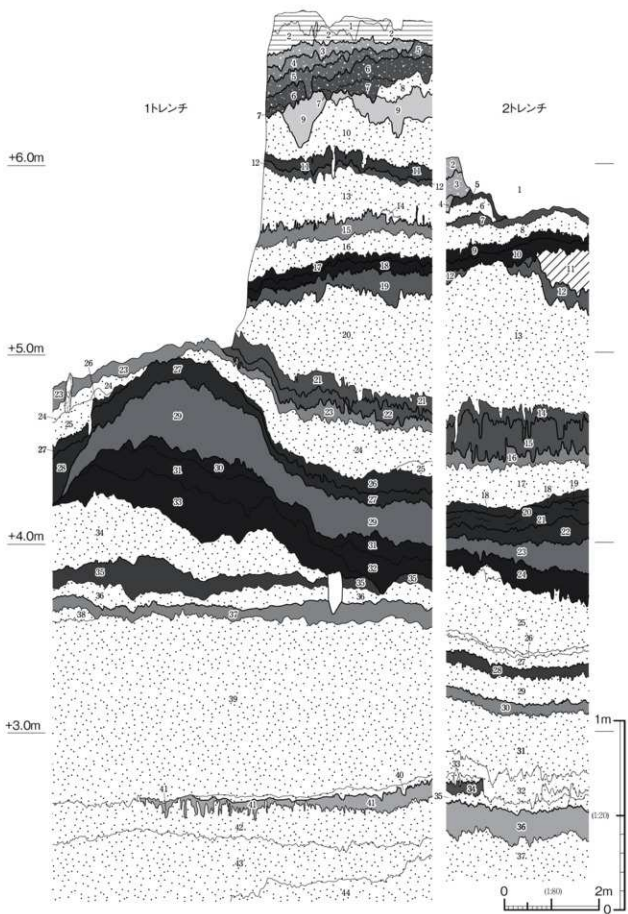


図13 04-1調査区 西壁断面

## 1 トレンチ 西壁

1		押車場盛土	
2		粘土(4)混砂	(中・粗砂・粘土(4)アコフ、 植物遺体含む)
3	灰	細砂混粘土(4)	(炭化物含む)
4	灰	中・細砂混(4)	(粘土含む)
5	灰	中・粗砂混(4)	(粘土わずかに含む 粗砂含む)
6	灰	中・粗砂混(4)	(粗砂含む)
7	青灰層	中・粗砂混粘土(4)	(粘土含む 下部にMn灰)
8	灰	粗砂混(4)	(Mn灰 全体にFe沈着) (げけあり 上方粗粒化 Fe沈着 炭鉄)
9	19-7黒	2.5Y4/3 細砂～粗砂混(4)	(微砂アコフ含む 炭化物含む) (微砂アコフ含む 炭化物含む)
10	灰+7	5Y5/2 細砂～粗砂混(4)	(植物遺体・炭化物含む) (微砂アコフ含む 炭鉄?)
11	灰	7.5Y4/1 粘土・(4)	(植物遺体・炭化物含む)
12	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(アコフ状 植物遺体層との互層 ?あり)
13	19-7黒	5Y3/2 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
14	19-7黒	5Y3/2 粘土・(4)	(植物遺体・炭化物含む) (炭鉄わずかに含む 炭化物多く含む 上部に植物遺体含む)
15	灰	10Y4/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
16	19-7灰	2.5GY5/1 粘土・(4)	(炭鉄アコフ状 植物遺体含む)
17	黒	5Y2/1 粘土～微砂	(炭鉄わずかに含む 炭化物多く含む 上部に植物遺体含む)
18	黒	5Y2/1 (4)混微砂	(植物遺体含む 互層?)
19	灰	10Y4/1 (4)～微砂	(アコフ状 炭化物含む) (げけあり 上方粗粒化)
20	緑灰	7.5GY5/1 (4)～細砂	(植物遺体含む 互層?)
21	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
22	19-7黒	5Y3/1 粘土～微砂	(炭化物・植物遺体多く含む)
23	灰	10Y4/1 粘土～微砂	(アコフ状 炭化物含む)
24	19-7黒	2.5GY4/1 粘土・(4)互層	(植物遺体含む 互層?)
25	灰+7	5Y6/2 (4)～粗砂	(植物遺体含む 互層?)
26	19-7黒	5Y3/1 (4)～微砂	(アコフ状 炭化物含む)
27	黒	5Y2/1 微砂混(4)	(粗砂含む 炭鉄)
28	腐灰+7	5GY4/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 下部に粘土アコフ) (炭化物・植物遺体含む 上方粗粒化 ?あり)
29	腐緑灰	7.5GY4/1 粗砂粘土・(4)	(炭化物・植物遺体含む 上方粗粒化 ?あり)
30	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
31	腐緑灰	7.5GY4/1 中・粗砂混(4)	(粗砂わずかに含む) (アコフ状)
32	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(粗砂わずかに含む)
33	緑灰	5G5/1 粘土・(4)	(炭化物含む)
34	19-7黒	5Y2/2 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
35	緑灰	7.5GY5/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
36	緑灰	10GY5/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
37	腐灰	N3/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 互層?)
38	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物・植物遺体含む 上方粗粒化 ?あり)
39	緑灰	7.5GY5/1 粘土・(4)	(下部に粗砂含む)
40	灰	5Y4/1 粘土・(4)	(微砂アコフ状)
41	19-7黒	5Y2/2 粘土・(4)	(炭化物含む)
42	灰	10Y4/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 弱い?あり)
43	緑灰	7.5GY5/1 粘土～微砂の互層	
44	灰	5Y5/1 中・粗砂混粘土・(4)	

## 2 トレンチ 西壁

1	腐緑灰	7.5GY4/1 細砂～粗砂混(4)	(Mn灰 炭鉄)
2	腐緑灰	10GY4/1 細砂～粗砂混(4)	(Mn灰 炭鉄)
3	腐+7	5GY4/1 細・中砂混(4)	(Mn灰 炭鉄)
4	灰	7.5Y4/1 粘土・(4)	(粗砂 Mn灰)
5	灰	10Y4/1 粘土～微砂	(炭鉄)
6	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物わずかに含む) (炭化物含む 互層?)
7	灰	5Y4/1 粘土～微砂	(炭化物含む 互層?)
8	19-7黒	7.5Y3/1 粘土～細砂	(炭鉄アコフ状 炭化物含む)
9	19-7黒	5Y3/1 (4)混微砂～細砂	(炭化物多く含む 中・粗砂含む)
10	灰	10Y4/1 (4)混微砂～細砂	(炭化物多く含む 中・粗砂わずかに含む)
11	19-7黒	7.5Y3/1 (4)混微砂～細砂	(炭化物多く含む ややアコフ状)
12	腐+7	5GY4/1 (4)～細砂	(げけあり)
13	灰	10Y6/1 細砂～小礫	(炭鉄炭化物含む すくに炭化する アコフ状)
14	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物・植物遺体多く含む アコフ状)
15	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物・植物遺体を含む 互層?)
16	灰	10Y4/1 粘土・(4)	(炭化物含む 互層?)
17	灰	10Y4/1 粘土～微砂	(炭化物含む 互層?)
18	腐+7	2.5GY4/1 粘土・(4)	
19	灰	N6/1 粗砂	
20	灰	5Y4/1 粘土・(4)	(微砂・植物遺体含む) (地土塊・炭化物含む 炭鉄)
21	19-7黒	5Y3/1 細砂混粘土・(4)	(炭化物含む)
22	19-7黒	5Y3/1 微砂混粘土・(4)	(炭化物含む)
23	灰	10Y4/1 粘土・(4)	(植物遺体含む 炭鉄)
24	黒	5Y2/1 粘土・(4)、微砂	(アコフ状 炭鉄)
25	腐灰	7.5GY5/1 粘土～微砂の互層	(げけあり)
26	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物含む アコフ状)
27	灰	5Y5/1 粘土・(4)	(弱い?あり)
28	19-7黒	5Y3/1 粘土・(4)	(炭化物含む アコフ状 一部弱い?あり)
29	腐灰	10GY5/1 粘土・(4)	(植物遺体あり 下部に粘土アコフあり)
30	灰	N2/1 粘土・(4)	(炭化物含む アコフ状)
31	腐灰	7.5GY5/1 粘土・(4)	(下部に粗砂含む)
32	腐+7	5Y5/2 微砂～中砂	(土方粗粒化 植物遺体含む 互層?)
33	黒	2.5Y2/2 (4)～微砂の互層	(植物遺体多く含む 互層?)
34	19-7黒	5Y2/2 粘土・(4)	(アコフ状 植物遺体含む)
35	灰	5Y4/1 粘土・(4)	(炭鉄アコフ含む)
36	19-7黒	5Y2/2 粘土・(4)	(アコフ状 炭化物含む)
37	灰	10Y4/1 粘土・(4)	(植物遺体あり 弱い?あり)

図14 04-1 調査区 西壁断面土色

第4層 灰色の細砂混シルトを基調とし、T.P.+6.0m付近にて検出した。自然堆積層層と土壌化層の組み合わせが上下に重なっており、いずれの土壌化層も上面に水田遺構を検出することから、氾濫後に耕地化されていたことが明らかである。自然堆積層が調査区の南半を中心とする東西方向に分布することから、調査区南側を東西に流れる流路から、北に向かって越流した土砂の勢いが弱かったために、それほど広範囲に堆積しなかったものと推測される。あるいは調査区北側まで氾濫土砂は達していたものの、層厚がわずかであったために後の耕作による攪拌で消失したと考えられる。

## 古代

第3層 灰白色の中粗砂を主体とする自然堆積層とその土壌化層であり、T.P.+6.4m前後において検出した。調査区内では局所的に自然堆積層の残存する状況が看取され、層の連続性を捉えることが困難で

あった。土壌化層は部分的に最大で3層に分化するものの、いずれも後世の攪乱が著しく、やはり対応関係は不明瞭である。

#### 中世・近世

**第2層** 調査区の中央付近を中心に検出した、灰オリーブ色の細砂混シルトを主とする土壌化層である。自然堆積層としては確認できないことから、弱い土砂が流入した後、そのまま土壌化したものと推測される。TP.+6.5m付近に検出できるものの、上層からの攪拌が著しく、第3面の中で地形的に低位な場所のみ残存するようである。

**第1層** TP.+6.5m以上において検出し、灰オリーブ色の中細砂混シルトを主体とする耕作土層である。下層と同様、平坦面では自然堆積層がほとんど残存しないものの、調査区西側の島島内部では部分的に耕作土と異なる砂層を検出できることから、当地に土砂が流入したことは間違いないと思われる。耕作土は最大4層に分化が可能であり、各面において異なる遺構を確認した。

#### 近代

**第0層** 1938(昭和13)年に操業開始した竜華操車場の建設工事に伴う盛土と、それに覆われた耕作土を指す。現地調査では機械による掘削を行った。耕作土上面の年代は上記のとおり明らかであるものの、それ以前に関する報告はみられなかった。今回の調査では、耕作土除去面において検出した盛土が1889(明治22)年に敷設された大阪鉄道の軌道に伴うものであったことが明らかとなり、本書では特に軌道敷盛土と耕作土除去面の攪乱をもって第0面とする。盛土は灰オリーブ色を呈する細砂混シルトのプロック、耕作土はオリーブ黒色のシルトを主体とし、それぞれの層厚は約50cm、約20cmを測る。

## 第2節 その他の調査区

### 1. 00-1 調査区

本調査区では下層確認までを19に分層し、15の遺構面を検出した(第15図)。以下に概要を示す。

#### 縄文時代から弥生時代

第18・19層は灰白色の中粗砂であり、オリーブ黒色の第17層がその土壌化層となる。

第16・15層は灰色の粘土混粗砂から青灰色粘土を呈し、T.P.+2.2m付近に層厚10m程の土壌化層である

第14・13層がみられる。土壌化層は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて形成されたようであり、下面を第14面、中位を第13面、上面を第12面とする。他に基盤層の途中段階と思われる第16層上面から軽石が出土しており、第15面と設定する。

第12層は調査区北東部にみられる灰白色の中砂を主とする自然堆積層であり、上面を第11面とする。

第11～9層は緑灰色の粘土を主体とする土壌化層であり、T.P.+3.2～3.6mに検出する。それぞれの層上面を第10～8面とする。

第8層はオリーブ灰色の細砂から粗砂を主とする弥生時代後期後半の自然堆積層である。層厚は約10mに達する。T.P.+5.0mに検出する暗灰黄色シルト混粘土の第7層がその土壌化層にあたり、上面を第7面とする。

#### 古墳時代から古代

第6層は灰色粘土混シルトの土壌化層であり、上面を第6面とする。

第5層は調査区西側に残存する褐灰色細砂混シルトの土壌化層である。上面は第4層に連続することか

ら削平を受けた可能性が高く、第4層除去面を第5面とする。

第4層は第5層のみられない調査区東側の低地に検出され、黒褐色粘土混シルトを呈する。同層上面と連続する第5層上面を第4面とする。

### 中世以降

第3～1層は黄灰色シルト混粘土から緑灰色細砂混シルトの耕作土であり、T.P.+5.6～6.1mで検出する。間層がほとんど残存しないことから、撈拌が顕著であることがわかる。

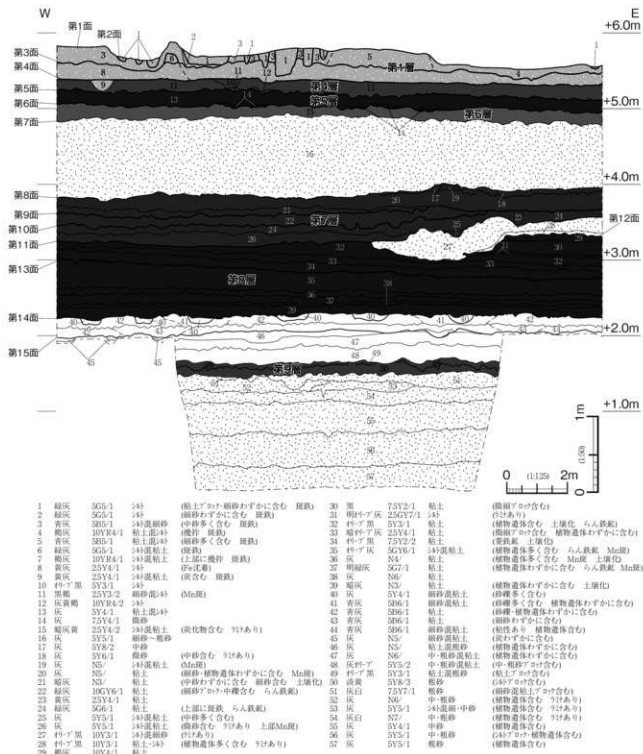


図15 00-1調査区 断面



## 2. 01-3 調査区

当調査区では弥生時代前期から中世末までの地層を11に大別した(第16図)。

第10層 縄文時代晩期以前の土壌化層である。

第9層 縄文時代晩期以前の自然堆積層である。02-1調査区の第8b層に相当する。

第8層 縄文時代晩期から弥生時代前期の土壌化層である。02-1調査区の第8a層に相当する。

第7層 弥生時代前期末頃と推測する洪水砂層である。下刻作用が殆どみられないことから、氾濫の縁辺部の堆積と考えられる。

第6層 弥生時代中期と推測する土壌化層である。第5層と同様、第4層による侵食で大半を消失する。

第5層 弥生後期の土壌化層である。上層からの侵食が著しいために残存状態が悪く、2トレンチにのみ確認した。攪拌された痕跡が認められない。

第4層 弥生後期以降に堆積した洪水砂層である。最初に流入した洪水砂を第4-4層とし、止水性堆積に至るまでを第4-3層、第4-2層、第4-1層と区分した。

第3層 古墳時代の土壌化層である。1トレンチでは耕作に伴う攪拌が顕著であるのに対し、2トレンチでは湿地状の堆積環境にあったと考えられる。

第2層 古代の土壌化層であり、主に2トレンチにおいて確認した。北側の1トレンチでは遺構内の埋土として残存するのみであり、第1層形成時に攪拌により消失したものと考えられる。

第1層 中世から近世初頭の耕作土層であり、現地では島島の盛土を第1-2層、水田の耕作土を第1-1層と区別した。盛土層の直下には島島形成前の基盤層が確認できなかったことから、流入土砂を復旧して構築した島島とは断定できない。

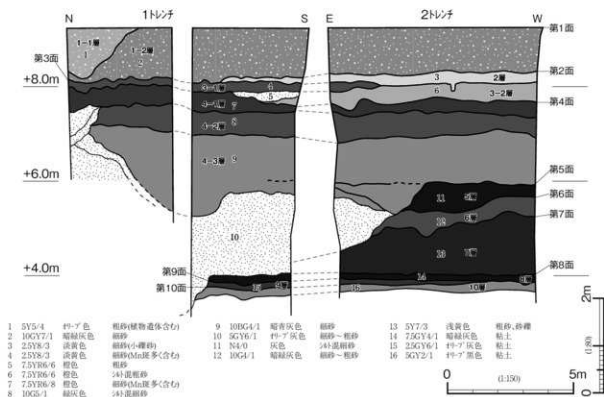


図16 01-3調査区 断面

## 第4章 縄文・弥生時代の遺構と遺物

### 第1節 第10・9面

#### 1. 概要

久宝寺遺跡でこれまでに確認された最古の遺物は縄文時代後期の浅鉢片である。本調査区では、2001年度の発掘調査に際してTP.+3.7m付近まで調査を行い、最も深い場所では第13層まで確認したものの、まとまった遺物や遺構は検出できなかった。このことから、2002年度の調査ではTP.+4.3m、第8層までを調査の対象として実施することになった。しかし、調査が進捗するに従い、前年の調査では確認できなかった地点の断面観察において大まかな地形の復元が可能となり、その違いによって遺構や遺物の分布が大きく異なる可能性が考えられるようになった。そこで大阪府教育委員会の指示により、地形に合わせて平面的な下層確認調査を実施することとなった。確認調査の範囲は、事前の断面観察で明らかとなった高所部分と、そこから低所までの緩斜面とした。可能な限り広範囲を確認できるよう、東西に連なるようにトレンチを設定した。

第10面、第9面ともに調査区西半の中央付近をほぼ南北方向にのびる微高地があり、そこから東に向かって緩やかに下降する傾斜地と、西は約30m間隔で起伏がある地形によって構成される。東側の緩斜面は150mで約0.7mの比高差であるのに対し、西側は40mで約1.0mの差が生じる地点もある。

各遺構面の最終標高は第10面がT.P.+3.4~4.5m、第9面がT.P.+3.6~4.6mである。これらの土壌化層のAMS年代による縄文時代後期頃は、旧大和川の激しい沖積作用によって平野部が形成され、海岸線が北に後退しつつあった。調査区の周辺は河口付近から次第に内陸部へと変化することにより、次第に人の生活範囲として利用されるようになっていったと考えられる（図版2・3）。

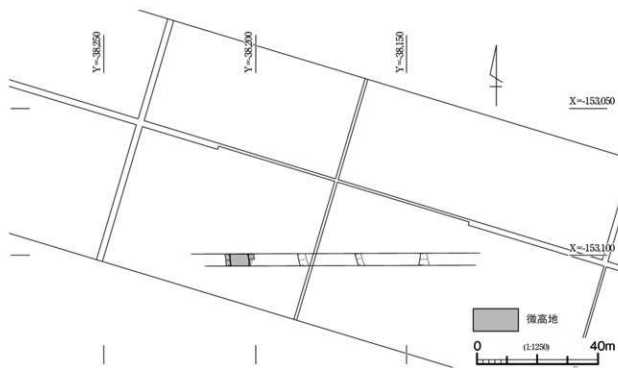


図17 第10面 調査区中央 遺構平面

Y=38,050

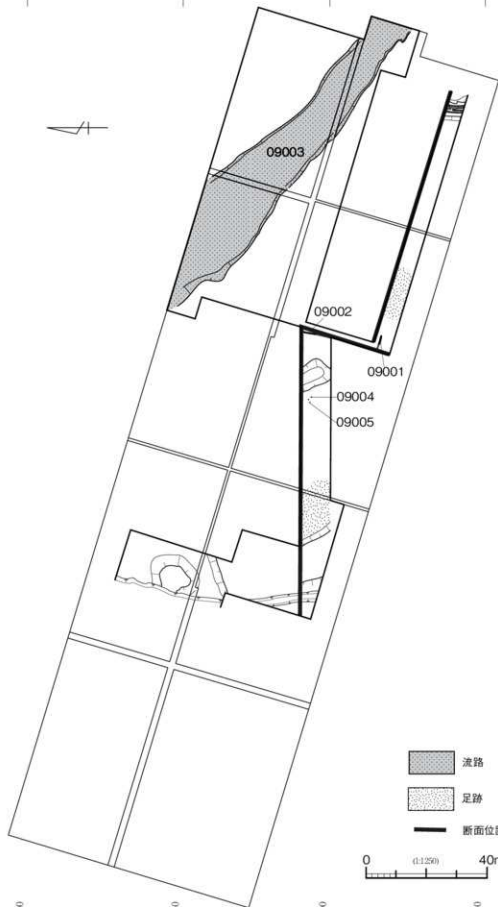
Y=38,100

Y=38,150

Y=38,200

Y=38,250

Y=38,300



流路

足跡

断面位置

0 1:1250 40m

X=153,000

X=153,050

X=153,100

X=153,150

図18 第9面 遺構分布

## 2. 第10・9面の遺構と遺物

シルトから粗砂の堆積物が土壌化した第10層上面において、旧地表面である第10面を確認した。この第10面では土壌化層の上下いずれにおいても明確な遺構は検出されなかった。トレンチの西端、地形的に最も高所な地点では第10層と第9層の接することが多く、層界も不明瞭であったことから、小規模な遺構は削平された可能性も考えられる。図17は調査区中央付近の平面図である。西から東へと下降する緩斜面において、傾斜に直交しながらほぼ南北方向へとびる段差を検出した。この段状のテラス部分の幅は20m弱を測り、ほぼ等間隔に位置することから、人為的に成形された遺構の可能性を検討した。形状としては後世の弥生時代水田や畑地に類似するものの、微化石分析では関連するような情報を検出できず、これらを耕作関連遺構と積極的に判断することは避けておく。なお、第10b層の観察を松田順一郎氏にお願いしたところによると、同層をもたらし流路は短期間のうちに当地区へ出現したものであり、初期に泥土と粗砂を供給するが、すぐに停滞したようである。最終的には粗砂の流入により微高地が形成され、その周辺にトレンチ東側で検出した幅20m程の後背湿地が広がったと考えられる。

第9面は、第10面上に薄く堆積したシルト・微砂が土壌化して形成された旧地表である。堆積物が少ないため、第9面の地形は下の第10面を完全に踏襲した形となっている。微高地周辺の土壌化は顕著であるものの、層の上面が剥離して微細なブロック状と化し、東側の低地部では第9層直上に薄く堆積した小豆色の泥層に変形が認められることから、水浸かりの状態にあった可能性が高いと指摘された。遺構としては02-1調査区の北東部に流路と、トレンチ調査において、第10面と同じ東向きの緩斜面に数条の溝と足跡等を検出した(図18)。調査区北東部の09003流路は、厳密的には上層の第8b層が堆積した際の浸食痕であるものの、地形観察によると浸食以前から周囲より低い地形であったことが明らかとなり、第8b層流入の契機となる流路が溝が存在したと推測される(図版3-5~6)。

緩斜面の遺構は、確認調査用トレンチのほぼ中央付近において、09001・09002溝と09004・09005ピットを検出した(図版3-2~4)。溝はいずれも幅約25cmを測り、深度が約5cmとわずかである。09001溝はほぼ東西にのびながら、わずか3mほどで消失する。09002溝は南北方向にのびており、トレンチ外へと続く。いずれも溝の底面が荒れていないことから、踏み込みや足跡の変化したものとは考えにくい。さらにそれらの西側においては、自然の落込や09004・09005ピットを検出した(図18)。ピットは直径約20cmと約10cm、深さ約5cmを測り、遺物の出土がまったくみられないことから詳細は不明である。これらの遺構の周辺ではヒトの足跡の集中する地点が2箇所みつまっている(図18のトーン部分)。足跡には方向性が認められないことから、直線的に歩行したのではなく足踏み状態であったと考えられ、狩猟や漁労等、その場で作業を行っていた痕跡と推測する。

トレンチ西端から02-1調査区西半の一帯は、図示するには至らなかったものの、周辺の中で地形的に最も高所であることがわかった。この微高地状の地形は第10面と同様にほぼ南北方向にのびていることがわかる。この微高地上において、異なる方向にのびる段差や部分的な高まりを検出した。範囲は狭いものの、段差については直線的にのびる様子が看取されたため、何らかの人為的な造物ではないかと考えた。隣接する溝等がみつからないことから、畦や堤の可能性が高いと思われるものの未確認である。仮に当地に人智が及んでいたとしても、この微高地上からは出土遺物がみられないことから、居住域として利用されていたとは考えにくい。その当時、周辺は氾濫原であったことか

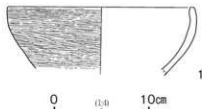


図19 09003流路 出土遺物

Y=38,050

Y=38,100

Y=38,150

Y=38,200

Y=38,250

Y=38,300



■ 竖穴建物  
■ 溝  
■ 流路・落込

0 11250 40m

X=153,000

X=153,050

080602

X=153,100

X=153,150

図20 第8 b面 遺構分布

ら、居住域とするまでには至らず、生業域としての土地利用に止まっていたと想像される。

実質的に第9・10層からの出土遺物は皆無であるが、09003流路の埋土である第8b層に当該期と思われる遺物が若干出土している。図19-1は縄文時代後期中頃の浅鉢である(図版229)。粗い洪水砂から出土した割にはほとんど摩滅していないことから、非常に現地性の高い遺物と考えられる。これ以外にも、特に下層を浸食した氾濫堆積物からは混入の形で当該期の遺物が出土しており、すでにその頃、当地周辺に人の手が加わった可能性は高いと考える。

## 第2節 第8面

### 1. 概要

第9層が地表化して暫くした後、縄文時代後期後半頃に大規模な氾濫が発生し、調査区の周辺一帯は大量の土砂(第8b層)の下に埋没した。調査区内での第8b層の堆積状況を見ると、流入した土砂の量に比べて下層への浸食が弱く、氾濫自体のエネルギーはそれほど大きくなかったものと推測される。これは当地区が本流からやや離れた位置にあったために洪水活動の縁辺にあたり、直接的な被害を受けなかったことが原因と考えられる。しかし、第9層直上には植物遺体を含む泥層が一様に堆積し、長く水浸かり状態であったと考えられることから、水没した後、徐々に土砂が流入したものと考えるべきであろう。

このような第8b層の堆積により、調査区東半では下面と反対に北東部を微高地とする、南西に向かって緩やかに下降する斜面が形成された。第9面にあった微高地は緩斜面の途中の微地形となっており、全体的には地形の逆転現象が生じている。一方、調査区の西半は、第9面の低地部分に土砂が堆積したことで起伏が無くなり、調査区東半と連続する大きな斜面地形となった。

現地調査では、第7-2層を埋土とする遺構を第8a層上面(第8a面)のものとして検出したが、この時には明確な遺構が存在する旧地表面という認識は得られなかった。土壌化層を除去した第8b層上面(第8b面)では多数の遺構を検出し、その総数は1,000基を超えることとなった。土壌化層の下面で検出した遺構は、その帰属面が検出したb面から土壌化層の中のいずれかであることを示すのみであり、遺構の加工面や廃絶面を判別することは非常に困難である。第8b面で検出した大量の遺構については、切り合い関係と埋土の分類から帰属面の整理を行い、一部を現地では確認できなかった第8a面に変更した。ただし、大量にみつかったピット群については同様に帰属面を離れたパターンを作成して検討を行ってみたものの、ピットの配置が散漫となり、かえって分布の傾向が掴み難くなってしまったため、確実なもの以外は下面遺構として第8b面に記載することにした。したがって第8層に伴う旧地表面としては、土壌化層下面の第8b面と、上面の第8a面の2面に分けられる。時間的には、第8層に包含される遺物が長原式土器から第I様式であることから、それぞれの遺構面は縄文時代晩期に近い段階と弥生時代前期に近い段階と捉える。

調査区の中央から東部にかけて、第8b層中をほぼ水平に広がる厚さ約3mmの極めて薄いシルト層を検出した。この層は第8a層を埋土とする生痕や遺構を切断しながら広がっていることから、土壌化あるいは遺構の埋没後に形成されたことが明らかである。松田順一郎・寒川 旭氏に鑑定を依頼したところ、非常に広範囲にわたって残存する地滑りの発生した痕跡であることが判明した。また、微高地周辺と低地部ではこの「横ずれ」の方向に違いが認められることや、複数の「ずれ」が存在することも確認され、今後、当該期に発生した地震を研究する上で貴重な資料となることがわかった。

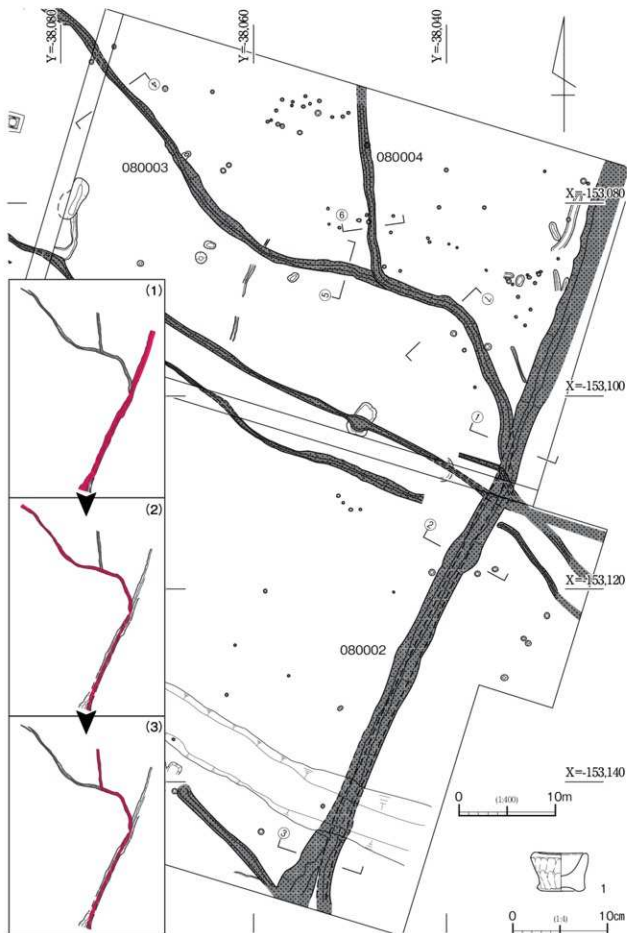


图21 080002~080004沟 周边遺構平面、080002沟 出土遺物

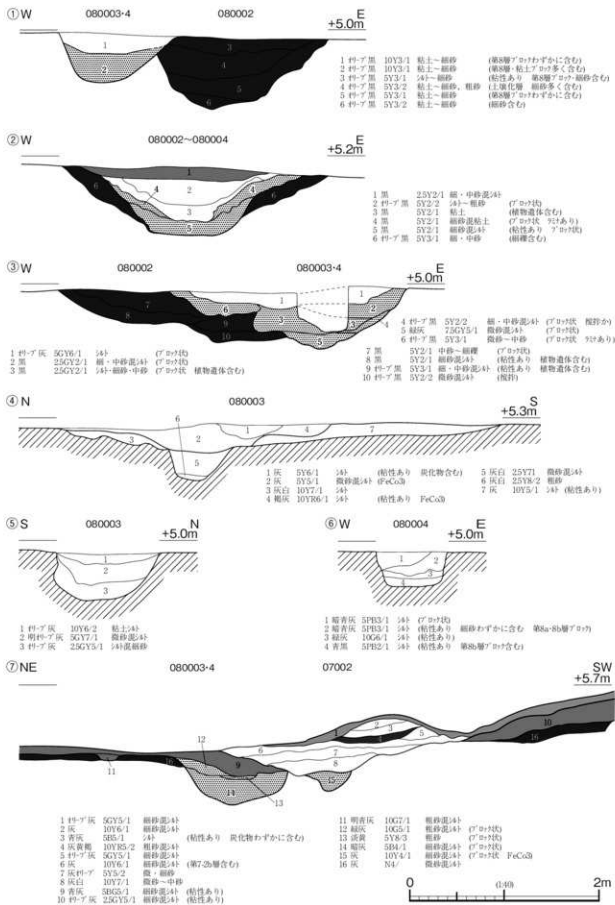


図22 080002~080004溝、07002高まり 断面



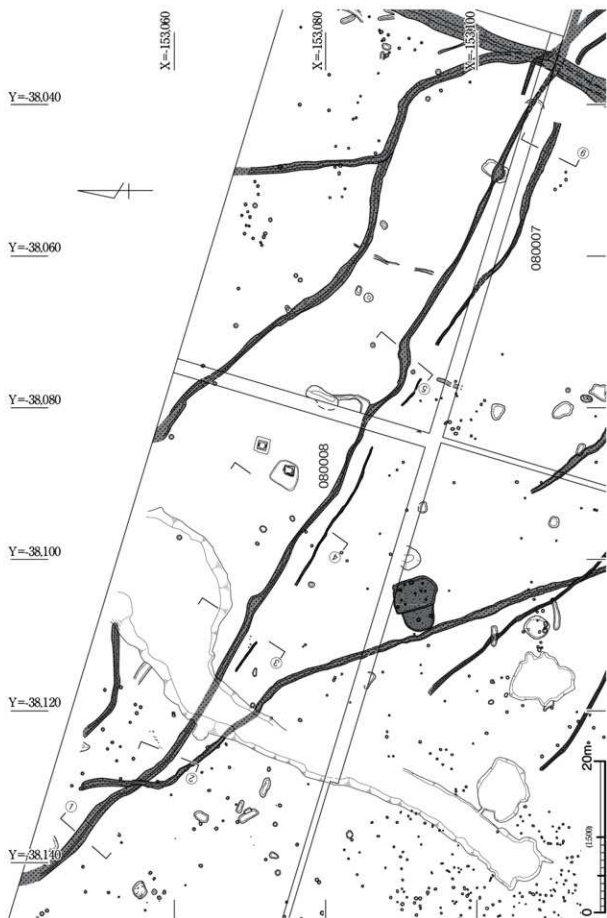


图23 080008清 周边沟槽平面

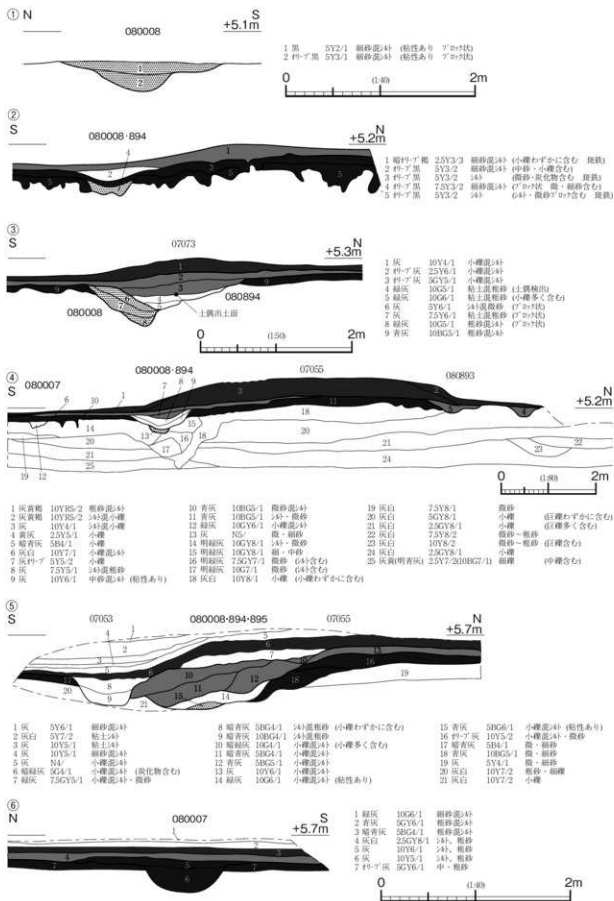


図24 080007・080008溝、080894溝 断面

## 2. 第8b面の遺構と遺物

第8b面の遺構としては、流路・落込・溝・土坑・ピットが挙げられる(図20)。

本調査区における第8b層の最大の供給源が、下面にて調査区北東部の低地を流れていたと推測する09003流路である。ここから越流した土砂は調査区東半を中心に堆積し、流路の周辺では最大1.5mの層厚に達する。この流路が埋没した後は、その位置に重なるように南西から北東にのびる緩やかな微高地が形成された。この微高地の周辺において溝を数条検出した。

080002溝は調査区東端を沿うように北北東へほぼ一直線にのびる(図21、図版8-1・3・5)。南側は調査区外に達しており、自然流路から分岐したものと推測する。本溝は先述の微高地地根を横断することから、人為的に掘削された遺構と解釈できる。これに対し、080003・080004・080008溝は微高地を一度通り、北西側の低地へと流れ込んでいる(図23)。これらの溝については、複重遺構面のものが重複することや、切り合い関係から並存していなかったことは明らかであった(図22・24、図版8・9)。現地での見解を整理すると、080002溝の北半が080003、080004溝へと付け替えられたということになった(図21左)。ただし、080002溝の東側では調査区外へと続く細い溝が数条検出されており、これらが080003・080004溝と接続する場合には本溝が他の溝より後出する可能性も考えられる。しかし、その場合でもこれらの溝の関係から、少なくとも3つの段階を想定できる。

080003溝が掘削された微高地の南側縁辺を沿うように、南東から北西へと伸びる080008溝を検出した(図23)。その南側にはほぼ並行するような形で080007溝が存在するものの、こちらは後世の水田耕作による攪拌のため、部分的に欠失している。このような2重の溝は、水田域では給排水用の溝として開削されることが多いものの、水田遺構の見当たらない当地では用途が不明である。耕作地では無い場合、区画溝として捉えることは多いものの、本遺構についてはその機能を十分に果たすとは考え難い。これらの溝に囲まれた範囲は前述のとおり09003流路が埋没した微高地にあたり、遺構の立地条件としては良好であるが、遺構や遺物ともに希薄であった。むしろ、後述のやや低位な調査区中央付近から多くの遺物が出土しており、遺構も密に検出されている。このような傾向は調査区西部についても同様であり、

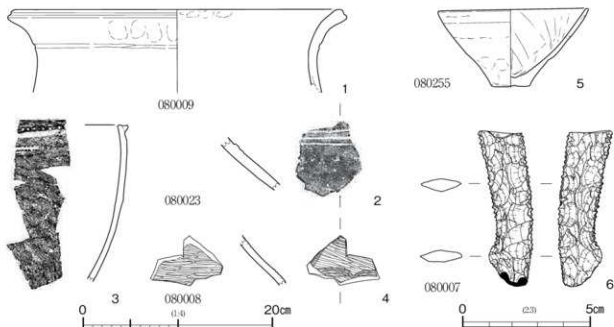


図25 080007・080008・080009溝、080023竪穴建物、080255ピット 出土遺物



図26 080009清平・断面

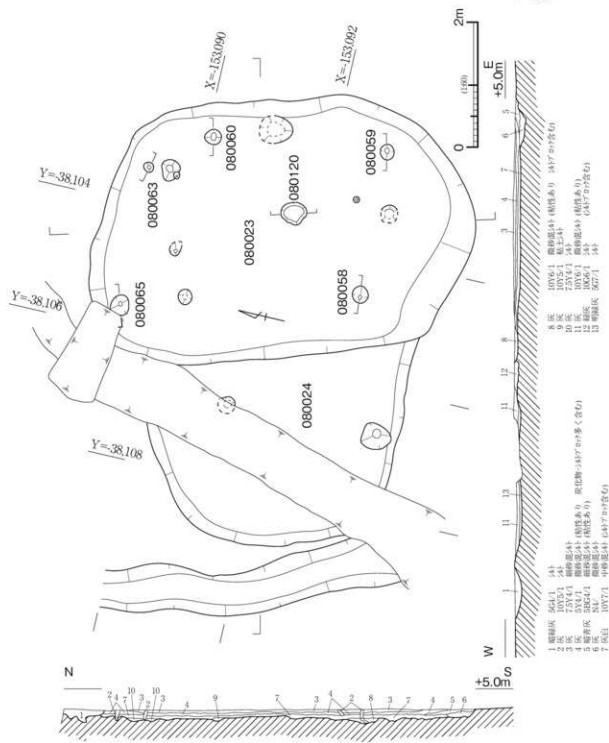
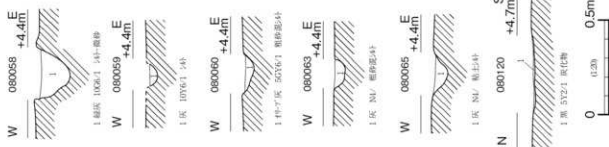


図27 080023・080024型穴建物、080058～080060・080063・080065・080120ピット 平・断面

当時、ここでは高所を居住域として利用せず、何らかの目的のために故意に空けていたとも考えられる。

遺物としては、溝から出土した縄文時代晩期後半と思われる船橋式深鉢の他、弥生時代前期壺や石製小刀等が挙げられるものの、数量は非常に少ない(図25、図版229・230)。

微高地の北側は調査区外のために詳細が不明であるものの、南側は南西方向へ下降する緩斜面を呈する。この緩斜面は北東部の微高地と方向を異とし、やや南に広がりながら調査区の南東側へと続く。前述のとおり、本遺構面の地形を形成した第8b層は氾濫堆積物であり、複数の洪水によってもたらされたことが明らかである。緩斜面の基盤層もこの例に漏れないことから、調査区北東部の微高地と異なる方向に位置するというのは、09003流路とは別の氾濫によって形成された地形であることを示す。

080009溝は、上記の緩斜面の西側を南南東から北北西へと伸びる(図26)。緩斜面の形状に沿うように位置しており、他の遺構と同様に南高北低の溝と思われたが、遺構底面の標高を確認したところ、反対方向に南流することが明らかとなった(図版9-1~4)。溝の北端を微高地上に検出したことから、仮に本溝の上部が削平されていないとすれば、同地点が溝の始点ということになる。また、すぐ南側では080008溝と交差する地点があり、その切り合い関係から同溝より後出することもわかった。水源となる他の溝がみられないことや上記の成果から、排水溝として機能したと考える。同じ緩斜面の南側から南北に伸びる080002溝との関係は、直接の接点がないため不明な点は多いものの、同一の方向性がみられることから、080003溝等への付け替えと同時に並行であったと考えられる。

080009溝の東側、 $X = -153,090$ 、 $Y = -38,100$ 地点において、080023・080024竪穴建物、080025井戸を検出した(図26)。

竪穴建物は、ほぼ東西に並ぶ2つの浅い平坦な土坑から成っており、埋土の観察から、080024の後に080023を掘削したことが明らかである(図27)。現地調査における遺構検出時は隅丸方形の平面プランが明瞭であったものの、掘削を進めるにしたがい、次第に不明瞭となってしまった(図版9-6)。

遺構内埋土のほぼ中に炭化物やシルトを含むブロック土が存在するものの、平面的な検出や確認調査は行っていない。上層との層界が不明瞭で踏み締められた痕跡が認められず、一般的な床面と判断することは困難であったようである。しかし、完掘後の遺構底

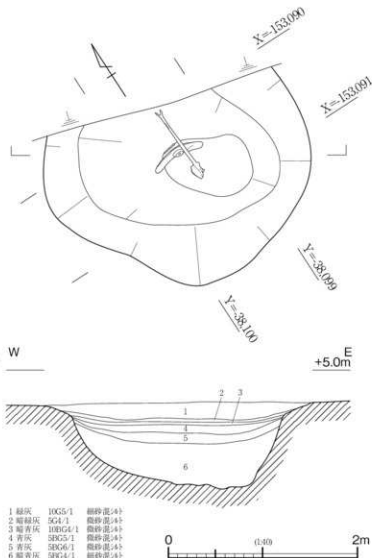


図28 080025井戸 平・断面

面において深さ10~20cmのビットを複数検出し、中央付近からは炭化物の充填された080120ビットがみつかったことから、竪穴建物と認識することにした。床面の問題については、廃絶までの期間が短く、硬化するまでには至らなかったと推測する。あるいは、この後の弥生時代を通して、微高地以外の土地を耕作地以外に利用することがないことから、早い段階に周辺が半湿地化したために竪穴建物としては放棄してしまい、使用した痕跡がみられないのであろう。

竪穴建物に隣接するようになつてみつけたのが080025井戸である(図28、図版10-1~3)。080023竪穴建物から東に約1.5mの位置にあり、深さ約0.1mを測る。遺構の北側を断面観察用トレンチにより失ったものの、内部から木製品等が出土した(図29、図版231)。井戸のほぼ中位から一木簡、底部付近から直柄式平鍬(諸手)がみつかつており、いずれも使用後に井戸の中へ廃棄されたものようである。同じ緩斜面上で080023竪穴建物の南側では、やや西に傾きながら並行する数条の溝や、土坑が数基みつかった(図30)。

080121~080123溝等は、遺構の上半を第7層により攪拌されており、全形を確認することができなかった。080121溝については上記の080009溝と交錯しており、後から掘削されたものであることが明らかである。おそらく、周辺の溝も同じ段階に作られたものと推測する。これらの溝は緩斜面の地形を無視

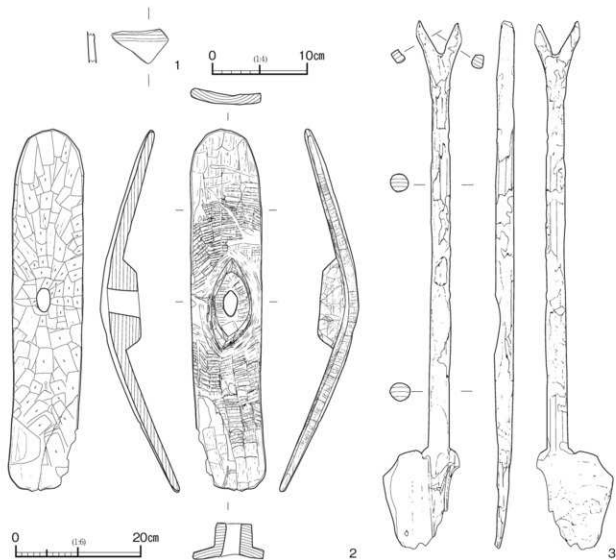


図29 080025井戸 出土遺物

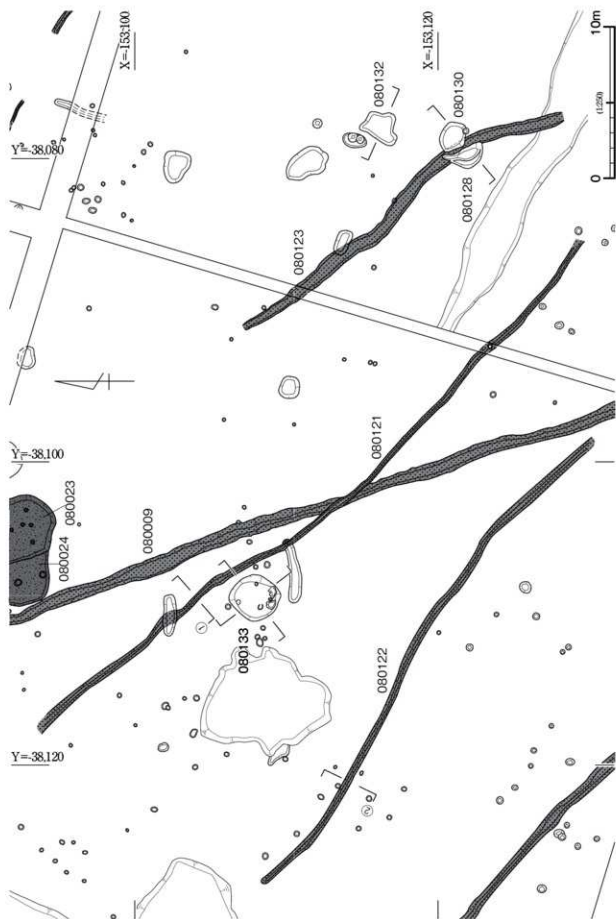
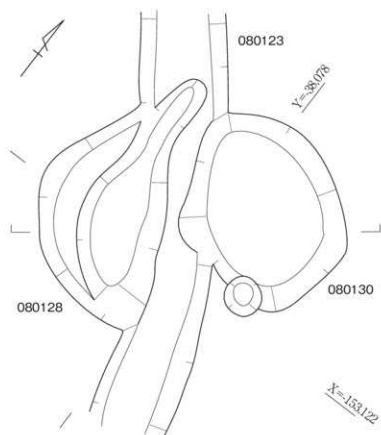
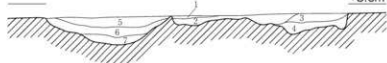


図30 080121~080123溝 周辺遺構平面

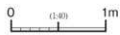




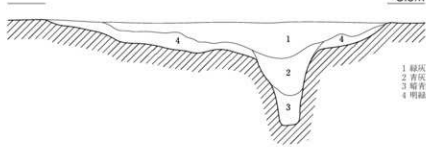
SW 080128 080123 080130 NE +5.0m



- 1 灰 5Y6/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 2 暗青灰 5GY4/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 3 灰 NU 微砂混<sup>4)</sup>
- 4 暗青灰 5BG4/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 5 暗青灰 5BG4/1 微砂混<sup>4)</sup> (炭化物わずかに含む)
- 6 暗緑灰 5CG4/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 7 明緑灰 5G7/1 微砂

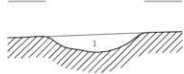


NW 080132 SE +5.0m



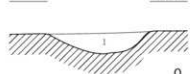
- 1 緑灰 5G5/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 2 青灰 5BG5/1 微砂混<sup>4)</sup>
- 3 暗青灰 5BG4/1 <sup>4)</sup>泥粘土
- 4 明緑灰 5G7/1 微砂

① SW 080121 NE +5.0m



- 1 黄灰 25Y5/1 微砂混<sup>4)</sup>

② SW 080122 NE +5.0m



- 1 灰 10Y6/1 粗砂混<sup>4)</sup>

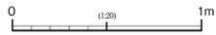


図31 080121・080122溝、080128・080130・080132土坑 平・断面

して設置したようであるが、その周辺にはピットや土坑がまぎらって存在する等、前述までの溝と明らかに様子が異なる。周辺のピット群が第8b面の中でも新しい段階のものとして捉えられるならば、当地区に遺構群が形成される際、これらに伴って開削された溝群とも考えられるが、現地での調査では明らかにすることはできなかった。

080128・080130土坑は、080123溝の両側に接した状態でみつかった(図30・31、図版11-6)。土坑は溝を挟むように位置するが、断面の記録では溝の形状を特定することは困難であり、土坑と溝の前後関係が不明である(図31)。

ただし、同様の形状で検出した遺構は調査区の西部にもみつかっており、それらは遺構の前後関係が明らかであったため、各遺構面に区分して報告している(080592流路、080962・080963土坑)。詳細は後述するが、溝の大半が埋没した後のわずかな凹みの残った段階に、流路の両側に土坑を掘削するようである。この土坑の性格については議論の余地があるものの、少なくとも溝を意識しながら配置したことには間違いはないであろう。080128・080130土坑も規模は小さいものの、瘤状に取り付く様子が酷似することから、同種の遺構と考える。これらのことから、前述の溝群が単なる灌漑用のものではなく、周辺の遺構と関連して作られた可能性が高いと思われる。この他にも、周辺では同規模の土坑が数基みつかっており、080130土坑の北側に長軸約1.8mを測る080132土坑がある(図30)。全体的には深さ約13cm前後の浅い皿状を呈するが、中央のやや南東寄りに直径約0.3m、深さ約0.35mのピット状の凹みを検出した(図31)。凹みの底部は直径約0.1mを測り、周辺の柱穴と大差が無いことから、建物や人為

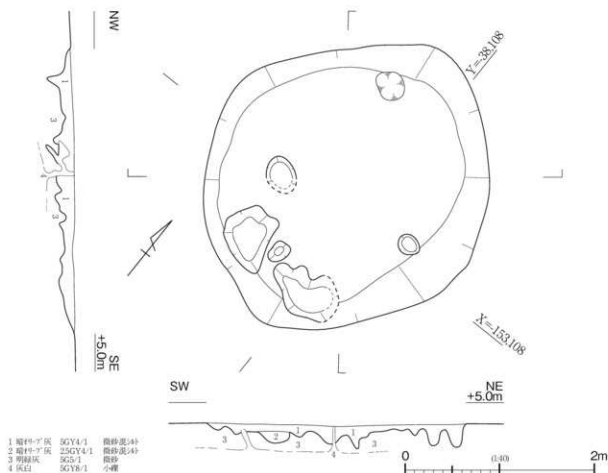


図32 080133土坑 平・断面

的な立木に伴うものと考えられる。しかし、周辺にはこれと結びつくような同種のピットが確認されておらず、詳細や全体形は不明である。

これらの土坑の西側、080121溝のすぐ南側で、080133土坑を検出した(図30、図版12-3・4)。隔丸形状の円形を呈し、遺構の深さが30cm程度で底面はびらん状に凹凸が著しい(図32)。他にピット状の凹みが幾つか認められるものの、いずれも不定形でそれぞれが人為的に作られた遺構ではないと考える。この土坑について特筆すべき点は、遺構底面の断割観察において多数の噴砂の痕跡がみつかったことである。噴砂となった小礫は遺構の地山層の下層にあり、埋土を貫いて噴出していた。このことから、噴砂を引き起こした地震は遺構の埋没後に発生したものであることが明らかである。残念ながら、遺構内からは土器の小片が出土しただけであったため、時期を特定するまでには至らなかった。080133土坑の北西にある080180ピットからは木製盤(槽?)が出土した(図33、図版230)。破片の状態を接合したものの、部分的な形状にしか復元できなかった。材質はクスノキであり、破断面がすべて丸く腐食していた。このことから、ピットに入った当初はすでに完形ではなかったことが明らかであり、廃棄されたものと考えられる。しかし、この1点だけのために廃棄土坑を掘削したとは考え難く、特別な用途に用いた器とすれば、祭祀的な意味を込めて埋納した可能性も考えられる。

調査区の中央部は、北東部からの緩斜面の基盤層である第8b層が下面の微高地に収斂することで形成された平坦面を呈する。この平坦面は東西方向に約70mの幅をもって南東から北西へと広がっており、本調査区内だけでも約10,000m<sup>2</sup>の面積がある。第8b層堆積後の地表化の初期段階には、この平坦面に溝等の水利施設を設けることは無かったようである。前述のような平坦部周辺において検出した溝群は、地形に沿うだけでなく、この平坦部を囲うように配されていることがわかる。おそらく、広大で平坦な地形では水利を行うことが困難であったため、わずかな地形の変化を捉え、目的に合わせて溝を配置

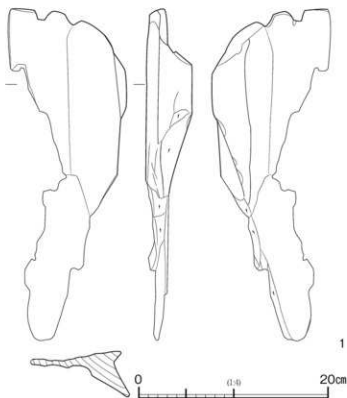


図33 080180ピット 出土遺物

するなど、周囲の地形を上手く利用したと考えられる。微高地の斜面部分に溝を巡らせ、その内側の平坦部に土坑やピット群を配している。これらには、平坦部の縁辺に土坑、その内側にピット群という一定の法則性が認められる。特に土坑やピット群の集中する付近では、炭化物や遺物もまとまって出土しており、この平坦部が生活域として利用されたことは明らかである。

調査区の北端では東西方向の小溝を複数検出し、土坑の連なる様子を確認できることから、前述の土地利用から推察すると、平坦部における居住域の北端を示唆するものである可能性が高い。ただし、調査区北側の地形や遺構が不明なため、それが居住域全体のものか1区画の境界的なものかは今後の調査成果を待たなければならない。

080219・080221土坑は平坦部の北西に位

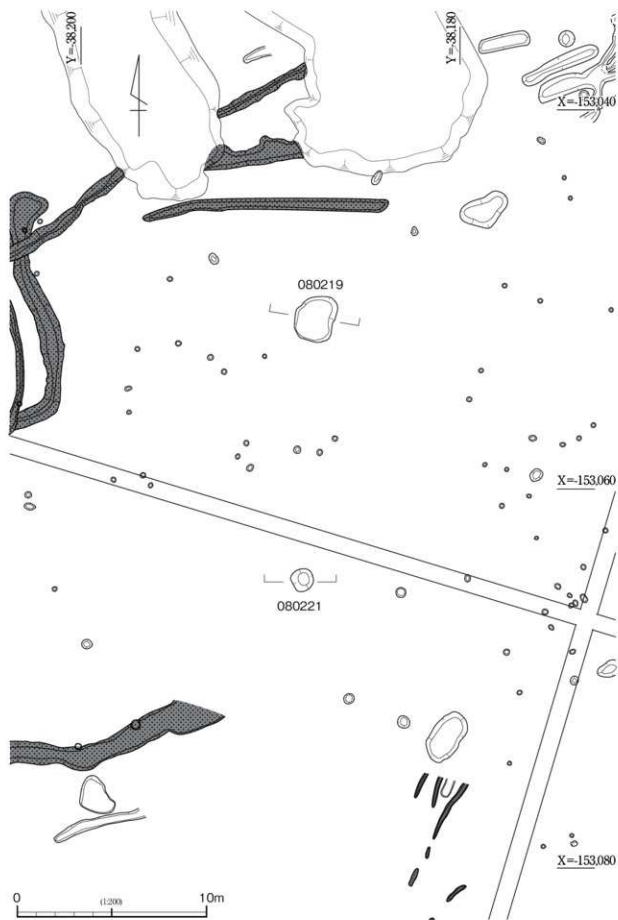


图34 080219・080221土坑 周边遺構平面

置する(図34、図版12-5・6)。他の土坑と同様、円形ないし類似の不定形の平面を呈し、直径1.0～2.0mを測る(図35)。遺構の断面は逆台形の鍋形であり、いずれも深さ80cm程度である。埋土の観察では柱穴の存在を想起させるものは確認できなかった。遺構内部からは少量の土器細片が出土しており、掘削時に混入したものと推測する。両土坑に代表されるように、平坦部の西側において検出した土坑は深度のあるものが多く見受けられる。平坦部の中では最も低位にあたる地区において、上記のような深度のある遺構を掘削するのは、後述のような浅い土坑とはまったく異質のものであるが、性格については不明である。

080226・080227・080231土坑は平坦部の北東に位置する(図36)。前述の微高地からの緩斜面にあり、080008・080009溝からほぼ10m下った場所に連なるように点在する。この周辺は土壌化層除去中においても他より遺物が濃密に出土しており、また同層中に含まれる炭化物も相当量みられた。このように遺物量が多いことから、当地区は生活域全体の中でも頻繁に人が利用した居住域になるのではないかと推測したが、建物等につながるようなまとまった形での遺構は確認できなかった。3基の土坑は遺物がまとまって出土した等の特徴的な遺構を取り上げたものである。

080226土坑は東西に長い楕円形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土の上層に炭化物が多く含まれ、同時に多数の土器片が出土した(図37、図版12-7・8)。出土した遺物は、弥生時代前期の第I様式甕が大半であり、これに少量の縄文時代晩期を代表とする長原式深鉢が混じる(図38-1、図版230)。

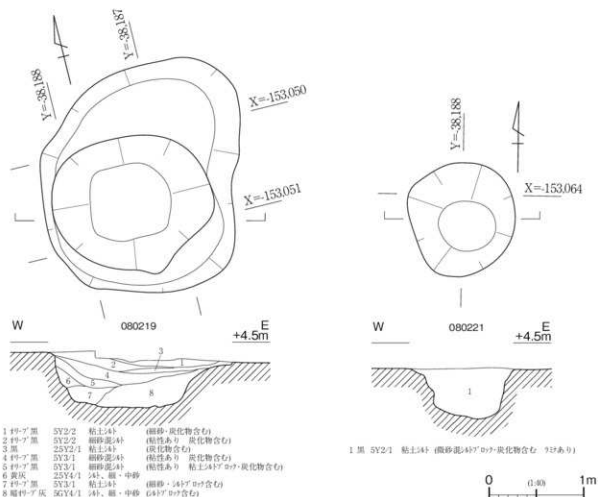


図35 080219・080221土坑 平・断面

080227土坑は080226土坑の南東に位置する(図36)。不定形の窪みを呈し、遺構内から遺物が出土した(図版13-1)。遺物には第I様式壺片と、紅廉石角閃石英片岩製の柱状挟入片刃石斧が含まれる(図38-2~6、図版230-232)。

080231土坑は080227土坑よりさらに南東に位置する(図36)。長さ約2.7m、幅約1.0m、深さ約28cmを測り、平面形状は隅丸の長方形を呈する(図39、図版13-3・4)。北西に隣接する080229土坑がほぼ同様の規模・形状を呈しており、それに付随する080228・080230土坑も規模は小さいものの、同様の形状である(図版13-2)。遺物は少量であるが、第I様式と長原式の土器片が含まれる。遺構の平面形状や深度等から埋葬施設ではないかと考え、周辺を含めた精査を行ったものの、木棺痕跡や骨歯等の出土はみられなかった。

平坦部北半では、前述のように土坑は特徴的にみられたものの、南半に比べるとピット群が少ない。ただし、調査を北半と南半に分割し、北半の調査時にはやや迫り込み気味に遺構面の検出を行ったため、総体的にピットの数が減少してしまったという可能性は考えられる。これは建物の特定のためにピットの確認を重視したことが原因であるが、第7面の07056竪穴建物のように明確な柱穴は存在しないこと

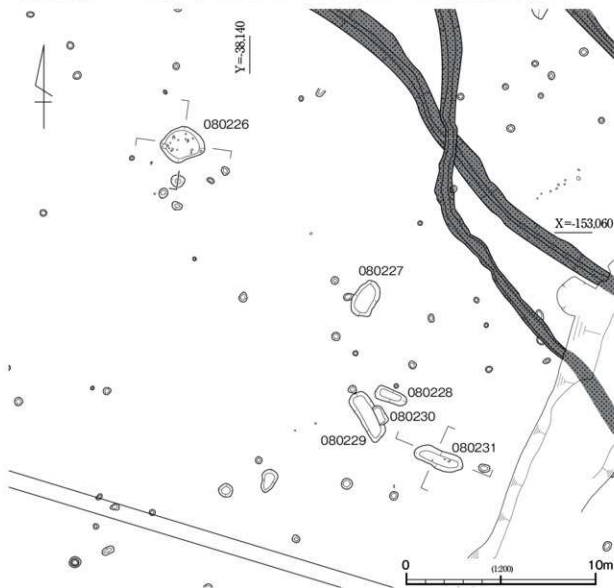


図36 080226~080231土坑 周辺遺構平面

がわかった。

その結果、ピットが全体的に散在するという印象を得るに止まったため、南半の調査では分布状況を捉えられるよう遺構の深浅に因われない検出を行った。ピットの深さが10cmに満たないような場合に堅穴建物として成立し得るかどうかという建築構造的な判断は別として、ピットの分布状況から、少なくとも遺構の粗密の傾向は看取できたと考える。結果的には、南北いずれの地区においても明確な堅穴建物等が存在しなかったことは明らかであり、建物の配置復元にも至らなかった。

平坦部の南半では、その東西において、遺構の分布に明確な違いが存在することを確認した(図20)。この平坦部は調査区北東部と西側の微高地に挟まれた位置であると前述したが、ほぼ

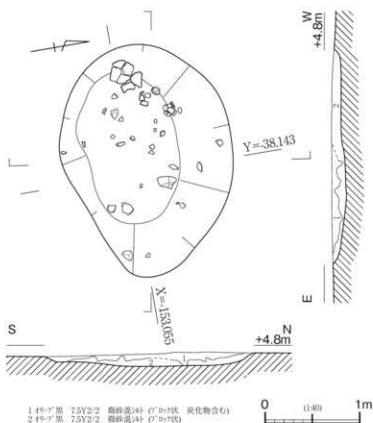


図37 080226土坑 平・断面

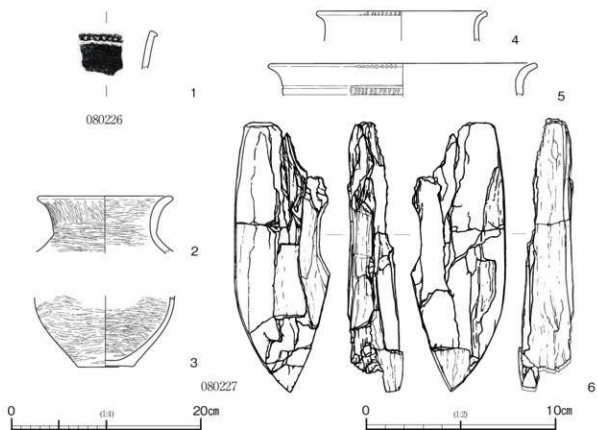


図38 080226・080227土坑 出土遺物

南北にのびる西側の微高地に対し、北東部の微高地は南東へと向かうため、南へ行くほど平坦面が広がる傾向にある。北半は緩やかな斜面であったものの、南半ではほとんど平坦であった。北半では散漫的ながらも全面的に検出したピット群が、南半では東側に集中する。西側は局所的にピットがまとまる様子はみられるものの、分布の有無は明確である。また、他の地点ではみられない小溝群を検出した。なお、南半では遺物を含む土坑はほとんど確認できなかった。

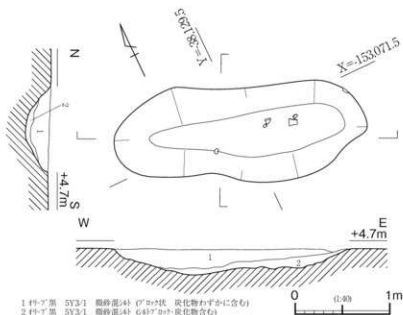


図39 080231土坑 平・断面

ピット群は、 $X = -153.100$ 、 $Y = -38.140$ 付近の半径約15mの範囲に集中する(図20)。検出時の平面形はいずれもほぼ円形であり、直径20~30cmを測る。現地の調査ではこの1.5倍ほどの数を検出したが、深さ5cmに満たないような浅い窪み状のものは除外した。多くの場合、ピットの深さは20cm程度を測り、遺物中の直径が10cm前後と検出面に比較して小さい。検出面の直径が大きいのは、その内部から木質遺体が出土しないことから、柱なし杭の抜き取りに際して広がったものと推測される。また、ピット上面と底面のそれぞれの中心が鉛直に位置しない例が多いことから、ピットの傾きを座標計測により記録した。その傾きからピット群の分類を試みようとしたが、システムの不良により作業を中断してしまった。ピット群の範囲内および周辺からは炭化物や遺物の出土がほとんどみられないものの、上記のようにピットの分布と形状には特徴的なものが看取されることから、おそらく建物の一部として掘削されたものと推測する。しかし、長期的な定住用ではなく、一時的な仮住まい用ではないかと考える。なお、この周辺では地震痕跡が多くみつかっており、検出したピットの中には地盤の横滑り現象により上下が不整合になった例を数基確認した(図版10-5・14-2)。

溝群は上記のピット群の西側に位置する(図20)。幅約10m、長さ約50mの範囲に、南西から北東とほぼ同一方向の溝が連なる。それぞれの溝は幅25cm前後、深さ5~10cm程度であり、蛇行しながらのびる様子が認められる。一部の溝の底面に凹凸がみられたことから、現地では足跡のつながったものであろうという推測を行った。しかし、珪藻分析では当時の地表面は乾燥していたようであり、足跡がつき易い状況ではなかった。斜面に沿って複数の溝が不定に並ぶ様から、あるいは降雨時に雨水が集まってきた自然流路の可能性も考えられる。いずれにしても、広い調査区の中で、当地区にだけこのような溝群が残ることは特殊である。この溝群の周辺一帯ではピットがほとんど確認できず、すぐ東側の濃密なピット群とは対称的である。土地利用に明確な差が存在することは明らかであるが、上記の溝群との関連性は不明である。

調査区の西部は、 $Y = -38.200$ 付近に下層から踏襲する微高地がほぼ南北にのびており、それより以西は一段下がった微低地を呈する(図20)。調査区西部は下の第9・10層において起伏に富んだ地形であったところが第8b層の堆積により平均化されたものであるが、土砂の供給が調査区東部に比べて少



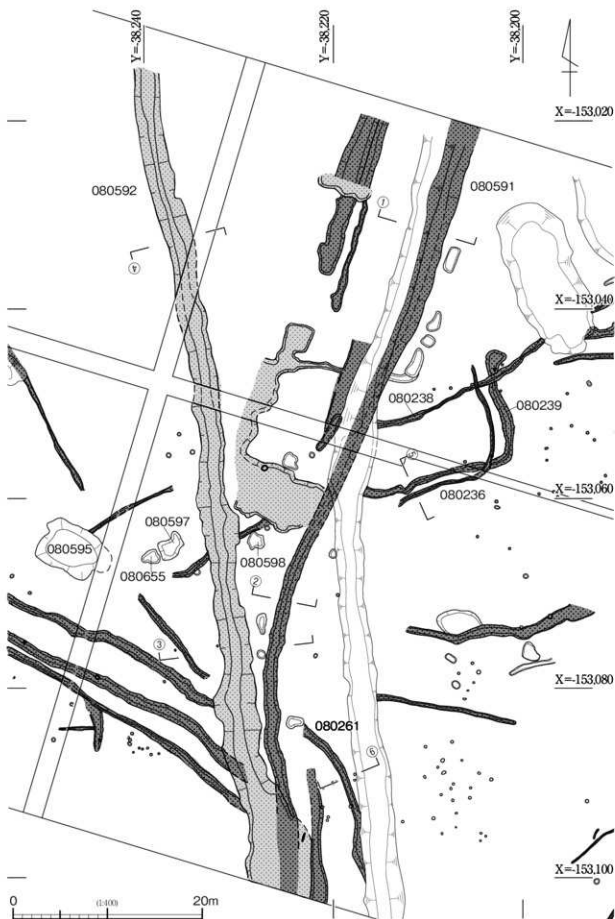


図40 080591溝、080592流路 周辺遺構平面

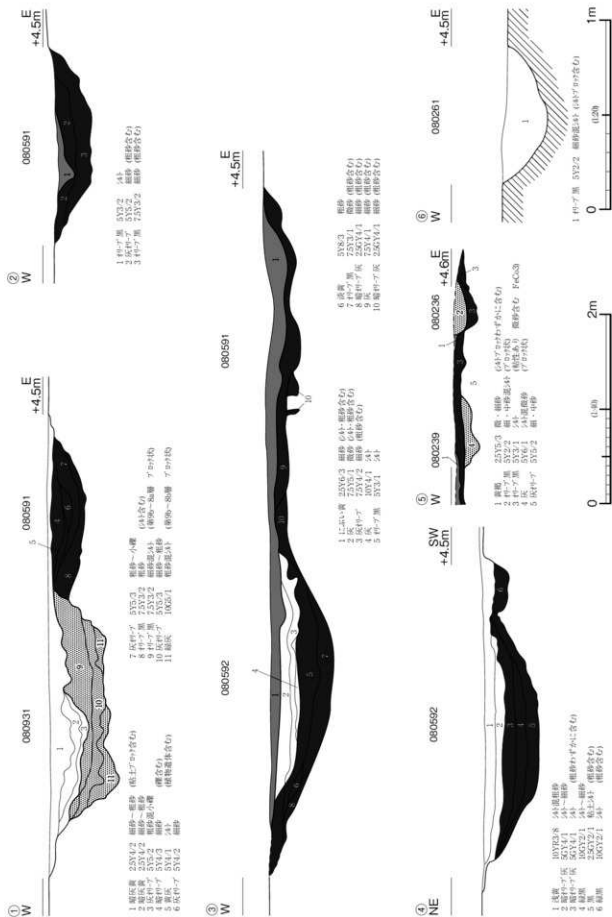


図41 080236・080239・080261・080591・080931溝、080592流路 断面

なかったため、取り残された場所が微高地となったと考えられる。微高地の高所はT.P.+4.5m前後であり、20mほど西側に離れた低所との比高差は約50cmを測る。ただし、最も低所には流路が通っており、大半はT.P.+4.2m前後と調査区中央の平坦部とほぼ同じ標高である。調査区の西側に土砂の供給が少ない状況は、その後の弥生時代全体を通して同様である。そのため、本遺構面の包含層でもある土壌化層の第8a層は上の第7層により攪拌されており、Y=-38,240より西ではほとんど残存していない。溝や流路以外の遺構が極端に少ない傾向は明らかである。これは第8a層の大半が失われていることから推測すると、小さな遺構も同様に攪乱された可能性が高い。しかし、遺構面上あるいは層中から出土する遺物が少ないことから、当初から遺構がなかったとも考えられる。調査区の中央付近は地表面の土質が細砂を主体とするのに対し、西側は粗砂を中心とするという違いが現地での遺構面の精査時に看取された。そのため、西側では遺構の検出や掘削等の作業が困難であったことを記憶している。同様の状況は当時の地表面でも起こり得たことである。やや粗い砂地で形成される地表面は不安定であり、生活を行うには不適當であったため、同じような地形である中央部を積極的に利用したと想像できる。あくまでも推測の域を出ないが、当地区では溝以外に不定形な落込が散見されることから、多くは自然地形のままであったと考えられ、人々が積極的に生活域として活用していた可能性は極めて低いと考えられる。

Y=-38,220~-38,240付近では、最も低所を流れる流路とその周辺に多数の溝を検出した(図40)。

080236・080238・080239溝は調査区西側から中央の平坦部北側に至る溝群である。地形に沿った形でみられる周辺の溝とは異なり、南西から北東の方向にのびている。また、それぞれの溝同士に切り合い関係認められるが、周辺の他の流路や溝より先行する可能性も考えられる。その中の080236・080239

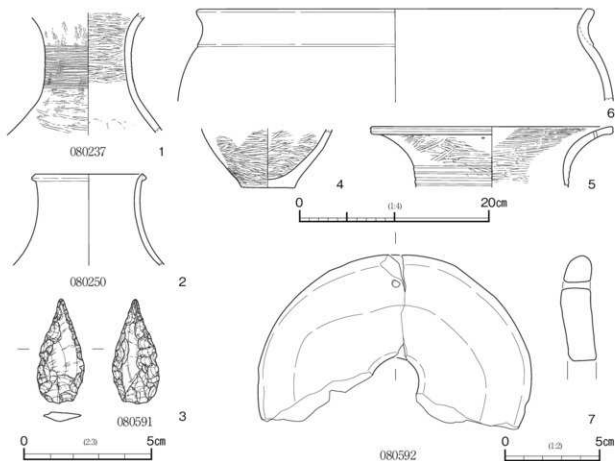


図42 080237・080591溝、080250ピット、080592流路 出土遺物

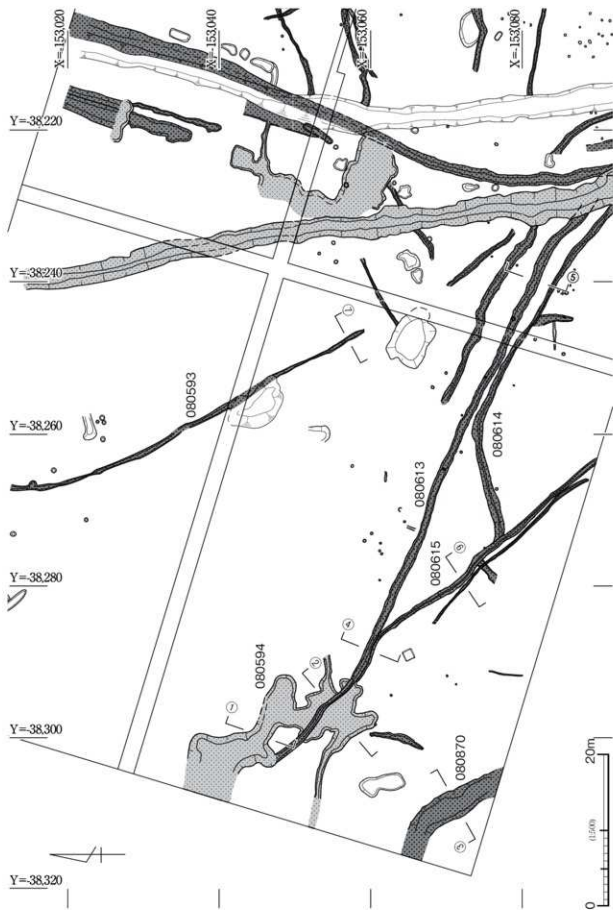


图43 080613·080615溝 周辺遺構平面

溝は、ともに幅約0.8 m、深さ約15cmの規模を有し、第8 a層を主とする埋土である(図41、図版13-5・6)。両溝ともY=-38.203付近においてほぼ北へと屈曲する様子が認められる。これらの溝は、前述の平坦部南西に位置する溝群とほぼ同じ方向を示しているが、先の遺構は多数の溝が密集していたのに対し、こちらは数が少なく、長く繋がる溝で構成されるという違いがある。おそらく、それぞれの遺構の成因は異なるものと思われ、北側の溝群については、地形を無視した形で人為的に掘削された溝として、他の遺構との関連性に注意したいところである。

080592流路は調査区西側の地形の中で最も低位を流れる遺構である(図40、図版15-1~4)。地形に沿ってほぼ南北方向にのびる流路であり、幅2.8~3.6m、深さ約60cmを測る(図41)。埋土は上下に

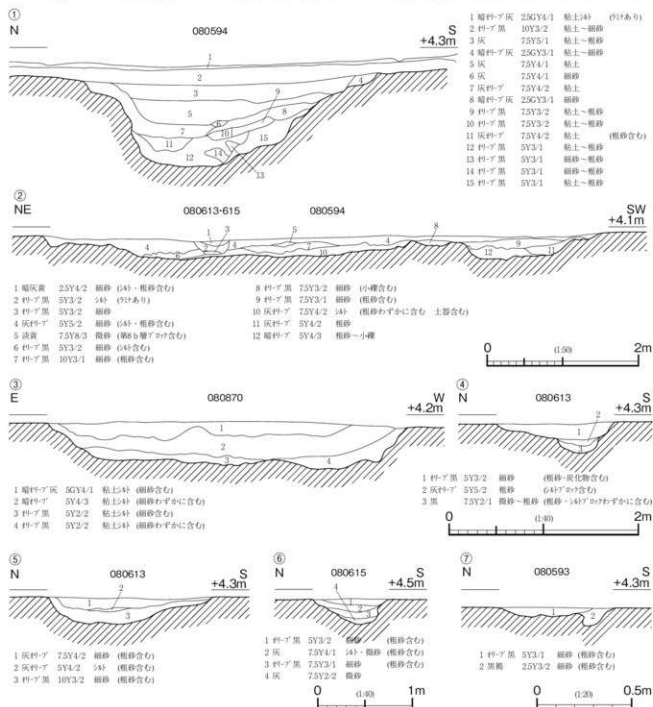


図44 080593・080613・080615・080870溝、080594落込 断面

大別することが可能であり、下半が第8 a層に相当し、上半が第7-2 b層に類似するものと考えられる。この上半の埋土は砂を含むブロック状であり、同様の埋土をもつ遺構は他にもいくつかみられ、第8 a層形成後のものとして大半は第8 a面帰属の遺構とした。しかし、080592流路については検出時の平面形が不定形に広がっており、埋土下半の形状とまったく一致していなかった。前述のとおり、当時は数度の大地震が発生したことが明らかであり、地盤が破壊されて地表面がブロック状となった例をいくつか検出した。当遺構の埋土上半とする土も、同様に地震を成因としてできたものが凹み部分に堆積した可能性が高いと考えられる。そのため、後出する第8 a面ではあえて080592流路を帰属させていない。埋土のみをその根拠としたわけではなく、080963・080967溝との切り合い関係等も参考にしたが、それらの詳細については第8 a面の後述を参照されたい。なお、遺物としては弥生時代前期の鉢・壺等がまとめて出土しており、その中に大型の有孔円板がみつかった（図42、図版232）。

この周辺は、場所によって第8 a層が残存しなかったり、基盤層の土質が変化したりしたため、遺構の平面検出・断面観察共に不明瞭な点が多かった。そのため、確実な遺構の帰属をまず決定し、その遺構との切り合いや位置関係、土質の比較などによって不鮮明な遺構の前後を割り振っていったものである。したがって時には、断面と平面の関係が不一致となっている場合もある。概要部分で既述したとおり、第8 a面と第8 b面は遺構の説明のために便宜的に分離した意味合いが強く、事実との錯誤が生じている可能性があることを予め断っておく。

080591溝は080592流路の東側に位置し、調査区内では080592流路南端を基点として北北東に向かってのびている（図40、図版14-5～7）。図上では、同溝の南端が080592流路に攪乱されているようにもみえるが、上記のように080592流路のブロック状埋土が広がっていたために、やや掘削しすぎたことによるものである。埋土の土質が酷似することから、同時期の遺構とし、本来は同地点付近から分岐していたものと推測する。幅約2.1 m、深さ約40cmを測り、埋土は第8 a層相当のみである（図41）。080591溝の底面標高は、本流の080592流路と異なり、35cmほど高いことが明らかである。また、同溝の北端はY=-38,200付近にのびる微高地上を通過し、東側の平坦部へと引水

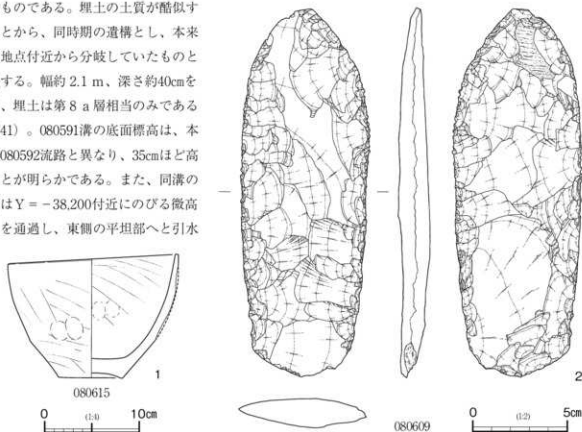


図45 080615・080609溝 出土遺物

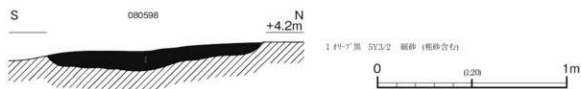
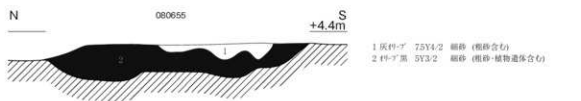
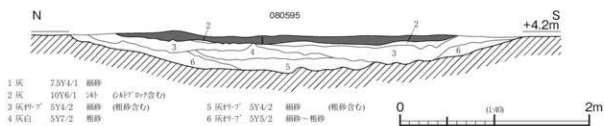
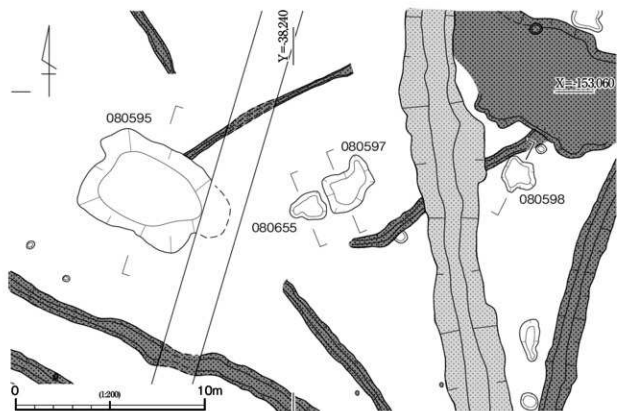


図46 080595・080597・080598・080655土坑 平・断面

すると推測される。このように地形を無視した形で設置されていることから、同遺構は人為的なものとみなし、前者に対して溝と区別した。しかし、埋土にみるように第8 a 面までに埋没してしまい、特に北半部は新たな遺構によって攪乱されるなど、同溝は早い段階に機能しなくなったようである。080592 流路の西側は、調査区の中央と同様に平坦面が広がっていたことが明らかである。しかし、ピットや土坑の検出数は圧倒的に少なく、特に北半は皆無に等しい。この北半を通る唯一の溝が080593である(図43)。幅は約60cmを測り、深さが5cmに満たないほどで、南東から北西へとつづく(図44⑦)。前述の080591溝と同様、南端は080592流路から分流したと推測するが、遺構上部を著しく削平されており、調査区の中で途切れてしまうために正確なところは不明である。

調査区西部の南側で、複数の溝を検出した。平坦部に位置するためか、いずれの溝もあまり地形に合わせた形跡はなく、南東から北西へと、ちょうど平坦部を横断するように設けられている(図43)。

080613・080614溝は、東端に080592流路を基点とし、西北西にのびて080594落込に達する遺構である(図43)。東側の080592流路との接続は不明瞭であるが、これは前述の080591溝と同様である。080613溝はほぼ一直線状に掘削され、幅1.3~1.7m、深さ約30cmを測る(図44、図版16-2・4)。

080614溝は途中、西へと屈曲した後再び北西へと方向を変え、080594落込に至る(図版16-3・4)。

080615溝は調査区の南側から北西へと伸びて上記と同様に080594落込に達する遺構である(図43)。

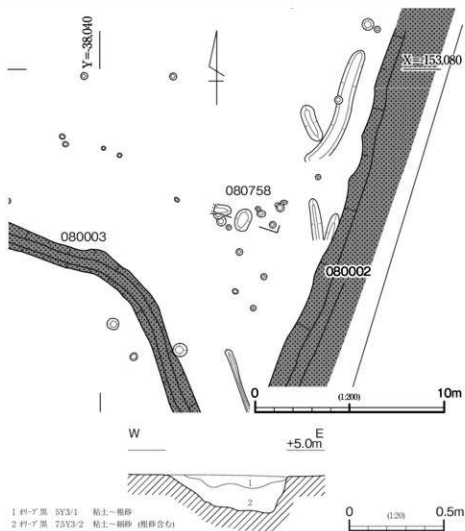
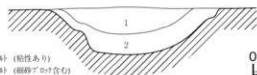
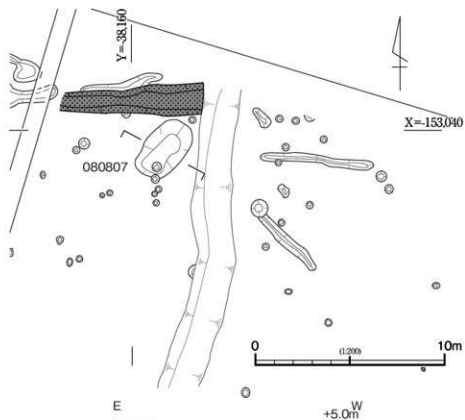


図47 080758ピット 平・断面





1 黒 5Y2/1 細砂泥(粘) (粘性あり)  
2 黒 5Y2/1 微砂泥(粘) (細砂アコケ含む)

図48 080807土坑 平・断面

幅約0.7 m、深さ約30cmを測る(図44)。080614・080613溝のいずれも埋没した後、途中で同じ道程を辿る。これは当地を通る必要性があったことを示しており、本流が原因で引水の方法を変更したものと解釈する。この場合、080613溝等の本流である080592流路が枯渇や埋没によって機能しなくなったため、さらに上流の南側から水利を行ったと推測される。おそらく、いずれの溝に対しても末端である080594落込は、排水用の低地であったと考えられる。また、当地で積極的に土地利用を行ったのは、この落込を北限とする南側一帯であることを示唆するものとする(図版15-5-7)。

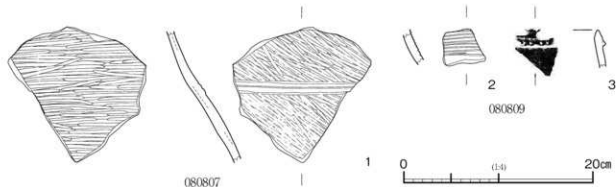


図49 080807・080809土坑 出土遺物

遺構の希薄さと同様、遺物の出土も極めて少ない。080615溝から弥生時代前期の鉢が出土する他には、080592流路に切られる080609溝から打製石斧が出土した程度である（図45、図版233）。

溝以外には、南半において土坑やピットがわずかに検出された。080595・080597・080598・080655土坑は080592流路の周辺に位置する（図46）。080595土坑は長軸約8.0mの大型の遺構であるが、深さは約40cmと浅く、遺物はほとんど出土しなかった。その他の土坑は長径1.5～2.0mとそれほど大きくはないものの、深さが約20cmと080595土坑と同様に浅く、遺物の出土もみられない（図46）。080695土坑を除き、その他の土坑の埋土は第8 a層であり、いずれも人為的に埋め戻された形跡等が認められないため、自然に埋没したものと思われる。

080595土坑は埋土下半に自然の土砂が堆積しており、最上部は第7～2層により平坦化されている。遺構内部の詳細な記録や所見は残されていないものの、遺構の形状や方向、周辺ではみられない土砂が残ることから、080592流路や080608（080593）溝の破堤地形であったと推測される。あるいは、本流である流路や溝にそれらの堆積物が残存しないことから、それらの浚渫土砂を廃棄するために改変された可能性も考えられる（図46）。なお、ピットについては数箇所においてまともな検出されたものの、調査区の東部と同様、建物の復元等には至らなかった。

080758土坑は調査区の北東部、080002溝の西側に位置する（図47）。前述した調査区北東部の微高地のすぐ北側にあり、周辺でピットがややまともな検出された。長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約20cmを測る。出土遺物はみられなかった。

080807土坑は調査区中央の平坦部北端に位置する（図48、図版19-2）。長径約3.6m、短径約2.2m、深さ約50cmを測る。遺構内部からは第I様式の有段壺片等が出土した（図49、図版233）。本遺構は、縄文時代晩期から弥生時代前期とする第8 a層の中では最終段階に近い時期のものである。しかし、遺構のすべてから遺物が出土するわけではないため、これだけをもって、本土坑を第8 a面の帰属とすることはできなかった。

第8 b層の出土遺物には縄文時代のもが多く含まれるが、第8 b層は氾濫堆積物であるため、浸食により上流や下層の遺物が混入したものであろう（図50、図版234・235）。破片にはあまり摩滅がみられないことから、縄文時代中期末頃には当地周辺に人為的の及んだことが示される。

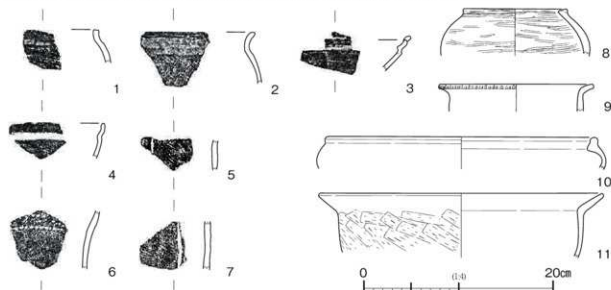


図50 第8 b層 出土遺物

Y=38,050

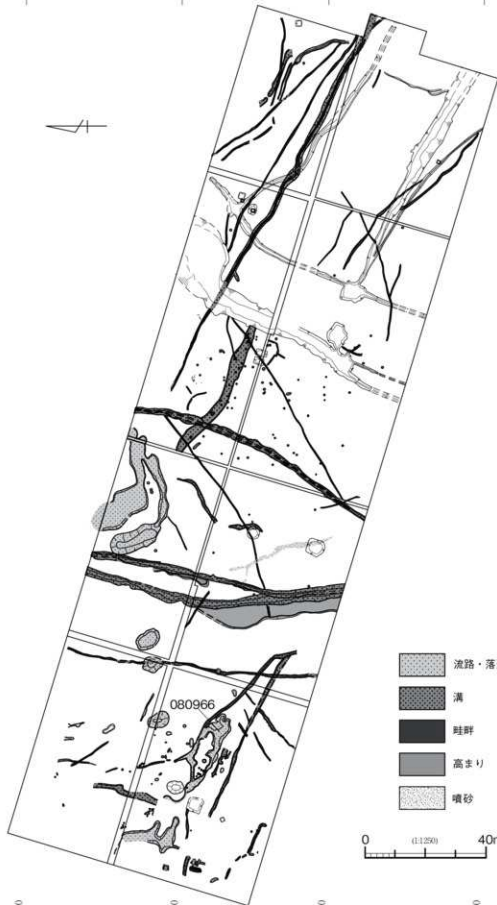
Y=38,100






Y=38,150

Y=38,200

Y=38,250

Y=38,300



-  流路・落込
-  溝
-  畦畔
-  高まり
-  噴砂

0 11.250 40m

X=153,000

X=153,050

X=153,100

X=153,150

図51 第8 a面 遺構分布

### 3. 第8 a面の遺構と遺物

第8 a面の遺構としては、溝・落込・土坑・ピット等が挙げられる(図51)。

第8 a面は第7層を除去して検出する旧地表面であり、第8 a層上面を基準とする。ただし、前項にて説明したとおり第8 a層の上面として検出した遺構の数は極めて少なく、ここに図示する遺構平面図は、第8 b面検出遺構のうち、整理作業において帰属面を移動すべきであると判断したものを含む。各遺構に関する帰属面の検討は、第一に遺構の検出状況や断面、第二に遺物を根拠としている。これは遺物の出土する遺構が圧倒的に少ないこと、遺構検出時点ですでに複数時期の遺物が混在しており、遺物主体で遺構の分類を行うと、検出そのものの検証に及んでしまうため、膨大な作業を要することになる。また、最近の調査成果により、縄文時代晩期の長原式土器と第1様式土器にはある程度の並行期間が存在することが明らかとなってきた。久宝寺遺跡の第8 a層に含まれる遺物を鑑みても、その傾向は明確である。このことから、第8 b面における検出遺構の細分は、あくまでも遺構の変遷上での解釈と捉えるべきである。また、別の大きな原因としては、調査区西部を中心に第8 a層がほとんど残存しておらず、物理的に第8 a面を検出することが不可能であったことも挙げられる。

第8 a面の設定については「第7面への変遷過程を示すための便宜的な」ものと前述しているが、これは図示した遺構面が合成によってできたものであり、このような景観で遺構を検出した記録はないことを明記したものである。このような第8 b面と第8 a面であるが、遺構を分類した目安として最も簡易なものは遺構の埋土である。両遺構面における遺構の大半は現地での第8 b面において検出したものであり、その数は優に2,000基を超える。これらすべての遺構埋土を短期間のうちに記録することは困難であったため、土質の分類を行って省力化を図った。その結果、埋土には第7層関連と第8 a層以外に、第8 a・8 b層を含むブロック土の存在することが明らかとなった。前二者についてはそれぞれ第8 a面と第8 b面に帰属するものとして分別したが、ブロック土を埋土にもつものはさらに細分を行った(表11)。

表11 第8面検出の遺構埋土(ブロック土)の区分

帰属遺構面	ブロック土内訳(第・層省略)	被覆層	備考
第7-2面	7-2, 8 a, 8 b	7-1	
第8 a面	8 a, 8 b	7-2	この両者については、さらに遺構の切り合い関係等から検証を加える
第8 b面	8 a, 8 b	8 a	

概ね、この分類表に基づいて区別は可能であるが、第8 a層によって被覆された遺構は帰属面の決定が困難である。確実なものを除き、最終的には第8 b面の遺構としたものの、ブロック土を覆う層の形成状態によっては限りなく第8 a面に近いと思われるものが存在するためである。また、上部を削平された遺構については判断基準がないため、そのままではすべて第8 b面のものとならざるを得なくなる。そこで遺構の前後関係や遺物からいずれの遺構面であるかを判断したものであるが、その結果、第8 a面への帰属を想定した遺構は調査区北東部と中央部西側の各微高地上に集中することがわかった。その当時、これらの微高地上に継続的な人為が加えられたことを示すものといえよう。また、これらは後の第7面に密接につながる地形の改変であり、おそらく水田開発に伴う所産と考えられるものの、本遺構面では明確な遺構として水田の存在を確認することはできなかった。しかし、調査区南東に位置する02



圖52 080893~080895・080898溝 周辺遺構平面

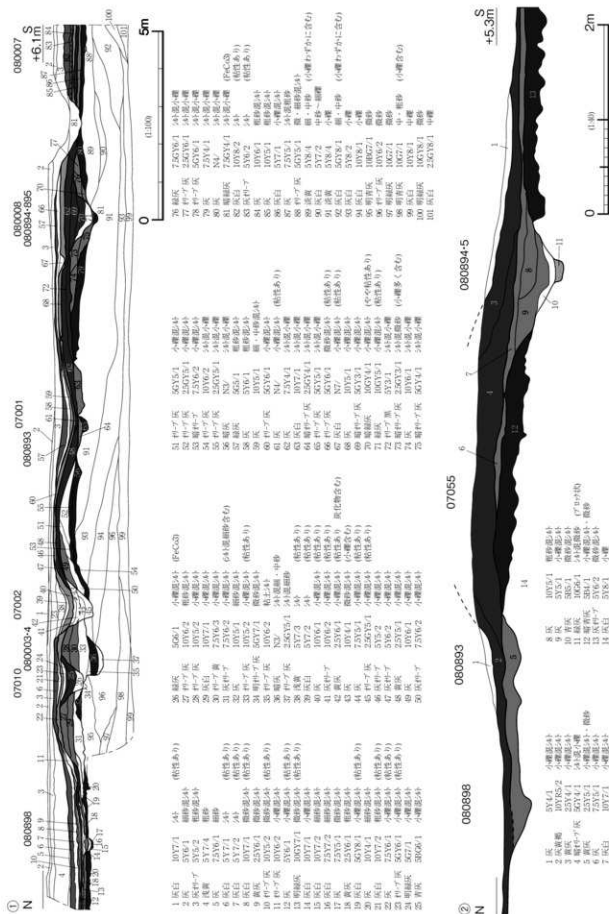


図53 080003・080004・080007・080008・080893～080895・07001・07002・07010溝、07055高まり断面

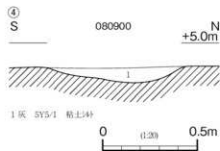
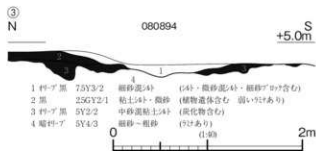


図54 080894・080898・080900溝 断面

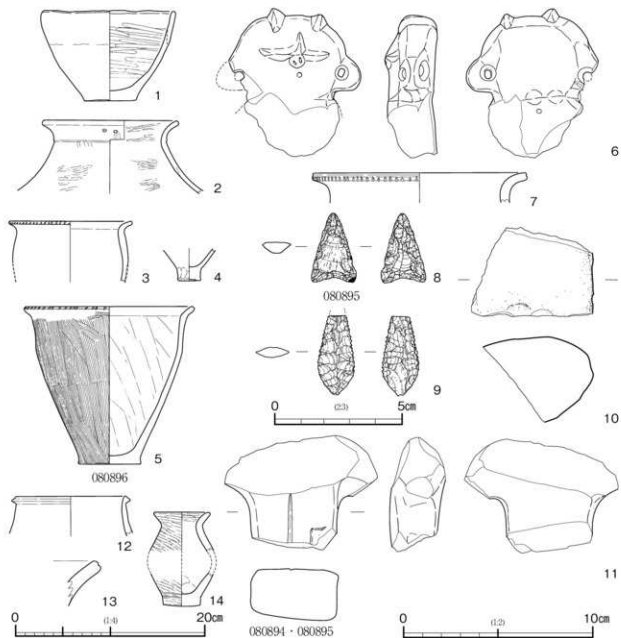


図55 080894~080896溝 出土遺物

－ 2 調査区では畦畔の一部を検出したリ、第 8 a 層の顕微鏡観察では植物珪酸体やイネ花粉を検出したリする等、すでに水田耕作が開始されていたことを示唆する成果も得ている。その点においても、大小の遺構が濃密に検出された第 8 b 面に対し、溝や高まりにはほぼ限定される第 8 a 面を設定することは有効であると判断する。

調査区の北東部では、微高地上を南東から北西へとびる溝のみが検出された(図52)。第 8 b 面において微高地を横断するように北流した08002～08004溝は、この段階までには完全に埋没してしまい、調査区の南側を起源とする水路は作られなくなる。調査区南側の水源の状況はまったく不明であるが、この後の第 7 面を通して南側から引水する状況は確認できなかったことから、東側の水源から微高地上に直接水利を行う方法に変更したものと推測される。前項の08002溝の変遷において、その進路が北北東から北西へと溝を切り替えながら次第に変化したことを示したが、本遺構面における溝の方向がすべて北西方向であることからみても、この段階の水利システムが新しい展開を迎えたことは明らかであろう。これを水田開発に直接結びつけることは困難かもしれないが、当該期の水田遺構が存在する可能性を考える要因の1つとして考慮しなければならない。

080894・080895溝は、第 8 b 面の08008溝上のほぼ同じ位置に検出した遺構である(図52、図版25)。08008溝の継続遺構のように思われるが、平面形と断面の詳細な観察により、僅かずつだが遣り替えられていることが明らかとなった。

080894溝として認識した遺構は埋土がブロック状を呈しており、08008溝の中に疎らに分布する状況を確認した程度で全体的に残存してはいなかった。しかし、このブロック土がY=-38,120以西において直線的に西へとびる状況を検出し、第 8 b 面において08008溝が北へと屈曲したものと異なることが判明した。さらに西側の延長部分は上層からの攪乱によって削平されているために詳細が不明であるものの、これが破壊などの自然地形とは考えにくく、一部を改変した新しい溝として080894という別名称を設定した(図53・54)。しかし、これらはあくまでも西端のみの変化だけであり、東側の微高地周辺の断面を観察すると、本溝の外側に第 8 a 層が落ち込む別の溝状遺構を確認した(図24・53)。この幅広の080895溝は上記の080894溝と異なり、Y=-38,120以東において検出が可能となる。幅 1.8～2.5 m、深さ約35cmを測り、埋土には第 7-2 層および同層相当の土砂が認められる。溝の西側部分は前述と同様に上部が削平されており、詳細は不明である。埋土中み第 7-2 層は、遺構の場所により異なる堆積状況を示していることがわかった。溝の東半では第 7-2 層の相当層が遺構の形状に合わせて落ち込む様子が見受けられた。一方、西半は第 7-2 層の形成以前に別の土砂が流入して平坦化してしまい、その上面に第 7-2 層が新たに形成される。つまり、第 7-2 層が形成される直前には東側の微高地上では溝の形状が残っていたものの、西側はすでに埋没していたか、あるいは人為的に埋め戻されていたのである。このことから、第 8 b 面の08008溝以降、当地の溝は頻繁に修繕を繰り返されており、当時の人々にとって重要な水利施設であったことは明らかであろう。第 8 a 面の中の変遷として、まず080894溝によって走向が変更され、次に遺構深度がなくなってしまったせいか溝の幅を拡張し、やがて西側が埋没した後は東側の微高地上だけが機能し続けたという状況が想定できるのである。このような流れの中、第 8 a 面の080895溝から畿内では稀な土偶が出土した(図24・52、図版27-2・235)。土偶は、埋土中の第 7-2 層を除去した底面に頭部だけが貼り付くようにしてみつかった。周辺の同じ埋土からは、速賀川系土器や第 1 様式甕等の細片、石鏝が出土した程度であるが、総体的に縄文時代に遡り得るような遺物はほとんどみられないことから、弥生時代前期の遺物として認識する(図55)。現



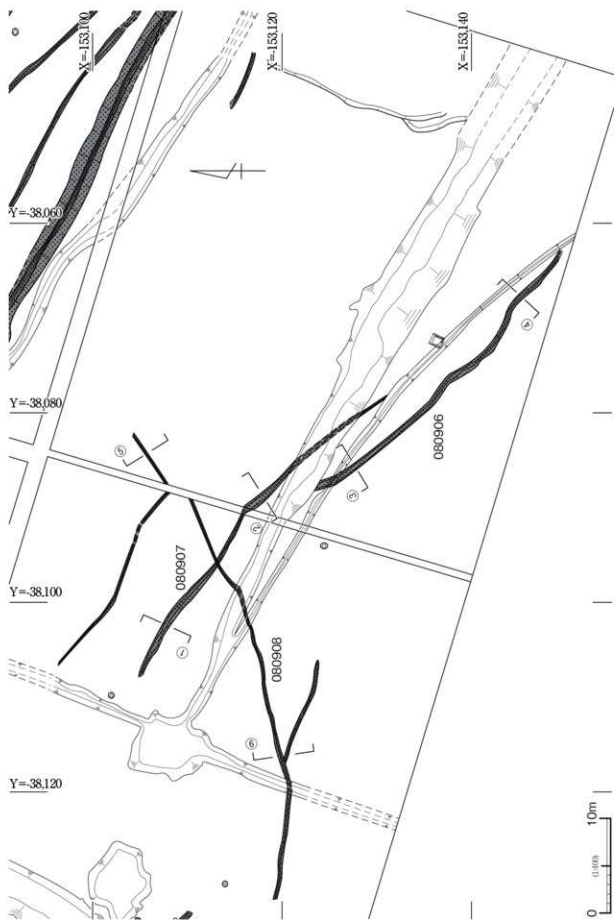


図56 調査区東 周辺遺構平面

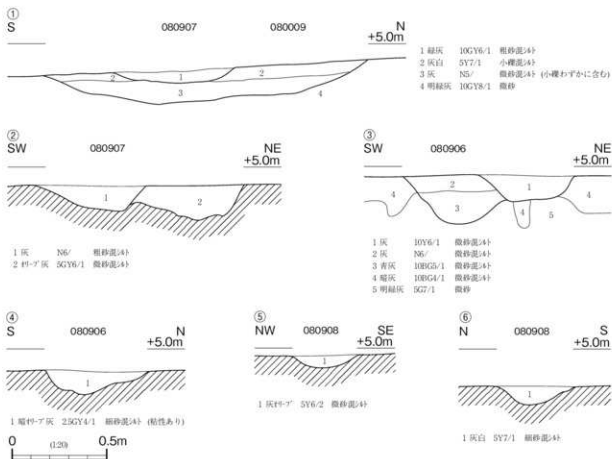


図57 080906～080908溝 断面

地において同一遺構として調査を行ったため、本来は080894・080895溝と区別しなければならないが、出土地点よりやや西側に位置する同じ溝の埋土から、土偶の体部片、ミニチュア土器や第I様式壺片等が出土した(図55-6-14、図版235～237)。

この他、詳細は後述するが、第7-2層中から土偶の体部片や、高まりの盛土からは石棒も出土しており、弥生時代前期にこれらを用いる集団が当地に存在したことは明らかである(図69・85)。同種の遺物は長原遺跡、宮下遺跡や鬼虎川遺跡等に散見され、本遺跡との関連が注目される。

図55-6は板状を呈する土偶の頭部であり、頭頂部に結髪を示す突起が2箇所みられる。正面左側の突起の外側には薄く剥離痕がみられることから、結髪以外の装飾が施されていた可能性もある。眼高上縁から鼻は「十」字につなげた突帯を貼り付け、鼻の下端は円形に押し潰して鼻孔を2つ表現する。その下にわずかに窪ませた円形で口を表し、顔の側面には環状突起を付けて耳を表現する。全体的に非常に抽象化された意匠という印象を受ける。11は土偶の胸部周辺の破片と考えられる。上記と同様、やや厚手の板状を呈する。側方から見ると、片側にわずかに反っており、膨らんだ面の中心には妊娠線と思われる浅い溝が縦方向に施される。腕や乳房を欠損しているために正確な上下は不明であり、現上面を底部とする可能性も考えられる。いずれも胎土は角閃石を含む褐色の生駒西麓産であり、大野薫氏による台式土偶長原タイプに分類される。

080895溝の北側、微高地の最高所を同溝と並行してのびる溝が080893である(図52・53、図版26)。上方を後世の07001溝が攪乱するため、明確な遺構層などを確認することは不可能であった。厳密には、07001溝の平面形は080893溝と同一ではなく、断面形も異なるため、これらが別の水路であることに間

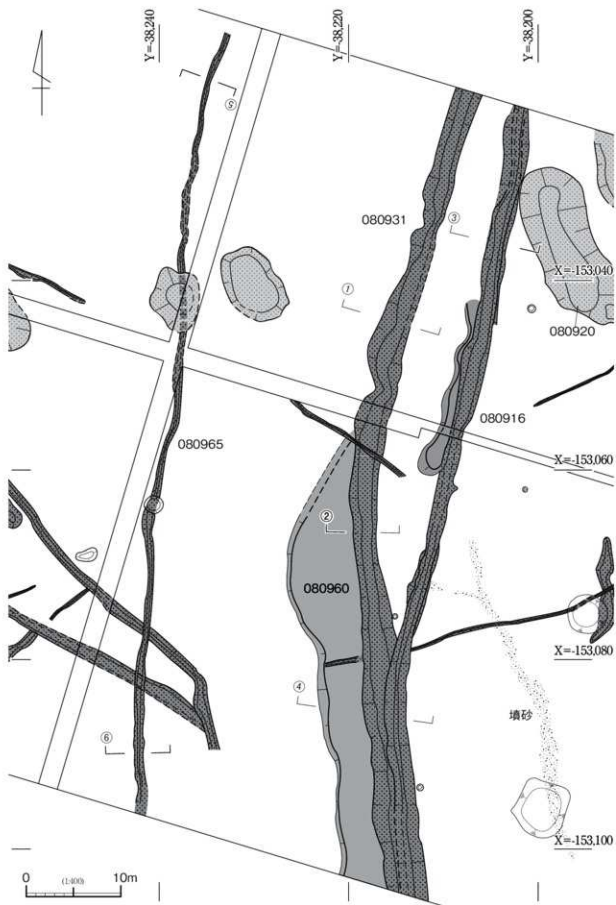


図58 調査区西 周辺遺構平面

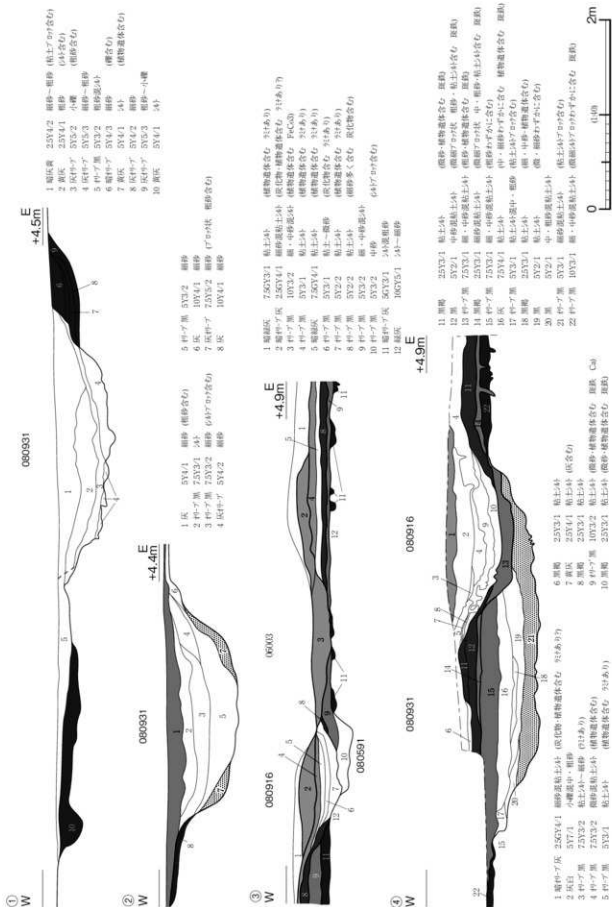


図59 080916・080931溝断面

違いはない。しかし、第7面では微高地上の地形が大きく改変されており、それに伴って080893溝も改修された可能性は十分に考えられる。

微高地の北側の平坦面に位置するものが、080898・080900溝である(図52)。第8b面において、南北方向の080002溝が次第に080003溝へと移行することを明らかにしたが、080898溝は同じ方向にあることから、一連の変遷の中にあると考えられる。ただし、南北の080002溝はすでに埋没しており、微高地周辺の水利の源流がすべて調査区の東側に変化している点は前述のとおりである。080898溝の南東部分は微高地上に位置し、しかも先述の2条の溝とかなり接近することから、いずれも調査区東側の本線から分流したものと考えられる。基幹水路を微高地上に設け、目的に応じて支線を加えたものであれば、システム化された水利がすでに導入されていたことを示すものであり、水田開発との関連性が注目されることである。080900溝等は完全に平坦面上に位置し、高低差もほとんどない地形であることから、周辺が水田域であれば区画内の流路と考えられるものである(図54)。なお、周辺の080896溝からは弥生時代前期を代表する第I様式壺・甕等が出土している(図55-1~5、図版236)。

調査区の南東部では、南東・北西方向の溝と、これに直交する溝を検出した(図56)。前者は北東部の微高地上を流れる溝と同じ方向であり、傾斜に対して最も緩やかな角度である。後者は微高地の斜面を流れる溝であり、短時間のうちに流れ切ってしまう一時的なものである。

080906・080907溝は、調査区の南東からわずかに蛇行しながら北西へと伸びる(図56、図版27-4~7)。遺構断面をみると、複数の掘り込みが確認され、両溝も錯綜する関係にありそうだが、周辺や延長部分が削平されているため、図示した以外の遺構は確認できなかった(図57)。

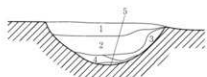
なお、断面の標高をみる限り、同方向の溝ではほとんど高低差のないことがわかる。これらの溝より後出する遺構が080908溝である。幅0.35~0.4m、深さ10cm未満を測る。断面の標高によると、40m程の距離で約20cmの比高差があり、北東から南西に向かって流れたことは明らかである(図57、図版28-1・2)。ただし、これだけの高低差があるため、瞬時に水が流れ切ってしまうものであり、一時的に機能したか、降雨時にのみ発生した自然の流路と思われる。

調査区の中央部一帯は、前遺構面と同様、平坦な地形にあったとみられる。しかし、第8b面では大きく開けた空間であったが、第8a面では中央に溝や落込がみられる等、利用可能な範囲がやや狭まった感がある(図51)。この平坦部分は調査区北東部とY=-38.220付近の微高地に挟まれた位置にあり、第8b層の堆積により形成された地形であることは既述のとおりである。

また下面と同様、土地利用の異なる調査区西部との境には南北方向の微高地が位置し、その上面に溝が設けられている。この西側の微高地上は、前述の北東部微高地上と同様の遺構変遷が看取される。前段階では微高地西側の低地部分に自然流路が通っていたが、第8a面では流路は埋没し、代わって微高地上に別の080931溝が開削されている(図58、図版28-5)。

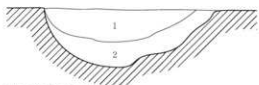
080931溝は南側で幅約4.6m、北側で幅約2.7m、深さ約60cmを測る。埋土の最下層に第8a層を含むブロック土が堆積することから、同層の形成後に掘削された遺構とみなされ、本遺構面に帰属する溝と判断した(図59)。しかし、同溝も第7~2層形成直前までには埋没してしまう。また、溝の西側肩部において堤状のわずかな高まりを検出した。平面的にはちょうど溝幅の広い部分に相当することから、溝の掘削時の土砂を積み上げた可能性が高い。堤の目的としては氾濫防止が第一に考えられるものの、後背部にそれを必要とする遺構が確認できないことから、水利のために溝底を嵩上げする等、別の目的があった可能性も考えられる。

⑤ E  
+4.4m W



- 1 砂-子黒 7.5Y3-1 粘土-粗砂 (G4)-骨粉含む  
 2 黒層 2.5Y3-1 粘土 (粘砂含む)  
 3 砂-子黒 7.5Y3-1 粘土 (粘性あり)  
 4 砂-子黒 7.5Y3-1 粘土-粗砂 (G4)多く含む  
 5 灰砂-? SY4.2 細砂 (粗砂・小礫多く含む)

⑥ W  
+4.4m E



- 1 黒 5Y2-1 粘土  
 2 黒 5Y3-1 粘土



図60 080965溝 断面

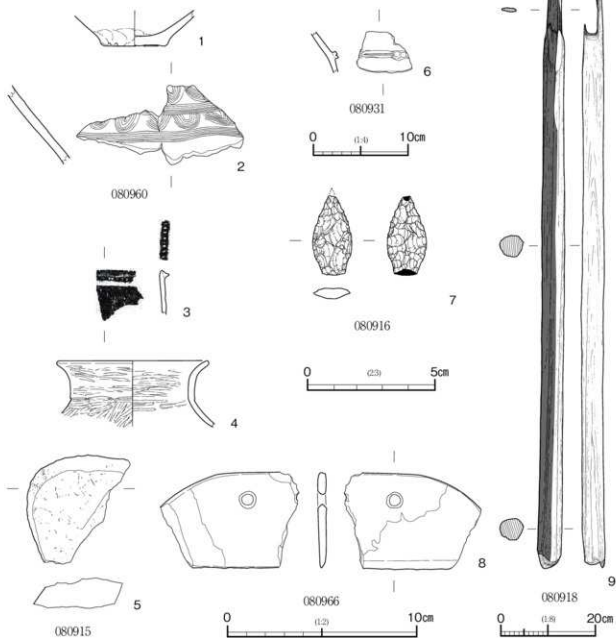


図61 080916・080918・080931溝、080960・080966落込、080915炭化物集中部 出土遺物

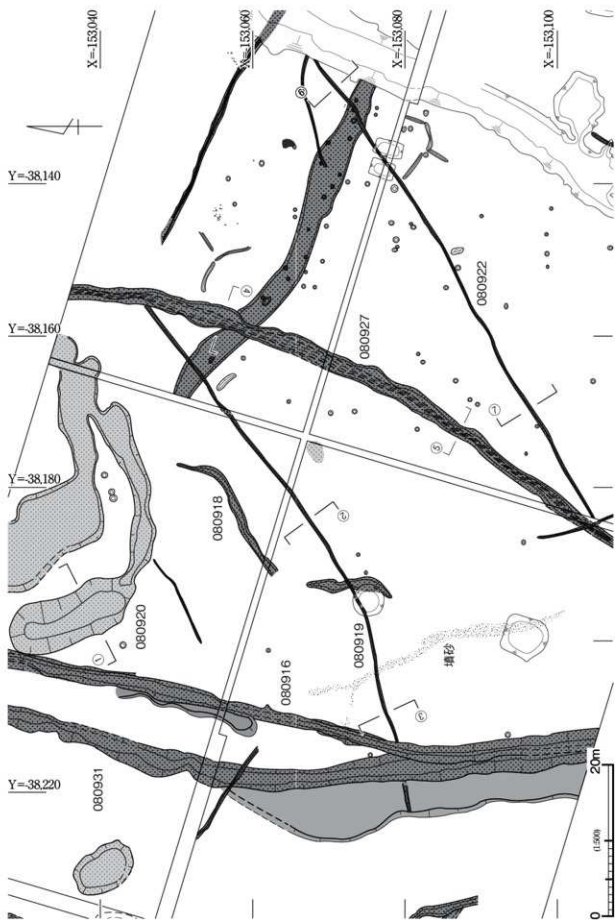


図62 調査区中央 周辺遺構平面

080916溝はX = -153.080付近において080931溝から分岐し、同溝の東側を北流する(図58、図版28-3・4、30-1~3)。図示した080916溝の平面形は明らかに080931溝を切っているが、これは後の第7面において改修による再掘削が行われたためである。図59③では不鮮明であるが、080916溝の北側において部分的に第8a層の落ち込む状況を確認したことから、本溝構面に伴う溝が先行して存在したものと推測する。これらの溝の西側において080965溝を検出した(図58、図版30-6~8)。080931溝にはほぼ並行し、幅約0.65~0.9m、深さ約20~30cmを測る(図60)。周辺の地形の中では最も低位にあり、第8b面の080592流路が埋没した後に080965溝が現れる。本溝は地形的には低所に位置するが、溝底面の標高を比較すると、微高地上にある080931溝より高いことがわかる。080931溝を本流とすれば、水位を上昇させた時にだけ流れる水路であった可能性が高い。しかし、一方では同溝の南北は南側の標高がやや低いことから、南流する排水路としての機能も考えられる。

これらの溝の周辺から東側の平坦部にかけては、溝や落込、ピット、炭化物の集中部等を検出した。特に炭化物集中部の付近では、他より遺物の密度が高い様子がみられたものの、図化に至らない程の細片が多い。これらの遺構から出土した遺物には、第I様式新段階の土器が目立つようになり、中には櫛描文を施すものもみられる(図61、図版238・239)。特筆すべきものは080966落込から出土した石燈丁、080918溝から出土した棒状木製品である。前者は、遺構としてほとんど確認し得ていない当地の水稲耕作の存在を裏付けるものである。後者は、棒状木製品の先端に孔状の抉りが認められ、仮に民俗例

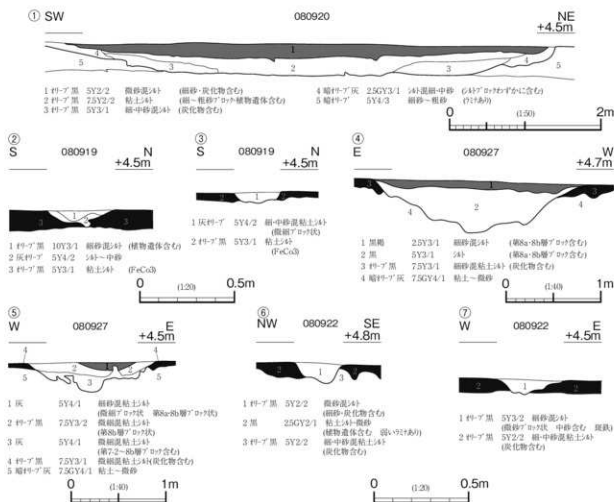


図63 080920落込、080919・080922・080927溝断面



にみる屋根葺き用針とすれば、建物の存在を示す好資料となる。

調査区の中央部は、第8 b面に引き続き微高地に囲まれた緩やかな平坦面を成していた。ピットや土坑は本遺構面において検出することが困難であったため、大半は検出時のとおり下面に表現するものの、炭化物や遺物の出土状況から第8 a面に多数の遺構が帰属したことは間違いない。この平坦部のうち、新出の遺構がみられるのは北半に集中する(図62)。

080920落込は調査区の北端に位置する(図62、図版28-7)。東西約40mの範囲に、不定形で浅い窪地として検出した。唯一、断面図を作成した南西部分のみ深さ約45cmを測り、埋土を上下2層に大別することができる(図63)。埋土の下半が第8 a層を含むブロック土であったため本遺構面に帰属する落込と考えたが、すぐ東側にも同様の浅い凹みを検出した。これらの落込より後出するのが080927溝である(図62、図版29-3~7)。幅2.2~3.2m、深さ30~50cmを測り、南西から北へと、弧を描きながら流れる。080920落込等の埋土は、同じブロック土であっても第8 a層に他が混じる程度であったが、本溝はブロック土の粒径が大きく、明確にそれと分かる埋土を呈する。本溝の中央には、さらに細い凹みを点線で表示している。断面の観察によると、後から掘削された様子がみられないことから、元は幅の狭い溝であったところを後から改修する等して拡がった可能性が高い。

これらの溝より後発する遺構が080919・080922溝である(図62、図版28-5・6、同29-1・2)。他ではみられない砂混じり土が埋土であることから、第7-2 b層を含む土砂の可能性が高い。緩斜面に沿って南西から北東へと流れる状況は、前述の080908溝と同じ特徴である。断面の標高をみると、080919溝では②より③が、080922溝では⑦より⑥がいずれも10cmほど高く、緩やかなすり鉢状の地形の両側を跨ぐように掘削する。このような場合、一方の溝から他方の溝へと水が一方方向に流れることはあり得ず、低所に排水路が設けられていないことから、雨水の浸水防止用等に掘られた可能性が高いと推測する。なお、西側の微高地縁辺には長さ約36mの溝状に残る噴砂の痕跡を検出した(図62、図版24-2)。最も広い箇所幅約1.5mの範囲に砂の分布が認められ、あまり拡散していないことから、本遺構面が埋没する直前に発生した地震によるものと思われる。これらの溝から出土した遺物はわずかであり、下層からの混入品がほとんどである(図64、図版238)。

調査区の西部は、状況的には前段階とほとんど変わらず、不定形な落込が多くみられる低湿地であったと考えられる。ただし、080965溝が080931溝からの水路として機能していたとすれば、その段階から耕作地として利用されていた可能性は高いと思われる(図65)。それ以前は中央付近に落込と、これに接続

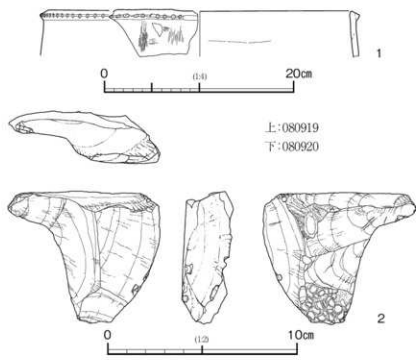


図64 080919溝、080920落込 出土遺物

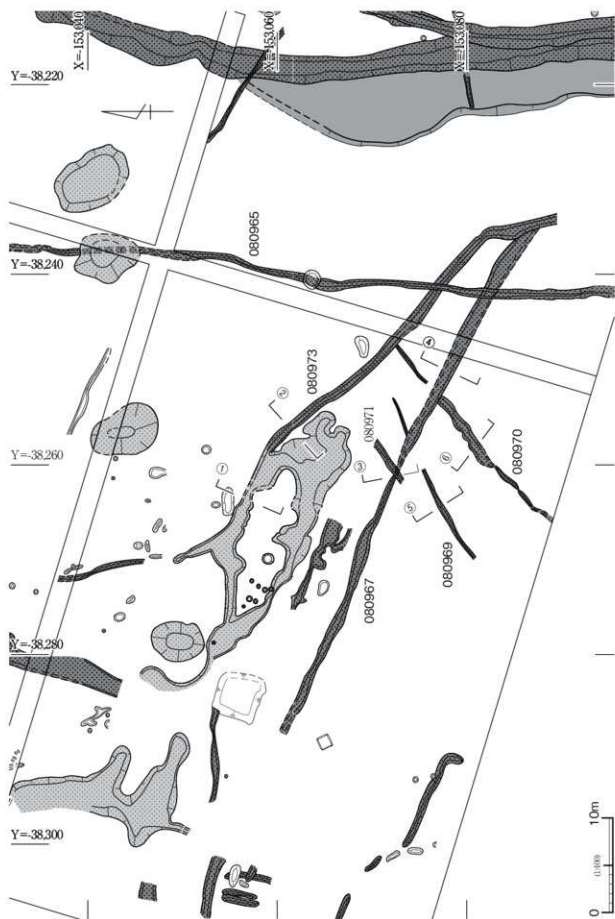


図65 調査区西 周辺遺構平面

する080967・080970・080973溝等が数条みられる程度である。これらの溝は第8 b面の080592溝付近から検出できることから、同溝が次第に埋没する過程で残ったものと推測する。

この周辺で最も古い遺構は080969・080970溝である(図65、図版30-9)。南西から北東にのびており、周辺の遺構とは方向が異なる。この状況は調査区中央の平坦部に一致するが、断面図の幅と平面の一致しない場合が多く取られるため、上層からの攪乱により埋土が乱された断面と、平均的な形状を採った平面形との間に齟齬が生じたものと思われる(図66)。これ以外を含め、第8 b面の帰属とした遺構との切り合い関係から、本遺構面の遺構としている。080967溝は第8 b面の080614溝の直上に位置する。幅は約11mと倍に広がり、下面では溝が一度南西へと屈曲していたのに対し、本遺構面では直線的に北西へと伸びるようになる(図65・66、図版31-1・2)。080973溝は080967溝の北側に位置し、南東の分岐部分の観察から、やや後出する溝であることがわかった(図65、図版31-3)。幅は約1.0m、深さ10~20cmを測り、第7-2相当層により埋没する。延長部分は落込と接続して境界が不明瞭になることから、自然流路であった可能性が高い。これらの遺構から遺物はほとんど出土しなかった。

第8 a面において特筆すべき遺構として、調査区の南東に位置する02-2調査区において検出した水田畦畔が挙げられる(図67)。調査面積が80㎡弱と狭いために全体の形状は不明であるが、水路を伴う

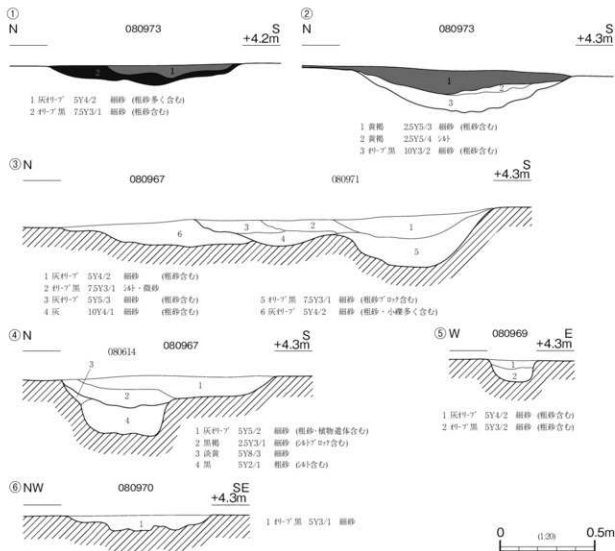


図66 080967・080969・080970・080973溝 断面

一連の水田遺構を確認することができた（図版20-2）。

080886溝は本調査区の北側に位置し、東西方向にのびる（図版19-1）。幅約1.0m、深さ約33cmを測り、本溝の北側は不明であるが、南側の肩部は人為的に盛土された080897堤となっている。水路の配置状況や堤の設置から、東西方向にのびる緩斜面地形であったことが推測され、水田はその南側斜面に設けられたものと思われる。このように南面する傾斜地形は、北側の調査区東半の地形にほぼ一致するものの、後者では同様の遺構はまったく検出されていない。既述した微高地上の溝と明らかに方向を異にすることから、本調査区は別の起因による地形に属すると考えるべきであろう。図12の層序断面によると、本遺構面の地形の基盤となる第8b層は直下に砂堆状の層理がみられることから、上記までとは異なる土砂の堆積によって形成された微高地上に位置する可能性が高い。また、同図によると水路から水田にかけての標高はT.P.+5.2~5.1mを測り、北側の調査区におけるいずれの微高地と比較しても1m前後の比高差がある。本調査区が周辺地形より圧倒的に高いことは明らかである。調査面積が狭いため、どのような地形のどのような部分に水田域が設定されたのかは不明であるが、この当時、当地周辺においてすでに水利を伴う水田開発が行われていたことは間違いない。02-2調査区における水田の立地条件を鑑みると、北側調査区における微高地上の水路周辺には、本来、水田の存在した可能性が高いと考えられる。しかし、この微高地は後世の第7面において大幅な地形の改変が行われ、図53の断面にみるように、縁辺部を中心に第8a層が大きく消失する。この部分に水田が形成されていたとすれば、残存しなかった理由も説明がつく。今後、第8a面において微高地を検出した際は、水田遺構の存在を

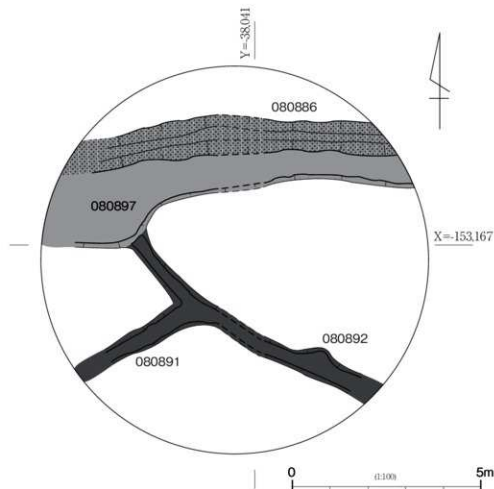


図67 080886溝、080891・080892畦畔、080897堤 平面

念頭に入れておかなければならない（図版21-1）。

第8 a層より出土した遺物はコンテナ約10箱に相当し、その中から特徴的なものを抽出した（図68～70、図版239～242）。層内には長原式前後から第I様式新段階までの遺物が混在するものの、第8 a層形成中を通じて同時並存していたかどうかは言及できない。図68の1は浮線文を施した浅鉢の波状口縁である。離山式から水I古式に相当する搬入品と考えられる。他に6・7のような縄文時代晩期の深鉢が出土する。2～5、9は遠賀川系土器であり、畿内最古段階の弥生式土器の一群といえる。一方、10・11のように弥生時代前期後半から中期に相当するような遺物も出土する。総合的には、本遺構面は弥生時代前期末頃に埋没したものと推測する。この他に石器も多数みられるが、同様の石鏃・尖頭器が上の第7-2層から多く出土しており、上層の残物の可能性も考えられる。図70-3は調査区中央の北側に位置する炭化物集中部付近から出土した石核剥片である。剥離した2片がほぼこのままの状態出土しており、付近で石器加工を行っていた可能性を示す貴重な資料である。

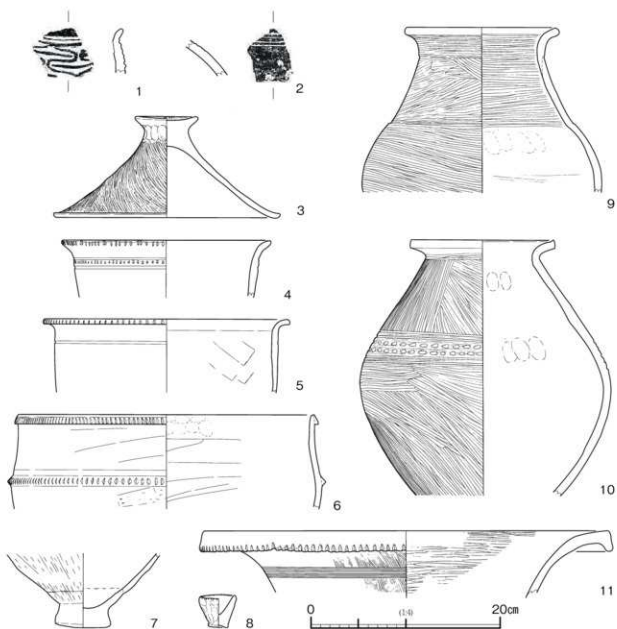


図68 第8 a層 出土遺物(1)

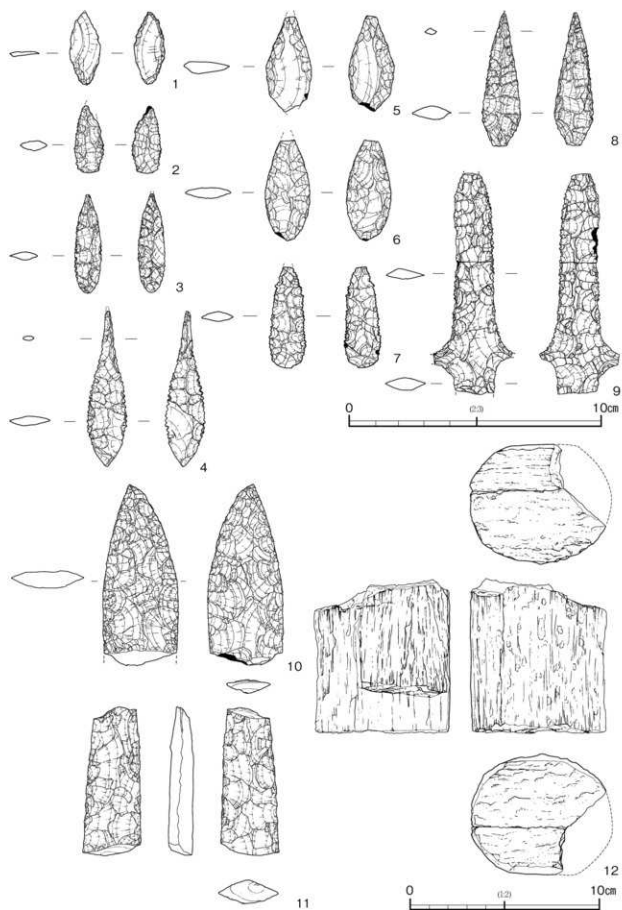


図69 第8a層 出土遺物(2)

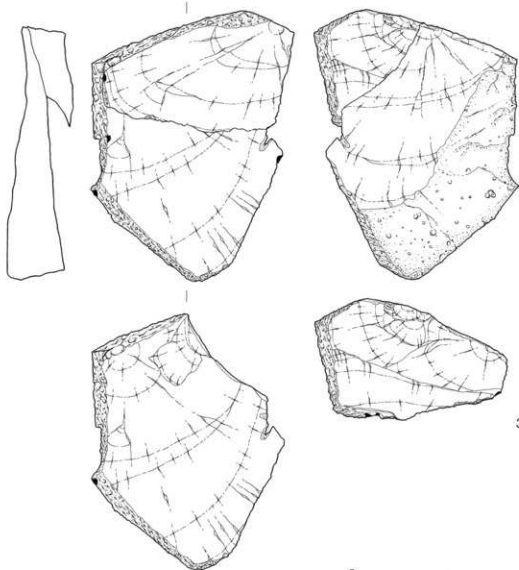
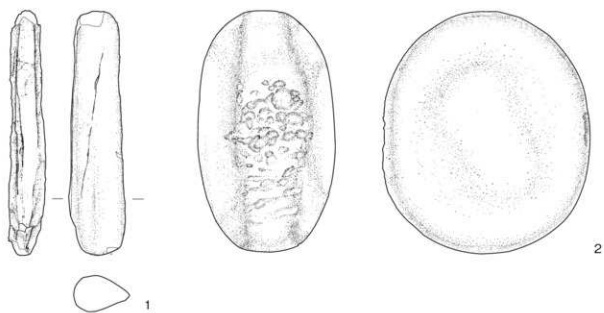


図70 第8 a層 出土遺物 (3)

## 第3節 第7面

### 1. 概要

弥生時代前期末には、河内湾周辺において大規模な氾濫が発生したことは、既往の調査成果によってよく知られている。第8a層が弥生時代前期を通しての地表面であった場合、第8a層直上に氾濫堆積物がほとんど検知されないことから、本調査区周辺にはそれらの影響があまり及ばなかったものと推測される。しかし、第8面における080916・080927・080931溝等の埋土上部にみられる砂層は、氾濫堆積物に相当するものと思われ、地表面を覆いつくすような大規模なものではないものの、溝や流路を埋没させる程度の影響があったと推測される。このように、本調査区の近隣ではほとんど影響はなかったものの、上流部にあたる旧平野川や久宝寺川ではどのような影響があったのかは不明な点が多く、それらの間接的な影響を受けた結果、第7面にかけての大幅な土地利用の変化が起こったとも考えられる。

第7面は、調査区のほぼ全域において確認された土壌化層である第7層上面において検出した。第7層は土壌化が著しく進行した上半の第7-1層と、あまり攪拌されず、土壌化の弱い下半の第7-2層の2つに分けられる。それぞれの土層に伴う遺構面を、下は第7-2面、上は第7-1面と呼称する。これらの土壌化層は第8a層の直上に間層を挟まずに重層している。下の第8層は砂を主体とする土質であるのに対し、第7層は粘土・シルトを主とすることから、それぞれの基盤が形成されるときに堆積状況には明らかな差異が存在すると考えられる。第7-1・7-2層とも、調査区内のいずれの地点においてもほぼ平均した厚さで確認できることから、地形による堆積に差はなかったことがわかる。このような状況から、おそらく調査区全体が一時的に水漬かりの状態となり、沈殿した土砂が再び地表面化して第7層になったと推測する。第7-2面から第7-1面への変遷過程においても同様の堆積環境が発生したかどうかは推測の域を出ないが、第7-1層の耕作による攪拌を受けた残りである第7-2層の層厚は、仮に攪拌到達深度が同程度であったとすれば、同層上に堆積した土砂の厚さに一致すると言えよう。このように弱い堆積環境にあったと推測される第7面では、自然地形の変化もほとんど起こらず、全体的な景観は下面の第8面と変わらなかったと考えられる。

第7-2面の上面は、前述のとおりに上部からの攪拌が著しいため、遺構の残存状況はあまり良くない。検出した遺構については、基本層序で述べたように間層がほとんどないため、純粋に本遺構面に帰属するものも少ないと判断される。本遺構面の場合、遺構検出の契機となったのは第7-1層の残存状態であり、窪む場合は下面遺構、影らむ場合は擬似遺構と考えられる。したがって、第7-2面は第8a面に続く旧地表として位置付けられるものの、大半の遺構は土壌化の顕著な第7-1面の古い様相を示すに過ぎないと判断し、第7面の範疇とした。

第7-1面は、上面の大半が第6-2b層の砂泥に覆われていたため、遺構の残存状況が極めて良好であった。微高地周辺の一部では第6層が上面に接しており、本来は第7-1面に帰属しない遺構を検出した可能性があるものの、景観の復元においては大差ないと判断できる。

### 2. 第7-2面の遺構と遺物

第7-2面の遺構としては、微高地・溝・畦畔が挙げられる(図71)。

第7-2面は第8a面の直上に形成された旧地表面であり、土壌化層の厚さが5cmに満たないような場所も多く、下面の状況を踏襲した形となっている。特に地形については、溝や水路が埋没して平坦化



Y=38,050

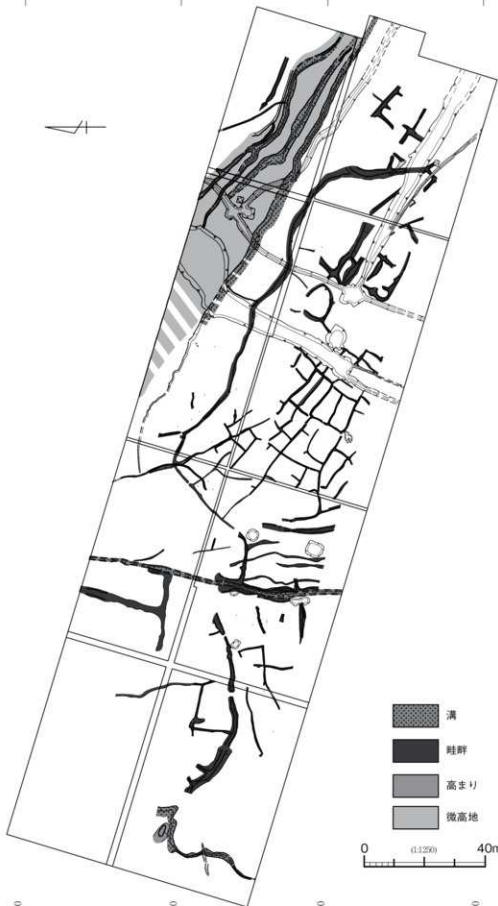
Y=38,100

Y=38,150

Y=38,200

Y=38,250

Y=38,300



X=153,000

X=153,050

X=153,100

X=153,150

図71 第7-2面 遺構分布

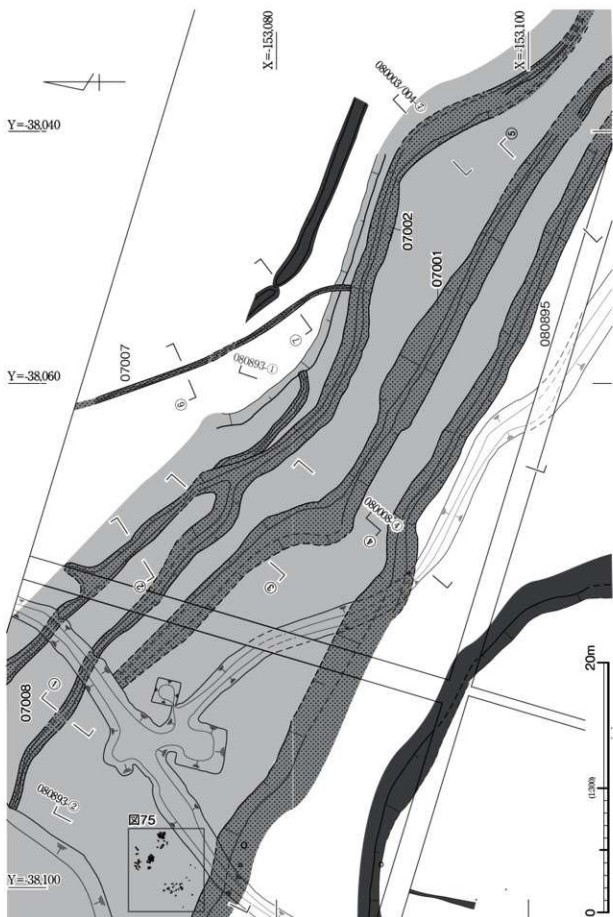


図72 調査区東 周辺道構平面

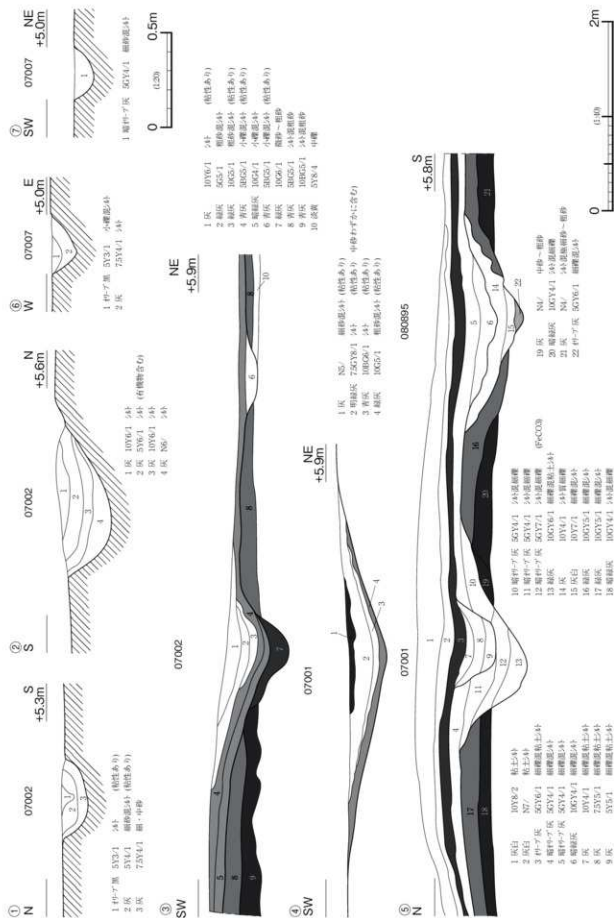


図73 07001・07002・07007溝、080895溝 断面

した以外は、全体的な景観はほとんど変化していない。前項の概要において、第7-2面にて検出した遺構は、その検出状況から第7-1面の古い段階として捉えられるとした。しかし、第8a面において水田耕作の開始されていた可能性が高いことや、第8a面との間に地形的な差異が認められないことから、本遺構面の土地利用の様子は、よく似た地形である第8a面の状況を複写的に表したものとも考えられる。第7-2面と第8a面の遺構配置に共通する部分が多い点からも、当地周辺の水田化は下面の段階ですでに開始されていた可能性の高いことが看取される。

調査区の北東部は、第8面を通してみられた微高地である。下面では埋没した流路の後に残った自然地形として遺構名の設定をあえて行わなかった。しかし、本遺構面では部分的に嵩上げを行い、人為的に高地化した痕跡を確認したことから、07008微高地として区別することにした(図72、図版32-2)。南東から北西へとのびる方向、位置や平面的な形状に第8面との違いは認められず、最大幅約21m、最も高い部分の標高はT.P.+5.6m、平坦部との比高差は約1.0mを測る。図53の断面によると、北側斜面における盛土が顕著であるのに対し、微高地として認知できる範囲は下の第8面とほとんど差がみられないことから、微高地の立面形のみが改変された状態である。この微高地北側には数条の溝が新たに開削されており、この掘削に伴う排土を盛土に利用していることから、堤として築いたものが微高地と一体化した可能性が高い。しかし、この盛土の行為は結果的にならかな傾斜地を高くて平坦な地形に作り変え、この後、周辺の耕作地とは異なる土地利用の変遷を辿るようになる。

080895溝は第8a面が初現の遺構で、本遺構面まで存続したものである。下面と同様、微高地の南側縁辺に位置し、第7-2層の堆積により遺構肩部がわずかに上昇する以外、ほとんど変化はみられない(図72・73、図版32-2)。ただし、連続する080894・080895溝の断面を検討した結果、場所によっては同溝の埋土上面に第7-2層が堆積する場合もあることがわかった(図24②・④・⑤・53①・②)。第7-2層とする堆積が単発的なものではなく、複数回に亘るものであった可能性は考えられるものの、現地調査において確認されていないため、推論にすぎない。後述するが、第7-1面では07008微高地がさらに劇的な改変を受け、080895溝の西半部分が削平されることから、この作業に伴う本溝の部分的な変化を示すものと考えておきたい。つまり、堆積層から土壌化した第7-2面と、土地改良による第7-2面という異なる段階を同時に検出したということである。後者は第7-1面に近い景観であると判断し、本遺構面ではトーンにより初期の状態を復元している。また、後述するように、南側一帯には水田城が広がっていたことから、水源としての存在も加味した。

07001溝は07008微高地の頂部に開削された水路で(図53①・72・73、図版33-3~5)、第8a面の080893溝とわずかに位置がずれており、こちらは微高地の北側に向かっている。断面形は幅3.6m

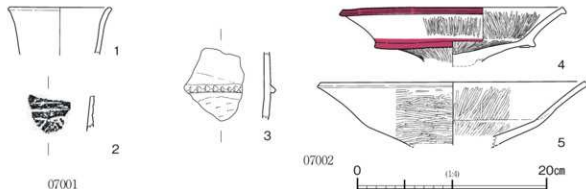


図74 07001・07002溝 出土遺物

の緩やかな揺鉢状を呈し、深さ50～60cmを測る（図73）。主たる埋土は崩落土であり、流水の痕跡は確認されなかった。

07002溝は07001溝の北側に位置し、微高地の北肩上を北西へとびる（図72、図版34-1・2）。幅約1.4m、深さ約40cmを測り、断面はU字形を呈する（図53①・73）。処々に砂の自然堆積がみられることから、流水していたことが明らかである。Y = -38.070以西では分流するものの、両溝は同時に機能したのではなく、本遺構面の中で溝の改修と切替が行われ、北側の低い位置から南側の微高地上へと移動したと考えられる。いずれも流れの指向性が変わらないことから、微高地北側への給水が目的の水利施設である。07007溝は07002溝に接続する小溝であり、幅約0.3m、深さ約13cmを測る（図73、図版33-6）。遺構底面の標高は南に向かって下降しており、07002溝と逆行することがわかった。このことから分流路ではないことが明らかであり、排水路の可能性が考えられる。

これらの遺構からの出土遺物は非常に少なく、07001・07002溝に僅かにみられる程度であるが、上下層からの混入物がほとんどである（図74、図版243）。2・3は縄文時代の深鉢であり、前者は後期初頭の堀ノ内式とみられる。4・5は弥生時代後期の高杯であり、上面にて溝内に転落したものであろう。

07008微高地において特筆すべきものとして、X = -153.072、Y = -38.100周辺から出土した石器群

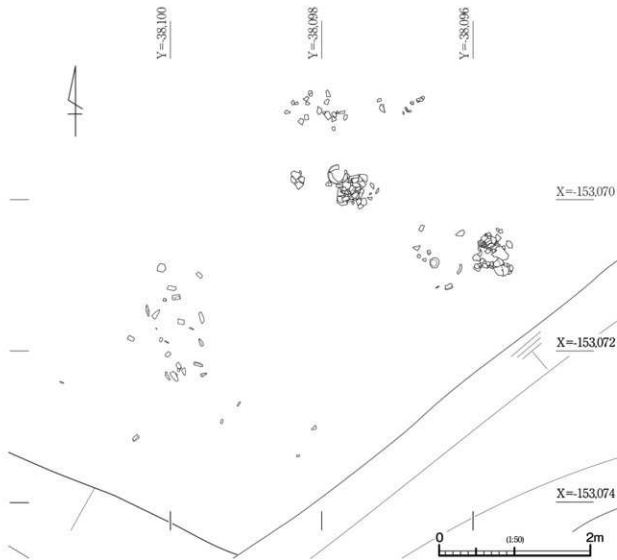


図75 07008微高地 遺物出土状況

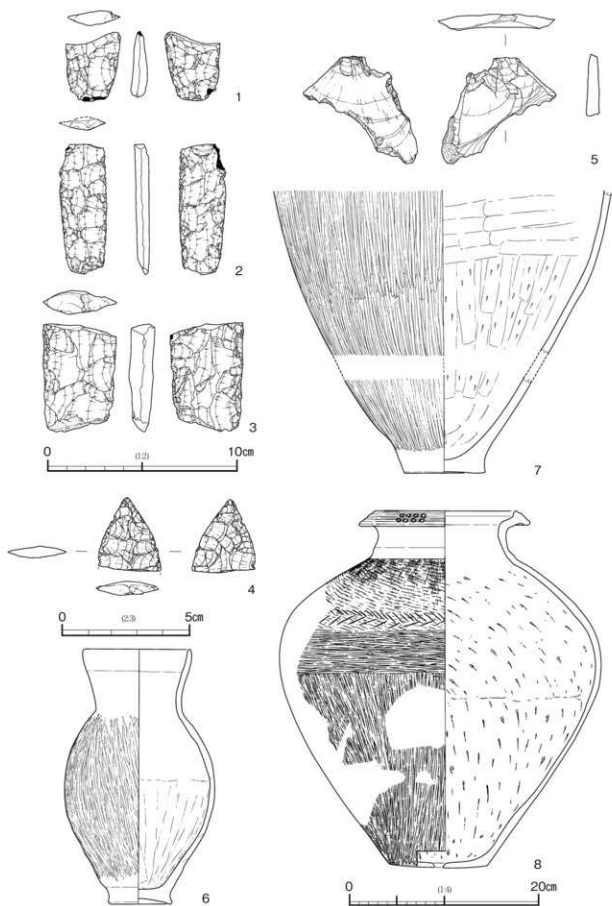


图76 07008微高地 出土遺物(1)

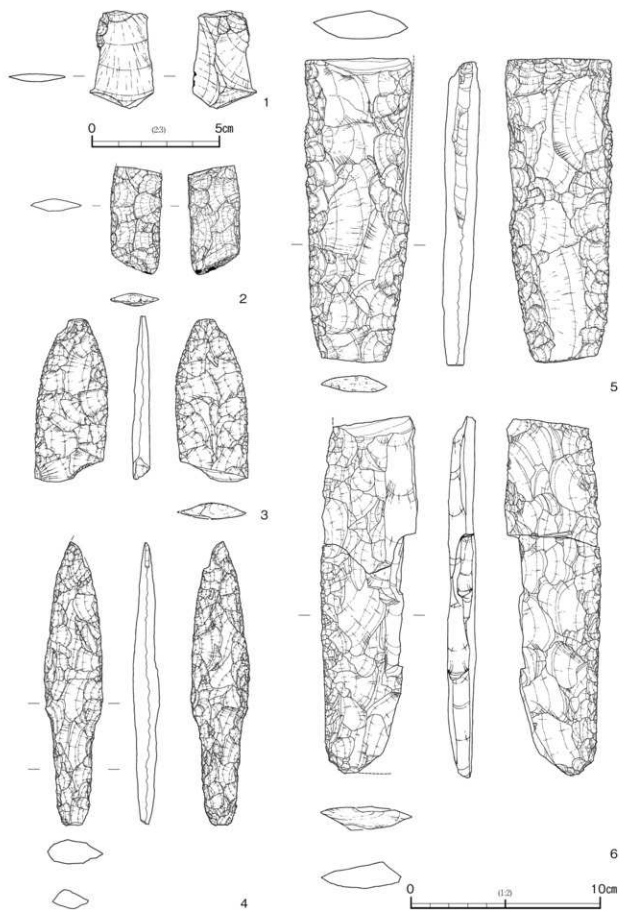


图77 07008微高地 出土遺物(2)

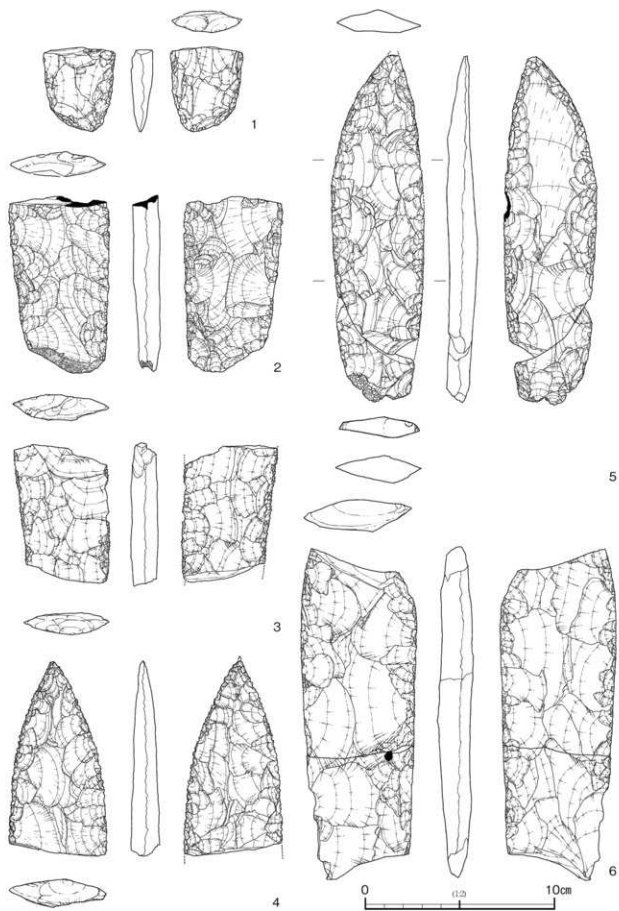


图78 07008 微高地 出土遺物 (3)



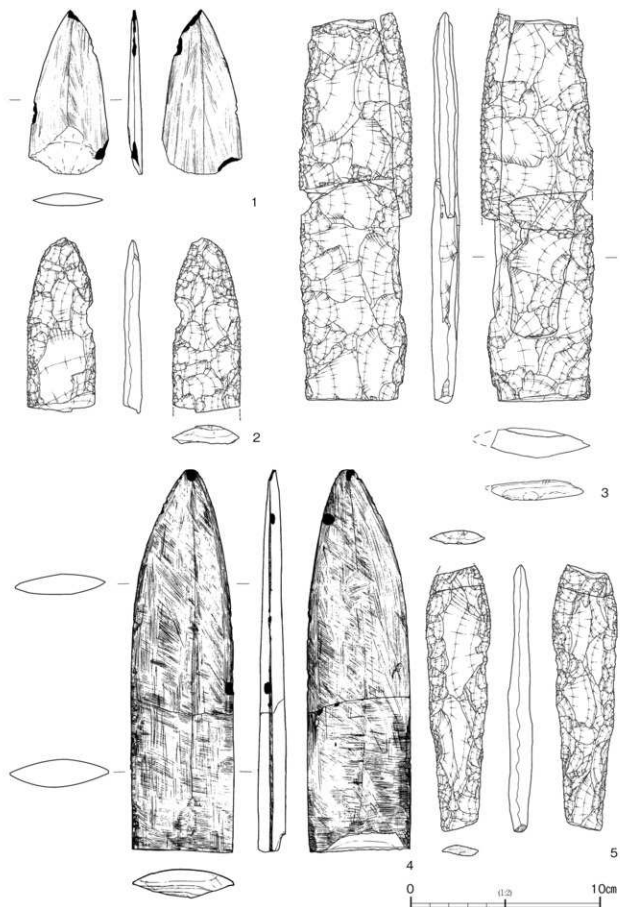


圖79 07008 微高地 出土遺物 (4)

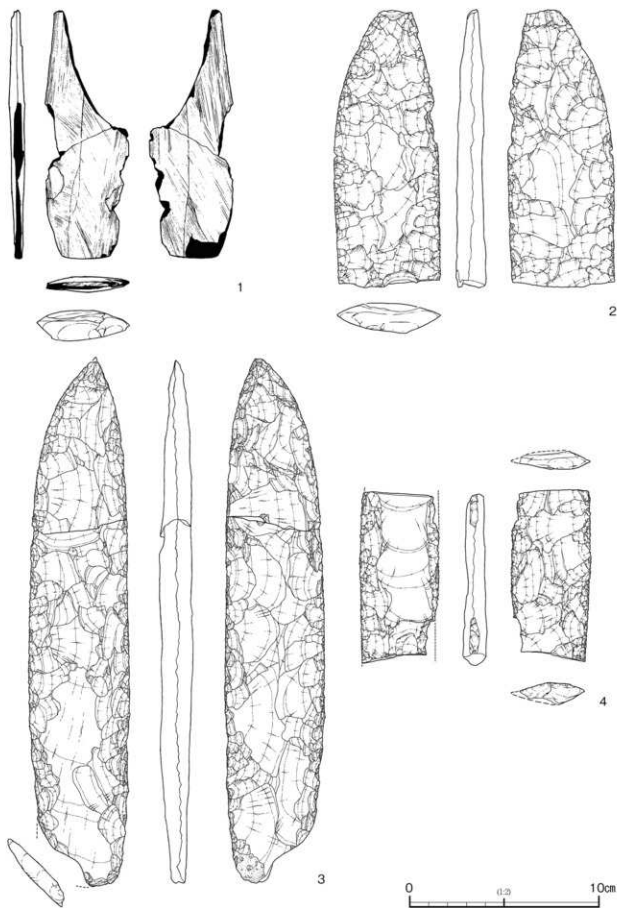
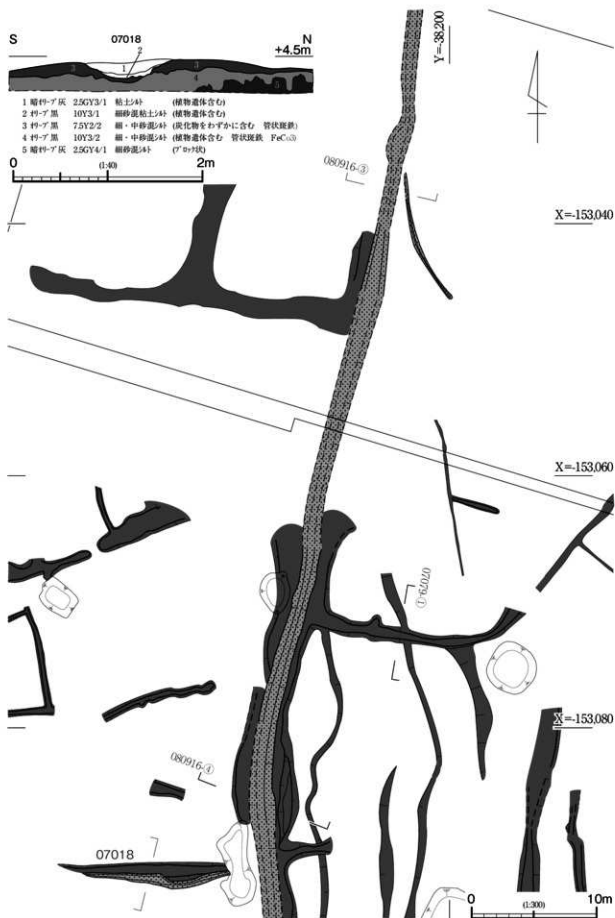


图80 07008微高地 出土遺物(5)



図B1 07018溝 平・断面

が挙げられる(図72、図版35-2・3)。石器群は07008微高地の南側肩部において、直径約2mの範囲を中心とする第7-2層中より出土した(図75・24④)。総点数33を数え、そのうち3点が磨製尖頭器、30点が打製尖頭器である(図76~80、図版244~249)。すべての石器は破損した状態でみつかり、一部に接合の可能なものも含まれている。製作途中の可能性を考慮し、現地調査では周辺の精査を行ったものの、剥片・砕片や他の遺物は検出されなかった。北東側の微高地中央付近において数個体分の土器一括が出土したとされるものの、やや新しい土器群であることから、遺構等の掘り残しの可能性が高い。石器群は、寺前直人氏による打製尖頭器の中形・大形・極大形、磨製尖頭器の極大形に分けられる。磨製尖頭器は鑄が明瞭に認められるものの、刃部に対して斜めに磨くA技法だけではなく、平行して磨くD技法も顕著である。図79-4の背側はほぼ切先まで円滑加工を行っており、形状は剣ではあるが機能的には片刃の短刀である。鈍ほどの重量はないため手持ちも可能とは思われるが、大形石器の着柄による使用も指摘されており、その場合は支や薙刀状の利器も考慮しなければならない。打製尖頭器は、中形に関しては刃部と基部を区別する図77-4のようなタイプと、直線的な図76-2のような2種類がみられるものの、大形・極大形は磨製と同様の直線的なタイプのみである。いずれも刃部が線対称に作り出されていない点でも磨製尖頭器に共通する。基部が丸く取められている点も同様である。多くの場合、磨製尖頭器の鑄に相当する稜線が片面には認められるものの、もう一方は稜線が繋がらずに平坦なままである。また、円滑加工が刃部と考えられる部位に施される等、実用品として使用されたのかを疑問視する要素もみつまっている。

これらの石器群が極めて狭い範囲に分布すること、すべて破損していること、図77-5・6や図79-3のように刃部に平行する剥離がみられること等は、この遺物の性格や用途を考える上で重要な情報を提示していると思われる。資料の観察および図化に協力した当センターの池田晋氏は、破損状況や周辺の石礫の分布等から、これらの尖頭器を使用して実際に戦闘を行った痕跡ではないかという指摘を行った。詳細は後日に期すが、弥生時代を「戦争」の開始期と呼ぶ時代背景からすると、自然な解釈である。しかし、周辺を大切な生産域に囲まれた当狭量地において、集団的な行為にまで及んだと考え難いのも事実である。水田域の周辺に石器が出土する例は東大阪・八尾市の池島・福万寺遺跡等にもあり、他の用途や転用の可能性も検討しなければならないことを同センター井上智博氏が指摘している。位置や周辺環境を最大に考慮すれば、木製農具の手入れ用、あるいはシカ・イノシシ・サル等の大型害獣の駆除・狩猟道具等の可能性も考えられる。一方、大半が折損品であることからすれば、石礫やそれ以外の材料としての転用も考慮しなければならない。これらはいずれも状況証拠のみであり、向後の成果に期待する。今回の出土例は、これらの尖頭器がもつ武器としての性格以外に異なる一面が存在した可能性や、象徴財として以外の価値感を有していた可能性を示す資料として貴重な事由と考えられる。

直上に第7-1層が堆積しているため、上面からの水田耕作に伴う攪拌が著しく、調査区の大半において畦畔等の遺構を検出することはできなかったものの、07008微高地以外はすべて水田域として利用されていたと推測する(図71)。第8面においてY=-38,210に存在した微高地は、水路のみを残して耕地化されたようである。全体的には第8面と同様の緩斜面地形であるが、要所に幅2m以上の大畦畔を設け、水田域を幾つかのエリアに分けている。そのうちの 하나가07011大畦畔であるが、第7-1面の大畦畔直下にやや位置の異なる段差を確認し、上面の形状を参考に畦畔を復元したものである。調査区東半の水田は、07008微高地と07011大畦畔の間にある高所側と、07011大畦畔以下の低所側の2つに大きく分かれていた。前者の水田エリアでは第7-1層からの攪拌が著しく、ほとんど水田遺構は検

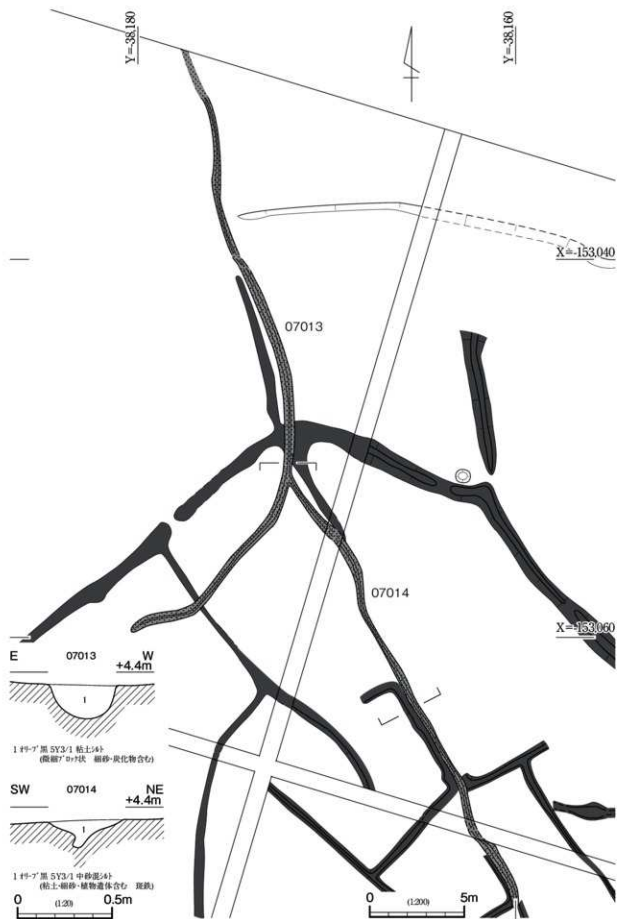


図82 07013・07014溝 平・断面

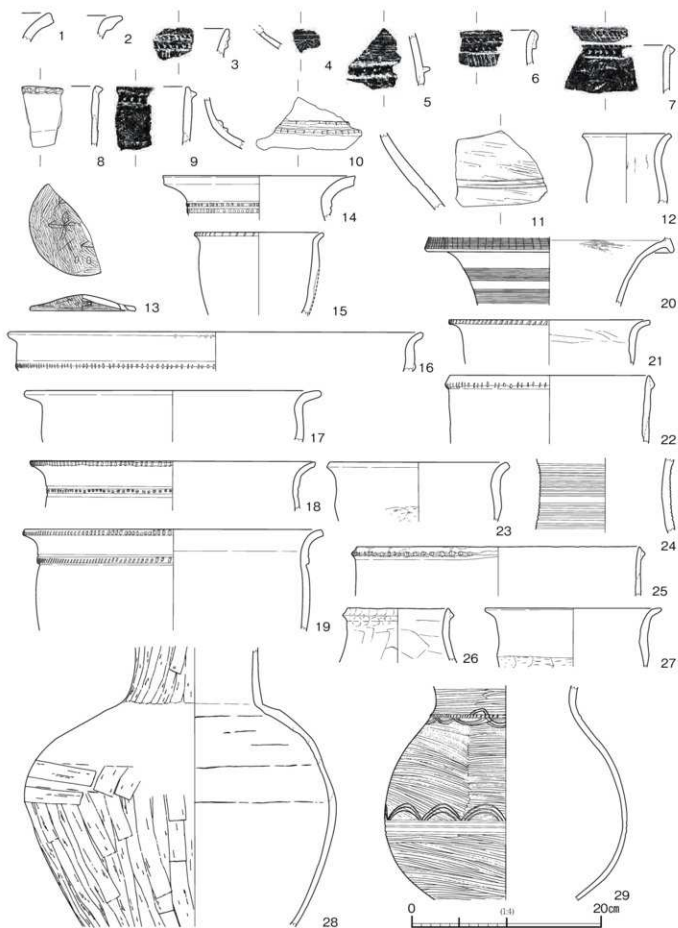


图83 第7—2层 出土遗物(1)

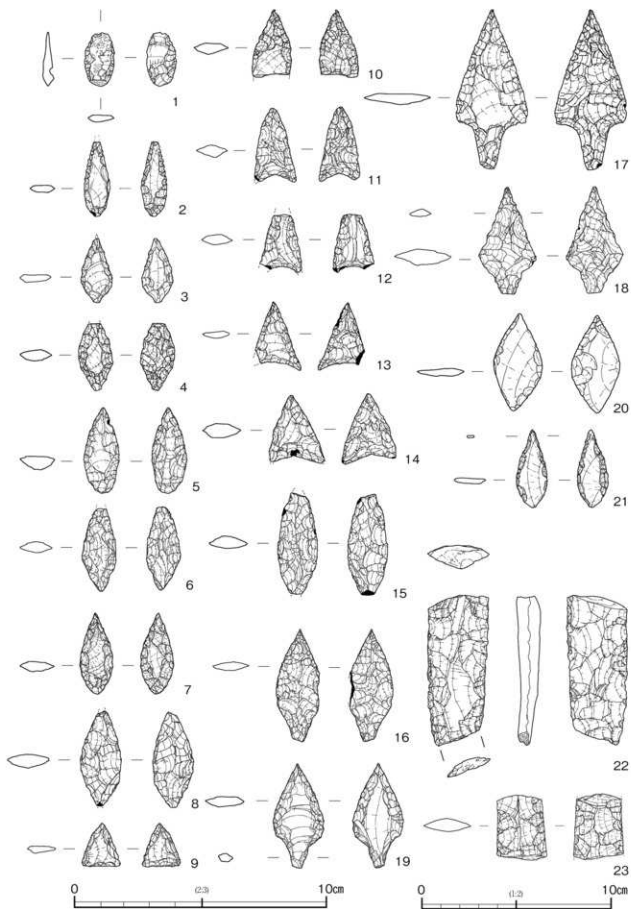


図84 第7-2層 出土遺物(2)

出されなかった。一方、07011大畦畔より南側の一段低いエリアでは、まとまった水田畦畔を確認することができた。水田の詳細については、類似する第7-1面にて説明を行う。

調査区の中央、Y=-38,200付近において080916・07018溝を検出した(図81)。080916溝は第8 a面からつづく遺構で、微高地形の頂部に開削された南北方向の溝である。埋没するまでの間に何度も改修が行われたようで、当該期の正確な規模は不明であるが、溝両側の堤内に残された窪みの形状から幅1.5~2.0mと推測する(図59)。調査区の西半は第8面において南北方向の起伏地形であるとしたが、本遺構面でも踏襲されており、北流する幹線水路とそこから分岐する支線の組み合わせが形成され

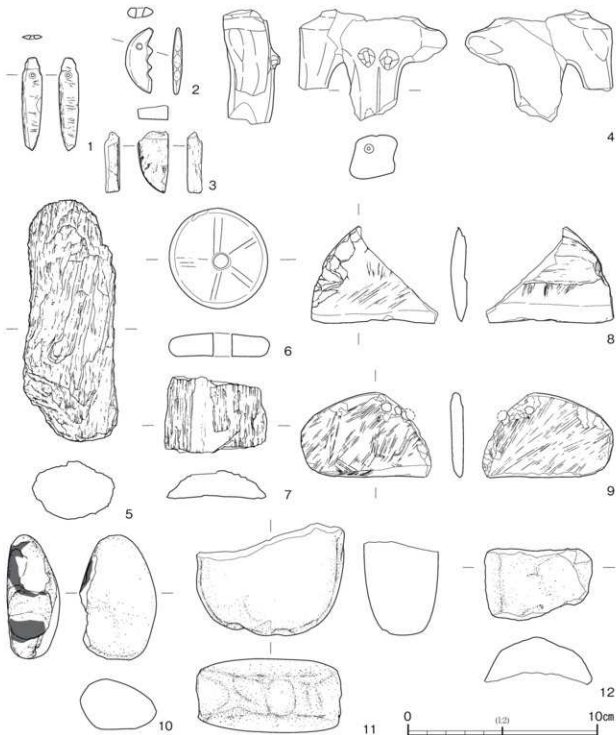


図85 第7-2層 出土遺物(3)



ている。07018溝は080916溝の西側に位置する東西方向の溝である(図81)。幅約0.6 m、深さ約10cmを測り、埋土として第7-1層が堆積する。本溝は第7-1面も継続して使用されていたことが明らかであり、本遺構面では水田面の低い北側に堤を設けていたものが、上面では両側に設置されるようになる。分岐地点は後世の破壊により消失するものの、本溝は080916溝からの分流路と考えられる。

水田畦畔を切断するように、第7-1層を埋土とする07013・07014溝を検出した(図82)。地形的には北高南低にあることから、水田面の中を南側の緩い谷地形に向かって流れた流路が残した痕跡と考えられる。

本遺構面では、遺構に伴う出土遺物は皆無であり、第7-2層から出土した遺物を図示した(図83-86、図版250-258)。土器等の大型遺物のほとんどは調査区北東の07008微高地の盛土に伴うものであり、溝の掘削等により下層のものが混入した例を多く見受ける。縄文時代晩期の遺物として明らかなのは図83-3・5-9・22・25・26・28であり、6の滋賀里Ⅳ式、28の船橋式以外は長原式に属すると思われる。上記以外は第Ⅰ様式土器であり、14・24など最も新しいものは前期新段階に比定できる。13は紐孔のある蓋で、外面に木葉文等の線画を描く。20は第Ⅲ様式の壺口縁片であり、上層から混入した可能性が高い。23・27は搬入品であり、紀伊産と推測される。図84の石鍬は水田域の耕土中から出土したものである。凹基・平基・凸基・有茎と一通りの型式が揃っており、17の全長6.4cm、重さ6.2gを最大に、他は2g前後が最も多い。第7-1層を含め、大型鍬が少ないことから、小型動物の狩猟用と思われる。図85-1は磨製石鍬形の垂飾と考える。石英片岩製のためであろうか、刃部が脆く、実用品ではないと判断した。2は砂質ホルンフェルス製の獣形勾玉である。府下の出土例は東大阪市鬼虎川遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡、四条暖市城遺跡の数例に限られる。4は土偶胸部片である。胸部に粘土を貼り付けて乳房・腕を表現し、腹部には沈線による正中線を示す。図55と同様、生駒西麓産胎土による台式土偶長原タイプに属する。5・7は紅崖石片岩製の石棒片と考えられる。6は土製紡錘車であり、上面に線刻画が施されている。石製品は、8・9の石庖丁の他に、叩石・摺石・石皿等、いずれも使用痕の残る石器が出土している。

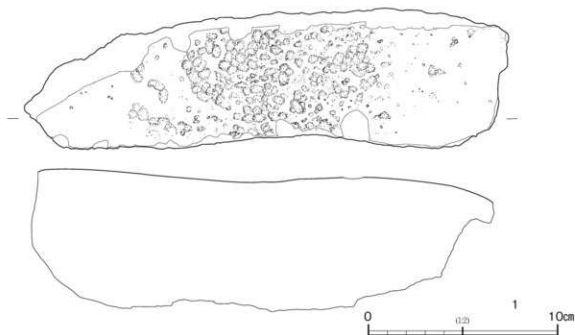


図86 第7-2層 出土遺物(4)

Y=38,050

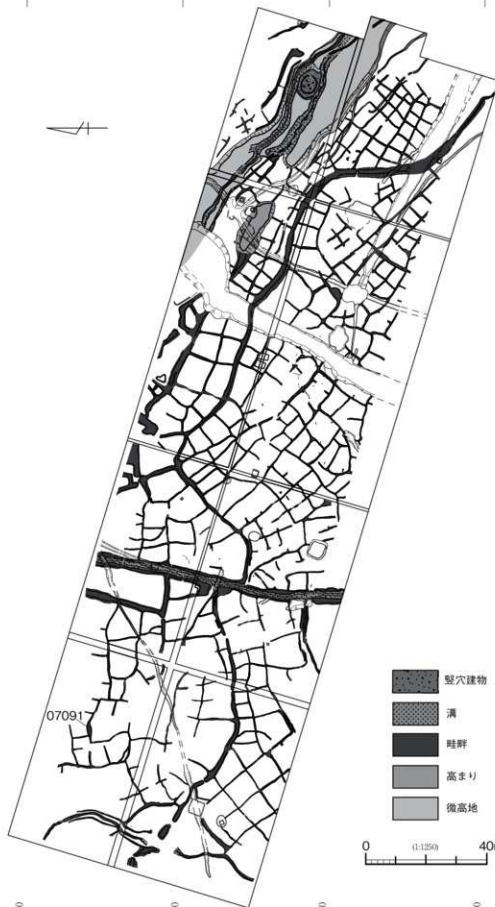
Y=38,100

Y=38,150

Y=38,200

Y=38,250

Y=38,300



X=153,000

X=153,050

X=153,100

X=153,150

図87 第7-1面 遺構分布



### 3. 第7-1面の遺構と遺物

第7-1層は調査区の全体に広がっていることが確認され、そのほとんどが耕土として利用されており、土壌化も極めて顕著である。また、層の上部を氾濫堆積物である第6-2層が覆っているため、遺構の残存状態が非常に良好である。遺構としては、高まり・溝・畦畔・堅穴建物・井戸・土坑等があげられる。第7-1面は下面と同様、全体的には第8面の地形を踏襲した形である。ただし、水田開発がさらに進んだため、処々にその片鱗が見受けられる。最たるものは調査区北東の微高地であり、地形の改変により新たな土地利用や遺構が現れる。その他の水田域については、水田区画の整備が進んだと思われ、緩斜面は水利を考慮した柵田状に変化している。

調査区のほぼ全域において水田遺構を確認することができた(図87)。調査区の周縁において空白となっているものは、該当する遺構面の平面形が一致しないために採用を見送った地区である。第7-1層耕作土の存在は確認されていることから、おそらく狭量な調査区であったために地形変化が読み取れず、足跡や流路等の紛い物と混同してしまったのであろう。上部を自然堆積物に覆われることにより遺構の残存状態が良好であるとは言っても、水田畦畔の場合、地形の変化を捉えなければ遺構検出は決して容易ではない。特に水田畦畔と水田面との比高差がほとんどみられない場合は、遺構面を精査する方向次第であると言っても過言ではない。したがって遺構面の検出としては、予めトレンチ調査を行うことにより凡その地形を把握し、水田遺構の存在する可能性が高い場所では必ず耕土の凸部に高さを揃え、まずは覆土を残しながら地形の検出を行うという段取りが必要となる。また、水田遺構では水回りが非常に重要であり、必ず上から下へと流れるしかないことから、わずかでも高低差がつくよう配されている。低い位置から水田の段差を認知することは非常に困難であり、水田畦畔の検出は必ず地形の上方から下方へと行わなければならないことを痛感した。

調査区の北東部は、ほぼ全面が水田域となる第7-1面の中では異質な景観を示す(図88)。下面における07008微高地は20m前後の等幅でのびていたものが、本遺構面では部分的に拡幅したり、削り取って平坦化したり等と、大規模な土木工事を行っている。自然地形をそのまま利用した第7-2面の微高地とは、第7-1面における同地形に対する人為の程度が異なり、形状そのものも大きく変化することから、同遺構を区別して07055高まりと呼称することにした。

これらの遺構について再整理すると、第8層の堆積により流路が埋没した後に残った自然地形を、ヒトが利用・加工する過程で発達したものが07008微高地や07055高まりである。その途中段階において、溝がどのように開削・放棄・埋没されたのかを見極め、順序立てるかという事を本遺構に関する整理の第一義として作業を行ってきた。現地での調査では、07055高まりは上面を通るいくつかの溝によって区分され、それぞれに異なる遺構名が設定されていた。下面へと調査を進めるにしたがい、第8面の微高地からの変遷過程が明らかとなり、同一の微高地形として捉えるべきであると考え、再設定するに至ったのである。一方、微高地を分割する発端となった溝群についても、遺構面毎の形状を整理し、消長を明らかにしようとした。しかし、本調査区の溝については、初現・機能・廃絶・埋没の複数時期(遺構面)に及ぶものが多数存在する。特にこの微高地上では新たな溝を掘削しても古い溝がそのまま残され、自然に埋没するまで放置されたと思われる状況が看取される。そこで微高地・高まりの断面を検討しながら、まず主要な溝の帰属面と変遷を整理した。断面図上の所見を基に各段階の平面にそれぞれの溝の形状を貼り込み、整合性を確認したものが遺構面毎に図示した遺構配置図である。

07055高まりの北側は北東に向かって緩やかに下降する地形であり、部分的ではあるものの、等高線

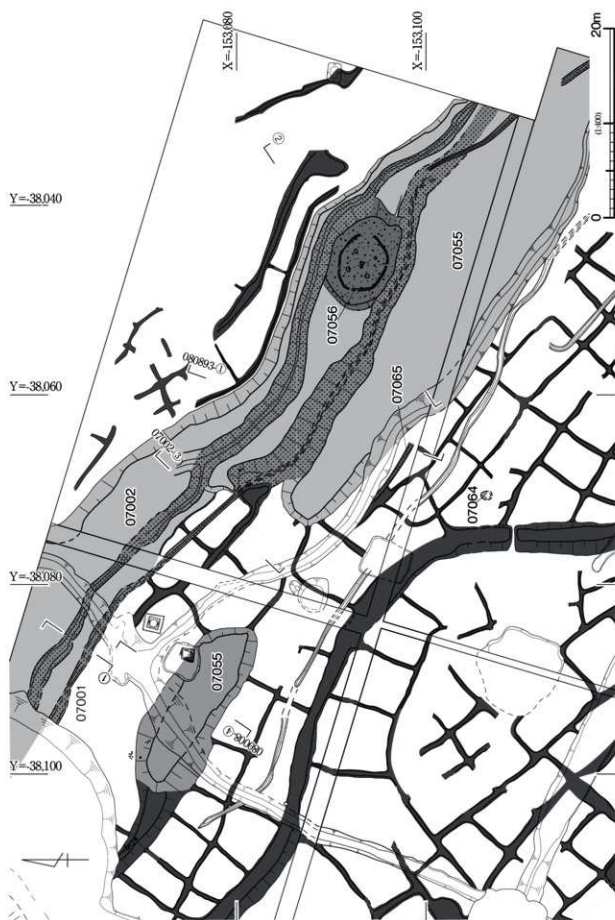


図88 調査区東 07055 高まり周辺遺構平面

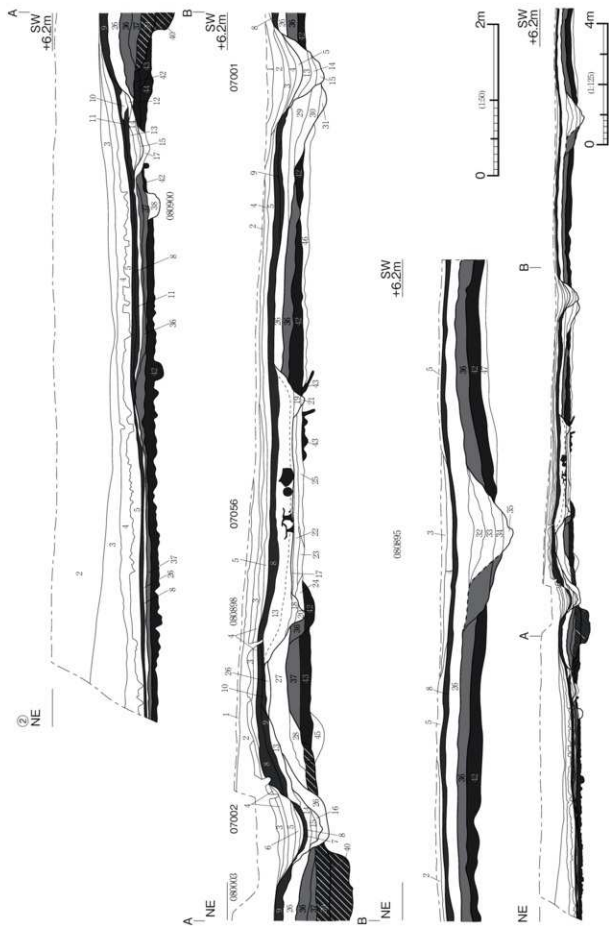


图89 07002、07056竖穴建物 断面(1)

1 灰白	25Y6/1	小礫混粗砂		22 灰+灰	5GY6/1	小礫混砂	
1		不明		23 暗青灰	5BG4/1	粗砂混砂	
2 灰白	2.5Y8/2	細砂～小礫		24 緑緑灰	10G4/1	粗砂混砂	
2		不明		25 灰白	5GY8/1	砂	
3 灰白	10Y7/1	細砂～中砂		26 灰	7.5Y5/1	中砂～細砂混砂	
3 明灰+灰	5GY7/1	粘土	(炭化物含む)	26 灰	5Y6/1	微砂混粘土	
3 灰	5Y6/1	粘土		26 灰+灰	5GY6/1	微砂混砂	
3 灰白	10Y7/2	粘土	(微砂含む)	26 灰	N4/	細砂混砂	
4 緑灰	5G6/1	粘土		26 灰	N4/	小礫混砂	(小礫多く含む)
4 灰	10Y6/1	粘土		26 灰	7.5Y5/1	小礫混砂	
4 緑灰	5G5/1	粗砂混粘土	(炭化物多く含む)	26 青灰	5B6/1	微砂混砂	
4 灰+灰	5Y6/2	粗砂混粘土		27 灰+灰	2.5GY5/1	細砂～微砂混粘土	
4 灰	10Y6/1	粘土	(炭化物含む)	28 灰+灰	5GY5/1	砂混微砂	
5 灰+灰	5GY6/1	粘土	(植物遺体、炭化物多く含む)	29 灰白	2.5GY8/1	小礫混砂	
5 灰	10Y5/1	微砂混粘土	(炭化物多く含む)	30 灰+灰	5GY6/1	小礫混砂	(FeCO <sub>3</sub> )
5 緑灰	10G5/1	細砂混砂		31 明緑灰	7.5GY7/1	砂混小礫	
5 灰	7.5Y6/1	小礫混粘土		32 暗緑灰	10GY4/1	小礫混砂	
5 注記なし	注記なし	微砂混砂		33 灰	7.5Y4/1	砂混小礫	
6 灰	5Y5/1	微砂混粘土	(炭化物含む)	34 灰+灰	10Y5/2	小礫混粘土	
7 灰	5Y6/1	粘土	(炭化物多く含む)	35 灰+灰	5GY5/1	小礫混粘土	
8 明灰+灰	5GY7/1	粗砂混粘土		36 明灰+灰	5GY7/1	粘土	
8 灰+灰	2.5GY6/1	粗砂混粘土		36 灰+灰	2.5GY6/1	粗砂混砂	
8 緑灰	10G5/1	中砂混粘土		36 暗緑灰	10G4/1	粗砂混砂	
8 灰+灰	5GY5/1	微砂混砂		26 灰+灰	2.5GY4/1	小礫混砂	
8 灰	7.5Y5/1	中砂～粗砂混砂		26 灰+灰	2.5GY5/1	小礫混中砂～微砂	
9 緑灰	10G6/1	微砂混粘土	(小礫わずかに含む)	26 灰	7.5Y5/1	砂混小礫	(小礫多く含む)
9 暗青灰	5BG4/1	微砂混砂		37 灰+灰	2.5GY6/1	微砂混砂	
9 灰	10Y5/1	微砂混粘土	(FeCO <sub>3</sub> あり 炭化物わずかに含む)	37 灰	10Y6/1	粗砂混砂	(細砂～粗砂を多く含む)
10 灰	N6/	微砂混砂		37 緑灰	5G6/1	微砂混砂	
10 灰+灰	5GY5/1	微砂混粘土		37 灰+灰	2.5GY6/1	粗砂混砂	
11 灰	N5/	微砂混粘土	(粗砂～中砂多く含む 炭わずかに含む)	38 灰	N6/	粗砂混砂	
12 灰	10Y6/1	微砂混砂		39 緑灰	7.5GY6/1	微砂混粘土	(炭含む Fe)
13 灰白	10Y7/2	微砂混砂		40 灰+灰	5GY5/1	微砂	
13 灰+灰	5Y6/2	微砂混砂		41 灰	7.5Y5/1	微砂混粘土	
13 緑灰	10GY5/1	小礫混砂	(炭多く含む)	42 灰+灰	5GY5/1	粗砂混砂	
13 灰黄	2.5Y5/1	小礫混砂		42 灰+灰	5GY6/1	微砂混砂	
14 灰白	7.5Y7/2	細砂混砂		42 青灰	10G6/1	粗砂混砂	
14 灰+灰	2.5GY6/1	微砂混砂		42 灰	10Y5/1	微砂混砂	
14 灰白	10Y7/1	小礫混粘土		42 灰	10Y5/1	砂混小礫	
15 灰	7.5Y6/1	粘土		42 灰	5Y5/1	砂混小礫	
15 明灰+灰	5GY7/1	粘土		42 灰+灰	2.5GY5/1	砂混小礫	
15 灰白	2.5Y7/1	砂混小礫		43 灰+灰	5GY6/1	砂	
16 灰	10Y6/1	微砂混砂		43 灰	N5/	粗砂混粘土	
17 灰白	5Y7/2	微砂～砂		43 青灰	5PB5/1	砂	
18 灰	5Y5/1	微砂混粘土		44 暗青灰	5BG3/1	粘土	
19 灰	5Y6/1	小礫混砂		45 緑灰	5G5/1	粘土	
20 灰白	10Y7/1	粘土		46 緑灰	7.5GY6/1	微砂	
21 灰	10Y5/1	微砂混粘土		47 灰白	2.5GY8/1	細砂～中砂	

図90 07002溝、07056竪穴建物 断面(2)

に沿った形で水田畦畔を設けた状態を確認した(図88)。高まりの北側裾部ではわずかな幅をもって水田畦畔が並行する様子を看取できる。高まり裾部を水路として利用するものであるが、このような水回りを行う場所は本調査区内では見当たらない。

07055高まりは、Y = -38.080付近より西側において高まりの一部を削平して水田化を行っている。しかし、X = -153.075、Y = -38.093付近の微高地の一部は故意に削り残されており、幅約7.0m、全長約20mの範囲に高まりが形成される(図88)。標高はT.P.+5.85mを測り、水田面との比高差は50～70cmである。周辺の水田面の耕土に比して高まり上の第7-1層が非常に厚いことから、上記の高まりの削平に伴う排土を利用し、浮島状の高まりを作出したものと推測される(図24④)。当地点の盛土は、これまでのような微高地が高地化した高まりとは規模や形態がまったく異なっており、東側に位置する従来からの高まりよりも標高は一段と高くなっている。下面では尖頭器等の集積がみられたものの、本遺構面に伴う明確な遺構や遺物は高まり上からはみつからない。そのような中では、図76にみる土器群がやや新しい型式であり、本遺構面の時代観にも近いことから、共存する遺物であった可能性は高いと考えられる。07055高まりにつづく07073畦畔上でも遺物がまとまって出土しているものの、図

化には至らなかった。

既存の微高地が変化した07055高まりは、上記のとおり一部を水田化したことにより、東西で形状が大きく異なってしまう。Y = -38.070より西側では南半分を削平されたために幅約10mの細長い堤状となっており、その上面を07002溝、南側裾部を07001溝が通る。一方、東側では第7-1面における盛土等の地形改変はほとんど行われておらず、下面において大規模な造成がみられた北側肩口でも溝の改修として底部の掘削が行われる程度である(図89)。おそらく、07055高まりに関する灌漑用の水利施設は、この時点でその仕組みがほぼ完成されていたものと思われる。第8面から残っていた微高地上面の南側を通る080895溝は本遺構面では完全に埋没しており、高まりとして平坦化されている。この他、北側の07001溝と07002溝の間では一段高い円形の盛土を検出した(図88)。詳細は後述するが、盛土そのものは南北両側の溝に伴うものであり、竪穴建物に転用したと考えられる。このような建物の存在は、07055高まりの土地利用を考える上で重要な示唆を与えている。

07001溝は07055高まり東半部のほぼ中央を西流し、同高まり西半部の南側裾部に達する(図88)。本遺構と第6-2面の07055高まり上から出土した遺物には接合するものが多いことから、当初、両遺構は並行関係にあると考えられた。しかし、遺構埋土の再検討により、それらは前述のとおり07001溝が機能しなくなった後も自然に放置されていたため、溝の痕跡として残った谷地形に高まり上の遺物が転落したものと判断するに至った。本遺構面における07001溝は、遺構内の埋積が進行するものの、部分的な改修を行うことにより高まりの南側に広がる水田域に対する給水用施設として機能していたと考える。なお、07001溝の図示では、すべてにおいて遺構上端から塗り潰しを行っているが、これは対象遺構を明示するためのものであり、水面を示すものではない。西側の水田面にみられる07001溝の延長部分は、激しい流水の際に生じた下刻痕跡と考えられ、水田面への引水時にはこれと同程度の水量規模があったと推測する(図91)。微高地上を延伸する下面では、水路として常に滞水していたと考える。しかし、本遺構面では高まり西半部の水田化により寸断され、水路としての機能を果たさなくなったものの、代わりに新しくできた水田域への水口として再利用することになったと推測する。

07001溝は上記のように水路から水口へと変化するのに対し、これの北側に並行する07002溝では、溝内の再掘削と堤の増強が行われており、水路として管理と整備が続けられたと考えられる。07002溝は、第7-2面では微高地北側の水田域のみに対応する水路であったが、前述のように微高地西側の一部を水田化したことで07001溝が幹線水路として機能しなくなったため、07002溝を07055高まり上における灌漑用の基幹水路に昇格させたものと推測する。先述した07055高まりの北側裾部における水路状遺構も、07002溝が基幹水路へと変化したことにより、高まり北側の水田域における水利方法を変更した結果、新たに設置した灌漑用水路であったのかもしれない。図面上では、07001溝と07002溝が並行して機能していたかのように見えるものの、実際はそれぞれに異なる役割が与えられ、さらに土地利用の変化や再利用等によって別の用途が変更されたのである。このように、当時から、すでに水利の仕組みを状況に応じて柔軟に変更させていたことが判明した点は重要である。

このように、調査区北東部の07055高まりに関連する遺構は、当地区において水田耕作を行うための水利上の重要な遺構であったことがわかる。しかし、本遺構面において、これらの遺構から出土した遺物は、07056竪穴建物を除くと極めて僅かである(図92、図版258・259)。本調査区における他の地区についても、ほとんどが水田域であることから、耕作土に含まれる遺物は非常に少ない。これは他の遺跡においても通有の現象ではあるが、遺構面の時期を特定する上で困難なことである。07055高まり

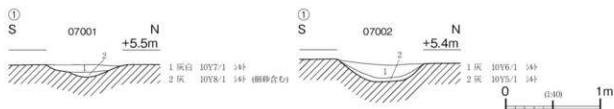


図91 07001・07002溝 断面

が急峻な地形となったため、上面の土壌化層と直下の耕土層が連続しない状態にあり、厳密には整合性を確認できない(図89)。これについては、上下の層序から対応関係を推測したものであり、必ずしも水田面と高まりが同時進行していなかった可能性を孕んでいる。その上ではあるが、本調査区では時期比定の参考のためにAMS年代測定を実施し、第7-1層が紀元前50年前後、弥生時代中期後半頃という結果を得ている。第8面から第7面への転換期を弥生時代前期末から中期初頭頃とすると、07001溝・07091畦畔から出土した第Ⅱ様式土器は第7層形成途中の遺物と考えられる。他の遺構や包含層からも弥生時代中期に比定される遺物が出土していることから、その当時、本地区に人が介入したことはほぼ間違いのないと思われる。対応する遺構面や遺構を明確に比定することはできないものの、本書では第7面を総じて弥生時代中期頃の所産とする。図92-5は石棒で、紅麻石角閃石英片岩を石材としており、図69・85と同種である。07055高まりの盛土中から出土したことから、下層遺物を巻き上げたものと思われる。

07056竪穴建物は07055高まり上の北側、07001溝と07002溝の間に位置する(図88、図版44・45)。

07056竪穴建物と両溝との間隔は1~2mを測り、周辺の高まり上面より15~20cmの比高差をもつ堤状を呈する。断面観察によると、第7-2面において07001・07002溝の堤として構築されたものであり、本遺構面に対応する人為痕跡は認められない(図93)。しかし、溝の形状とは無関係に建物の西側へと堤状の段差が巡る状況が確認されたことから、溝の肩口が盛土されて高くなった場所に竪穴建物を構築するための縦坑を掘削し、排土を東西の不足部分に盛土して堤を巡らせたと推測するに至った。ただし、それらを検証する材料は残されていないため、本例を八尾市八尾南遺跡と同等の周堤を持つ竪穴建物とするには注意が必要であり、本書では可能性を指摘するまでに留めておく。07056竪穴建物は内法上端で最大径約6.0m、最小径約5.4mを測り、平面的には東西に長い楕円形を呈する。

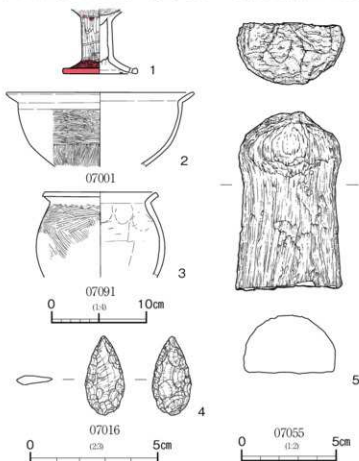


図92 07001溝、07016ピット、07091畦畔、07055高まり出土遺物



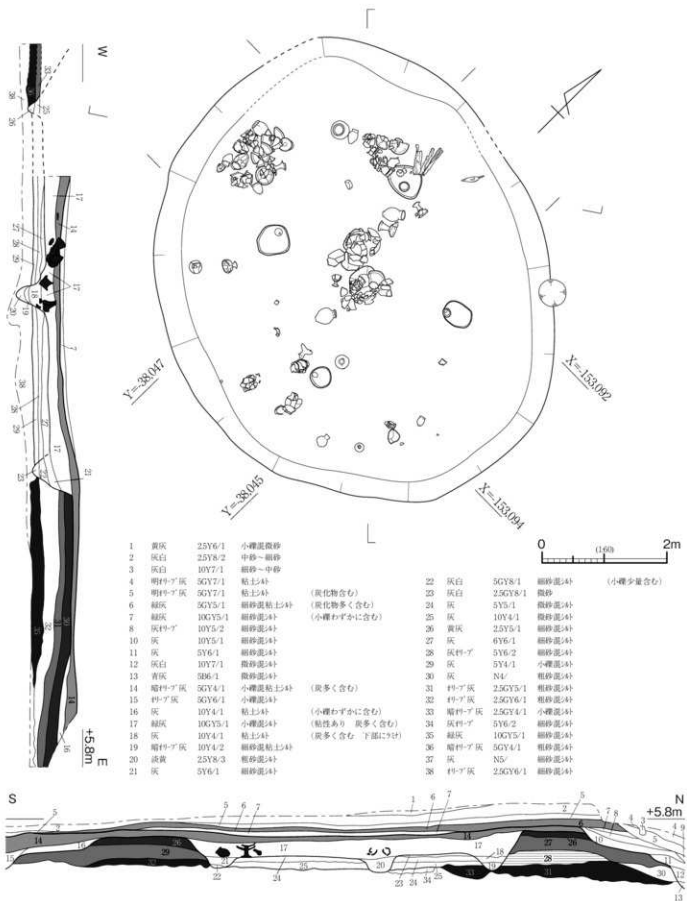


図93 07056 竪穴建物 平・断面、遺物出土状況

堤状施設と最終床面との比高差は25～35cmであり、壁構内寸を床面とした場合、東西径約5.35m、南北径約4.25mを測り、床面積は約17.85㎡、約5.36坪となる。掘り込み面までの深さは40～50cmを測り、最終床面までに3層を確認したものの、床面として区別するほどではなかった。床面の土質は灰色を帯びた細砂混じりシルトであり、その上部に緑灰色の小礫混じりシルトが堆積する。埋土の上を第6～2層が一様に堆積することから、07056竪穴建物を第7～1面に帰属する遺構とした(図89)。

床面と法面の境界付近には幅約20cm、深さ約20cmの壁溝が巡る(図94)。最終床面検出時は床面と壁溝埋土の判別が困難であり、掘り込み面にて確認したため、法形状とは一致していない。建物東側の壁溝の一部が途切れることから、ここに出入口を設定した可能性が高いものの、出入口の前方が狭く、斜面地形のために高低差があり、通常の使用では不向きに感じられる。柱穴についても壁溝と同様、最終床面において柱痕を検出したものの、掘方を確認するまでに至らなかったため、掘り込み面直上にて精

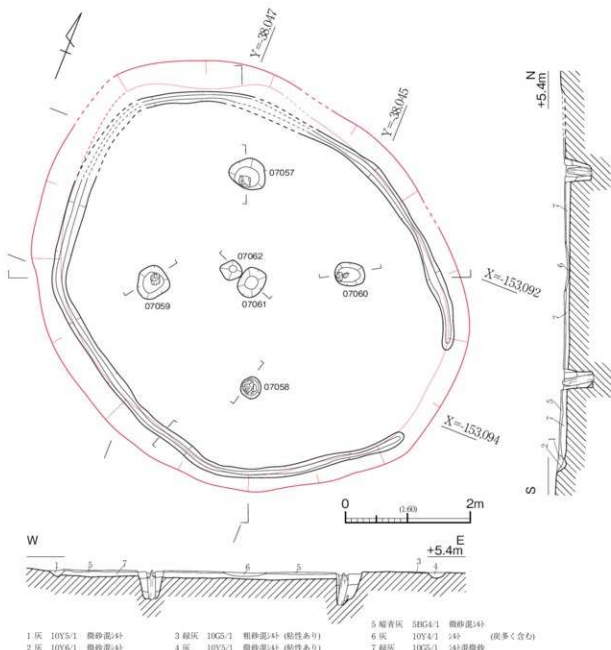


図94 07056竪穴建物 07057～07060柱穴、07061・07062炉 平・断面

査を行った。柱穴は床面の中心から均等な位置に計4基を検出し、それぞれに柱根が残存する。柱間は心寸法で約1.8mを測り、真北に対して東に約21°振っている。柱の配置に関しては、柱間と壁溝の寸断部が一致することから、先述の出入口についての違和感は認められない。床面の中央には炭を多く含む小穴を2基検出し、炉跡と考える。

07057～07060柱穴は不定形な円形を呈し、直径40～47cmを測る(図95)。柱根底部の標高はいずれもT.P.+4.75m±2cmと揃っており、柱穴の深さが同一になるよう掘削されたことはもとより、ほぼ同じ長さの柱材を用意し、天端が同じ高さに揃うよう打ち込まれたり、掘り足したりしたものと解釈できる。また、07058～07060柱穴については、柱材の脇や底から板状の木片が出土した(図95・101、図版270・271)。おそらく柱材のぐらつきや沈下を防ぐために噛ませたものと思われる。柱材と同様の削り痕がみられることから、構造材を組立てる際に不要となった端切れ片等を再利用したものであろう。柱根の樹種はいずれもコナラ亜属であり、芯持ち材を用いる。いずれも上部は腐朽により尖形化しており、図101-5以外の外面も弱い稜線が残る程度で加工痕は不明瞭である。5の外面および底面には整形時の削り痕が明瞭に残存し、底面は中心から外、外面は下から上へと加工される様子を取査する。断

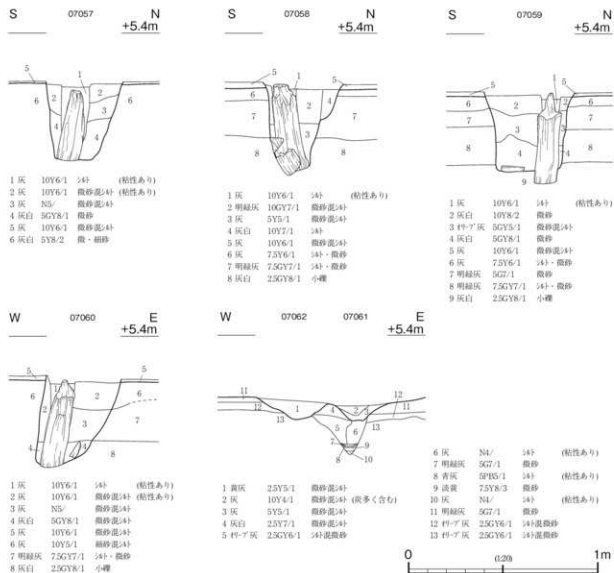


図95 07057～07060柱穴、07061・07062炉 断面

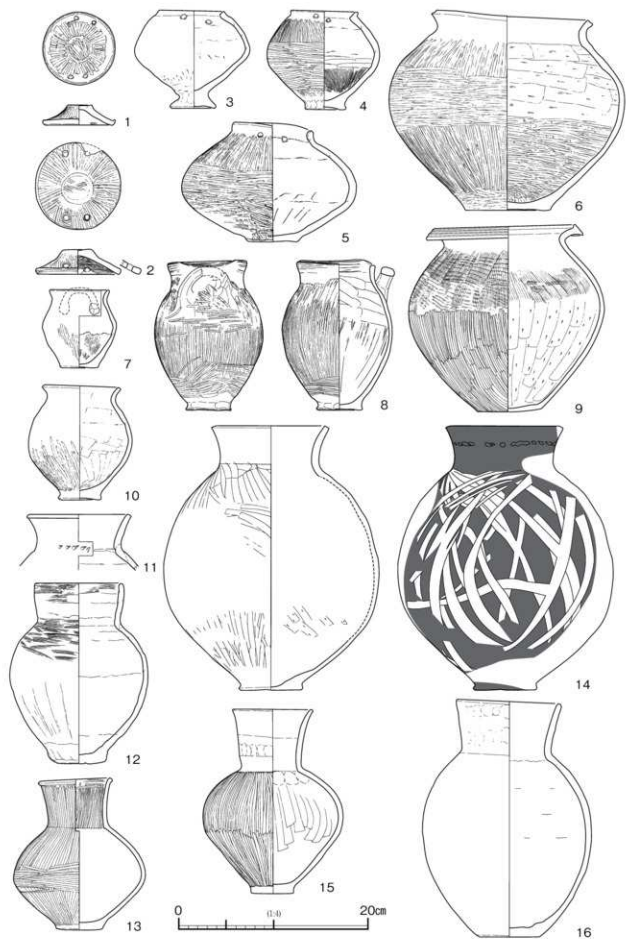


图96 07056 竖穴建物 出土遗物 (1)

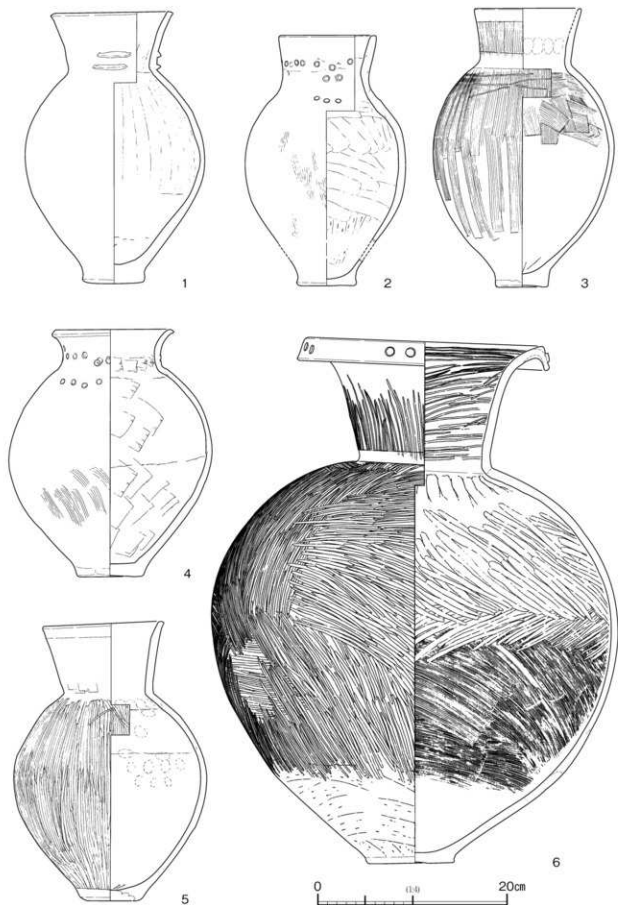


图97 07056 竖穴建物 出土遺物 (2)



图98 07056 鬲穴建物 出土遗物 (3)

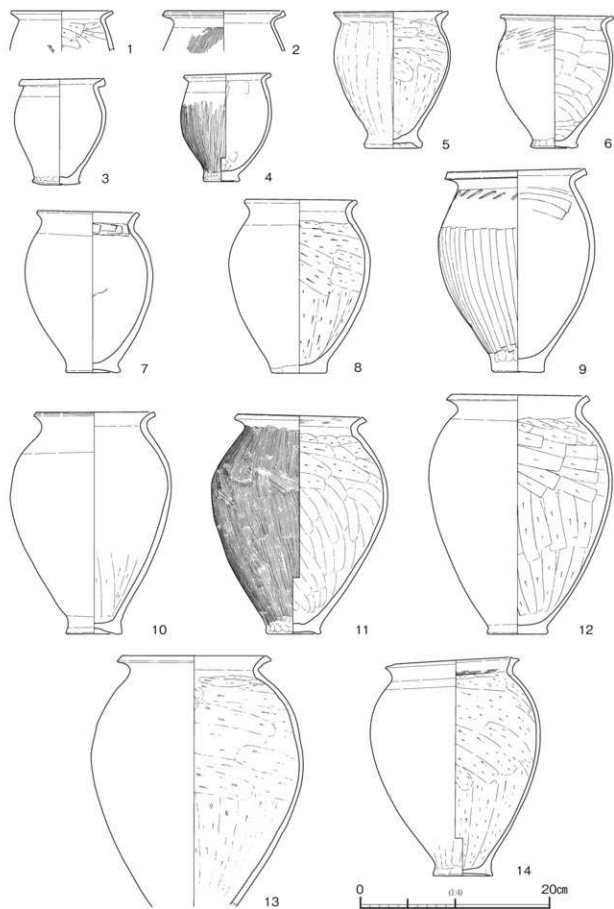


图99 07056 竖穴建物 出土遺物 (4)

面は八角形を呈し、おそらくその他の材も同様に加工されたものと推測する。

07061・07062炉跡は大小2基の小穴が繋がった状態で検出した(図94・95)。直径約35cmの07061炉跡内には炭が多量に含まれる一方、直径約25cmの07062炉跡ではほとんど検知されなかった。炭を多く含む07061炉跡の下面には、地面からの湿気を防止するためであろうか、予掘りの跡がみられる。

07056竪穴建物の特筆すべき点は、ほぼ現位置を保った状態のまま床面直上から大量の遺物が出土したことである(図93)。ほとんどの土器は完形に復元が可能であり、中には正置した状態のものもみられる。土器の器種構成としては、壺15点、無頸壺3点、蓋2点、水差2点、鉢2点、碗形高杯5点、高杯8点、器台1点、甕14点であり、総数は52点を数える(図96～99、図版259～269)。個々の詳細は付表の遺物観察表を参照していただきたい。図96～9は口縁に擬凹線を施す讃岐産の搬入品である。図96-14は土器の外面に付着した煤に幾条もの間隙があり、被籠痕跡の残る壺である。口縁端部の下約2cmには結目状に煤の凝固した痕があり、体部の条痕が肩部に集束することから、口縁部に掛けた輪状の燃紐に平らな樹皮か紐を結束したと考えられる。体部の紐痕が不規則なため、籠状ではなく紐束に包むような形態も考えられる。図97-1は頭部の1カ所に約3.5cm長の粘土紐を2条貼り付けた壺である。図97-2～5は肩部の1カ所に記号文を施す壺で、2・4は竹管文、3・6は篋描きである。図98-4

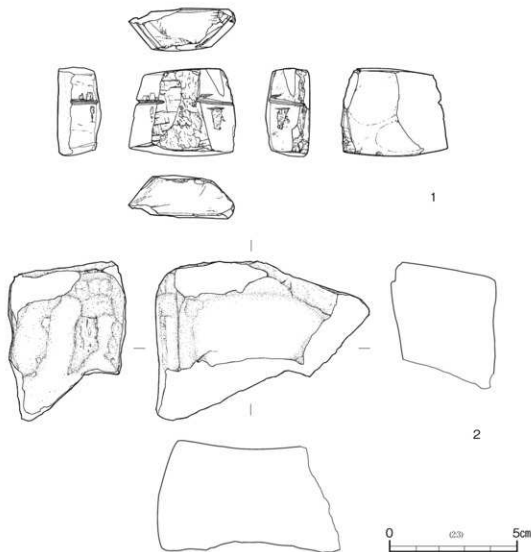


図100 07056竪穴建物 出土遺物(5)



・15は赤彩を施した高杯である。口縁端部を塗り、杯部外面に円形文を巡らせる点は同様であるが、4は脚柱部に帯状と、裾部に円形文を施す。15は杯部内側に帯状、脚裾部に帯状と放射状、見込みを赤彩する。後者については赤色顔料の蛍光X線分析を行ったところ、ベンガラであることが判明した。

土器以外には石製品と木質遺物、赤色塊が出土した(図100、図版269)。1は緑灰色の粘板岩製不明品であり、断面台形の板状を呈する。上面を欠損するものの、他の面はいずれも平滑に削られており、台形側面の両側中央には幅約2.5mmで断面V字形の擦切痕がみられる。2は細粒砂岩製であり、おそらく台石(石皿)の破片と考えられる。木質遺物は腐朽が著しく、判別不能のために図化を行っていない。赤色塊は2地点から出土し、上記と同様に成分分析を行った結果、いずれもベンガラであるとわかった。

出土した土器は一般的な用途別に分けると、貯蔵具が36%、食膳具が36%、煮炊具が28%という構成比になる。この分類にしたがって出土状況を色分けし、各遺物の配置を示したものが図102である。これによると、前述において建物の出入口と考えた東側には土器が圧倒的に少ない。中央の炉の周辺には最大の壺である図97-6をはじめとする貯蔵具が集中し、これを挟む南北両側に土器の空白部分が認

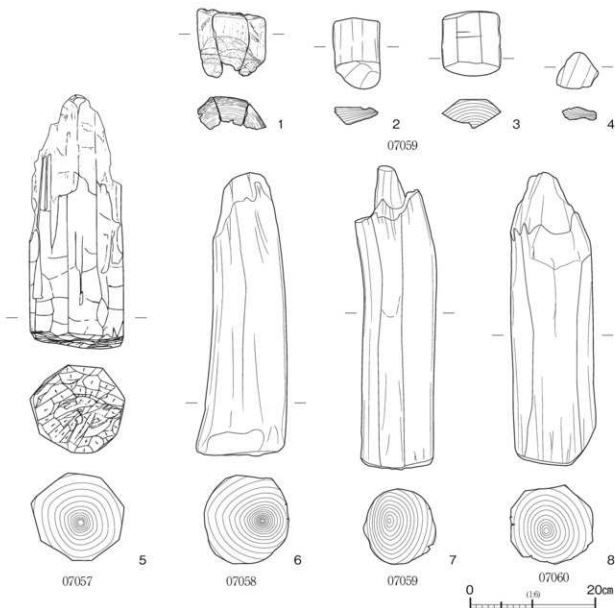


図101 07057~07060柱穴 出土遺物

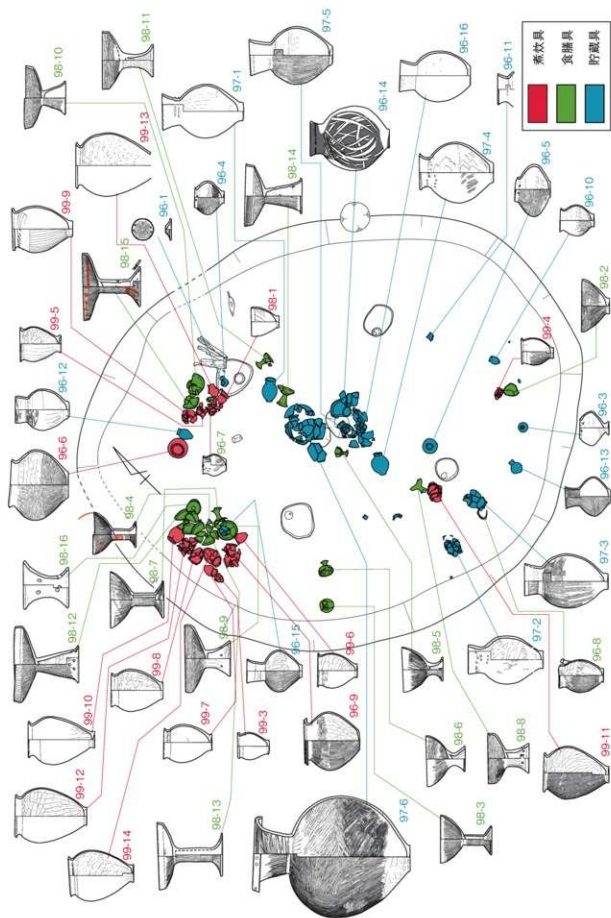


图 102 07056 竖穴建物 遗物出土状况

められる。被籠土器は炉の直上から出土しており、おそらく上面に吊るされていたものであろう。建物の西側には甕・高杯類が集中しており、しかも、煮炊具と食膳具の組み合わせを持つ土器群が少し間を空けた状態で南北に分かれる様子も看取される。また、これを基に建物内を南北に区分した場合、それぞれの土器群に赤彩高杯と水差形土器が1点ずつ含まれることになる。これらのことから07056竪穴建物の空間を推測すると、東側に出入口を設置し、炉を中心とする南北に区別された居住空間を設けたようである。07056竪穴建物の出土土器には柳描文がまったくみられない一方、水差形土器は残っていることから、第V様式の中でも古い段階に位置付けられ、本建物は弥生時代後期初頭頃に使用されていたこ

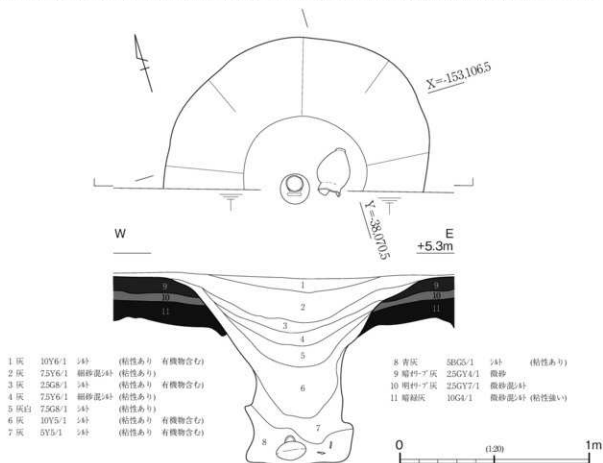


図103 07064井戸 平・断面

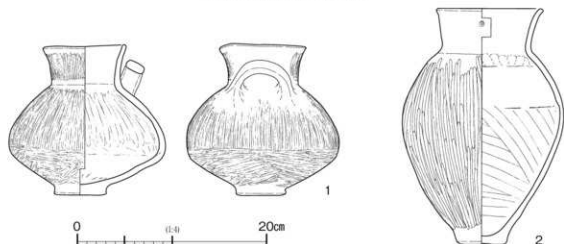


図104 07064井戸 出土遺物



图 105 07011 大蛙群 周边纵横平面

とがわかった。

07056堅穴建物は独立した高まり上で、なおかつ溝に挟まれた狭小な場所に単独で建築されており、さらに狭くて往来に不便な方向に出入口を設けている。建物の廃絶時には、内部に道具類が置かれたままであったが、一方で柱や梁、屋根等の構造材は一切遺存していない。これらの事実から考えられる幾つかの想定を提示し、調査の所見に代える。07056堅穴建物は、その特殊な立地条件から、集落内の住居ではないことが明らかである。地形的には不便な東側に開口部を設けたのは、その先にみえる水利施設や水路の上流を監視する目的が加わったものと推測する。おそらく、生産域内に設けられた作業小屋的なものであったと推察する。緊急の問題が発生したために建物から離れたものの、二度と戻っては来られなかったのであろう。原因としては自然災害や本拠への帰還、抗争の発生等が挙げられるものの、特定することは不可能である。ただし、土器がそのままの状態に残っていたことから、放棄した直後に土砂が流入したことは明らかであり、自然災害が契機となった可能性が最も高いといえる。建物の構造材が一切みつからない点については、人為的に撤去したとすれば、柱痕の残った点や上端に加工痕のみられない点が矛盾する。氾濫によって高まり周辺が湿地と化し、そこに近寄れなかったため、自然に腐朽して散逸したと考えるのが妥当であろう。

07055高まりの南西、X = -153.106、Y = -38.070付近において、07064井戸を検出した(図88、図版46-1・2)。井戸の南半は土層観察用トレンチにより失うものの、直径約1.4 mの円形を呈し、

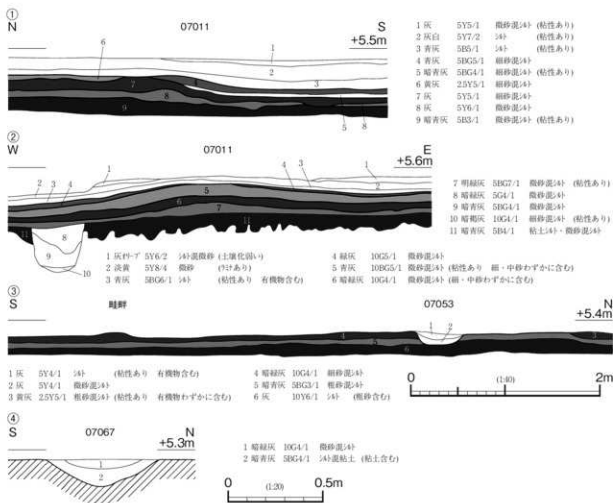


図 106 07011大畦畔・07053・07067溝 断面